

2011年9月第29号

人環フォーラム NO.29

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

対談：生きること、住まうこと

市川禮子／堤 修三 司会 間宮陽介

特集：映画をめぐって

加藤幹郎／新宮一成／高谷 修／伊從 勉

京都大学大学院人間・環境学研究科

『人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科（略称「人環」）は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索してゆくため、『人環フォーラム』を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけてゆきたいと考えています。



●目次——人環フォーラム29——

巻頭言	1
さまざまなルーツ	堀 智孝
対 談	2
生きること、住まうこと	市川禮子／堤 修三
	司会 間宮陽介
特 集：映画をめぐるって	
日本映画とは何か 芸術とイデオロギー／加藤幹郎	16
映画と睡眠／新宮一成	20
「眼には眼を、歯には歯ブラシを」／高谷 修	22
映画とまち ロメル『獅子座』を通して体験する50年代のバリ／伊従 勉	26
リレー連載：環境を考える	
シンクタンクの世界から考える生物多様性の保全／古賀啓一	32
サイエンティストの眼	
オオサンショウウオに迫る外来種問題／吉川夏彦	36
知の息吹	
思いがけぬ新史料の「発見」 —天一閣蔵明鈔本「天聖令」／辻 正博	38
研究論文	
「他所者」としてのユダヤ人—ジンメルとゾンバルト／恒木健太郎	42
社会を斬る	
現代史における情報操作について／西牟田祐二	46
フロンティア	
個性差研究の魅力／松永哲郎	50
時代と主体をつなぐ病跡学／牧瀬英幹	51
文学の周辺	
日本文学における都市と自然／西垣安比古	52
国際交流セミナーから	
スーダン—遠くて遠い国／インティサル・アブナグマ・モハメッド・サード	54
フィールド便り	
伝統宗教の「説得力」 —東チベット、ボン教復興の現場から／小西賢吾	56
子どもの生体リズムと運動／柴田真志	58
書 評	
濱田啓介著『近世文学・伝達と様式に関する私見』／中野三敏	60
勝盛典子著『近世異国趣味美術の史的研究』／松原 史	61
田中雅一著『癒しとイヤラシ—エロスの文化人類学—』／橘 健一	62
森 毅著、福井直秀編『一刀斎、最後の戯言』／伊藤公雄	63
人環図書	
小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』	
小倉紀蔵著『ハイブリッド化する日韓』	
戸田剛文著『世界について』	
鎌田浩毅著『マグマという名の煩惱』	
瓦 版	65

さまざまなルーツ

堀 智孝 — TOSHITAKA HORI



昨年の春、三五年の教員生活に終止符を打った。この間、春と夏の休暇は、専門分野の化学を離れて、日曜大工にいそしんだ。ある年の春、廃材を集めて犬小屋を造ったが、材料の割には作品が立派に仕上がりに、飼犬は懼れをなしてしばらく入居しなかった。大工の腕を自慢するにあらず。寺社仏閣から始まり身近な家宅の設えまで、木組みの妙に惹かれるのである。それゆえか、掘っ立て小屋に始まる人間の住居の進化に興味をそそられ、誰がどの時点でこの細工を建築に取り入れたのか、そのヒントは何処で得たのかなどと想いをめぐらしては愉しんでいる。なんでも、祖母の兄弟の一人に舟大工がいたとか、私が受け継いだ遺伝子の一六分の一は木削りの遺伝子だということになる。ちなみに、残りの遺伝子の大方は農夫、化学にいたってはほんの僅かである。

最近、家系図を作る人が増えているらしい。家系図といえはクン

タ・キンテのやむにやまれぬ壮大な先祖探し、『ルーツ』が思い起こされるが、趣味としての家系図作りには、先祖の特技や生業をたどること、今の自分が持つ性格や資質を読み解き、自身の現在を納得したり嘆いたり、あるいはまた、これから辿るであろう運命の一部を占ったりする楽しみがある。フォン・ヴァイツェッカー元ドイツ大統領の言葉、「過去に目をつぶる者は、未来に盲目となる」(『荒れ野の四〇年』)にどこか通じるものがある。家系図は現在の自分を知り将来の自分を推し量るよすがとなる、といったらしい過ぎであろうか。

私は、自然科学の名著『種の起源』、『大陸の起源』、『生命の起源』にあやかって、時折、ATP(アデノシン三リン酸)の起源を想い描くことがある。当方の寿命が尽きるまでには実現しそうもないが、何処かの誰かに是非答えを出してもらいたい。なにしろこの分子は、

生き物が生き物であるための根幹を握っているものなのだから。この分子を人工的に合成することはできるが、これが地球上で自然合成されたルーツ(化学機序)、あるいはその発端である起源(化学原料)はいまだ知られていないのである。

さて、わが『人環フォーラム』誌のルーツと起源はいかに。いま創刊号(平成八年九月刊)を手元に置いて、当時の編集会議を懐かしく思い出している。巻頭の「対談」から最後の「瓦版」に至るまで、人間・環境学研究科(人環)の教育と研究の活動を余すところなく広報できるよう、故福井勝義初代編集長のもとで、委員が知恵を絞った。各号のほぼ全ページに脚注が設けられ、限られた字数ではあるが、文系と理系を結ぶ結節点となっていて、文理両分野の研究者がその本領を失うことなく密に連携し、大胆な提案や果敢な新説を交換できる仕組みをもっている。

こうして本誌は今日を迎えた。地球に開花した文明を数千年に亘って遡り、それを持続させ深化させた要因を精緻に分析して根本原理を探り当て、この先の文明のあり方を考える、それが本誌の趣旨である。本誌に目を通すと、農林水産業(第一次)から情報通信業(第四次)までが密に連携する現代文明において、かりそめにも一者が他を凌いで優位を誇ったり、いずれか二者の間に主従の関係が構築されたりすると文明の全体が危機に晒されるという、底知れない怖さも見えてくる。毎号新しく提供される表裏一対のカバー写真も「人環」の趣旨に繋がっている。研究科創立一〇周年記念号(平成一三年三月刊)は英語版、人環の理念が海外にも伝えられた。本誌の編集は高橋義人第二代編集長を経て、現在の間宮陽介教授に受け継がれている。人環のルーツと起源をその本質に一番近い形で遺してもらっているように思う。

対談

生きること、住まうこと

——ある特別養護老人ホームの実践



●司会 間宮陽介
Yousuke MAMIYA



堤 修三
Shuzo TSUTSUMI



市川禮子
Reiko ICHIKAWA

ハイデガーは「建てる」を意味するドイツ語の *bauen* は「住まう」を意味する *wohnen* と語源を一にする、すなわち「建てることは住まうこと」という実存的解釈を示したが、ハイデガーの響みに倣うなら、「生きることは住まうこと」だとは言えないだろうか。現に英語では、生きるも住まうも、同じ *live* で表されるのである。連想をたくましくすれば、建てることは、生きること。住まうことを可能にする「住まい」を打ちたてることなのではあるまいか。市川禮子、堤修三のお二人による対談を企画して、タイトルを「生きること、住まうこと」としたのは、特別養護老人ホームがそのような住まいであることを予感したからであった。

対談は、ゴールデンウィーク明けの五月初旬、尼崎市にある「けま喜楽苑」の瀟洒な和室で行われた。「会話内容は空間構成と関連している」とは当ホームを設計監修した外山義氏の言であるが、氏の言の通り会話は弾み、特別養護老人ホームの抱える問題の本質に迫ることができたように思う。

●市川禮子（いちかわ れいこ）

一九三七年神戸市生まれ。社会福祉法人きらくえん理事長。保育所の運営を経て一九八三年特別養護老人ホーム「喜楽苑（尼崎市）」に入職。一九八八年施設長。一九九二年「いくの喜楽苑（朝来市）」開設。一九九五年阪神・淡路大震災後に「高齢者・障害者地域型仮設住宅」通称ケア付仮設住宅」を提案、実現。一九九七年「あしや喜楽苑」施設長。二〇〇一年全個室・ユニットケアの「けま喜楽苑」開設・施設長。二〇〇二年より現職。近著に『ユニットケアの食事・入浴・排泄ケア』（クリエイツかもかわ）等。二〇〇三年度朝日社会福祉賞受賞。

●堤 修三（つつみ しゅうぞう）

一九四八年長崎市生まれ。東京大学法学部卒業。一九七一年当時の厚生省に入り、老人保健制度（一九七九～一九八二年）や介護保険制度の創設実施（一九九五～二〇〇二年）などに携わる。二〇〇一年厚生労働省老健局長のときに、特別養護老人ホーム等の《個室ユニット化》を導入。二〇〇三年から、大阪大学大学院人間科学研究科教授。近著に『介護保険の意味論』（中央法規出版）がある。

●間宮陽介（まみや ようすけ）

一九四八年長崎市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。コモンズをはじめとして、都市政治領域の諸問題などを空間論の視点から構成しようとしている。主な著書に『モラル・サイエンスとしての経済学』（ミネルヴァ書房、一九九六年）、『ケインズとハイエク』（中央公論社、一九八九年）、『法人企業と現代資本主義』（岩波書店、一九九三年）などがある。

*本対談で使用した施設の写真は「けま喜楽苑」と「いなの家」（二〇頁）（撮影者 間宮陽介）。

けま喜楽苑

間宮 ひと月前、こちらにおじゃまして、園内を見学させていただきました。そのとき思ったのですが、このホームはどうも老人ホームらしくない。例えば学校には学校のイメージがあり、病院には病院のイメージがありますよね。その定型的なイメージが「〇〇らしさ」をつくっている。私は老人ホームを病院や学校のような「施設」のイメージで考えていました。しかしどうも違うんですね。廊下のところどころに小さなテーブルが置かれていて、そこで会話が弾んでいる。廊下のタペストリーも楽しいですね。園内が一つの街みたいで、「施設」のような冷たさがない。建物以前に、老人ホームのあり方というか、理念のようなものが違うのかなと感じたわけです。そこでまず市川さんから、『けま喜楽苑』の理念みたいなものをお話ししていただきたいのですが。

市川 私がこの世界に入ったのが二九年前です。勉強のためにあちこちのホームを見て廻ったのですが、本当にびっくりしました。ホームはみな四床室か六床室で、毎日の日課やアクティビティがちゃんと決まっている。プライバシーもろくにない。老人ホームというから、家だろう、家庭だろうと思っていたのが、全然違う。

間宮 私と逆のイメージを持たれていたわけですね。家庭的なホームというイメージ。

市川 ええ。家庭的な雰囲気の中かで、和気あいあいと暮らされるんだろうと思っただけなんですけれど、もう全然違っていた。五〇ぐらいの施設を見て廻ったんですけれども、すべてがっかりしましたね。高齢期っていうのは人間の一生の中で最も大事な時期だと思うんです。一生懸命働いて、苦労もして、高齢期を迎えた。その終の住処がなぜこんなひどい状況なのか、生きてきた甲斐がないじゃないか。人生の完成期である高齢期を豊かに過ごす、そういう環境が必要ではないかと思いました。特に認知症の人たちに対する対応はひどすぎて話にならない。悪いことしたわけじゃないのに、縛ったり鍵をかけて隔離したり。これって、人権問題じゃないかと思いました。喜楽苑はハードは良くないけれども、せめてソフト（ケア）ではがんばろうということで、いろんな実践を始めました。

皆さんと接していると、当たり前前のことですが、人生みな違うし、

一人一人が思ってたらしやることもみんな違う。そういうことにあらためて気づかされたわけです。十把一絡げのケアでどうするんだ、やはり、個別ケアでなければということで、まだ「個室ユニットケア」⁽²⁾なんて言葉がなかった時代に、いかに個別ケアをしようかと、そんなことを思ってた仕事をはじめました。

間宮 個別ケアといいますと？ 具体的には。

市川 例えばふるさとをたずねて旅行に行ったりとか。皆さん、もう一度ふるさとに行ってみたいとおっしゃるんですよ。尼崎市でしたから、かつては阪神工業地帯で、九州・四国から出てきて労働者になられた方々が多い。でも体が不自由になってとてもふるさとは帰れない。家族だけで車椅子の方と遠出するのは大変だろうと、喜楽苑が企画して、九州・四国へよく出かけました。

間宮 職員の方と？

市川 職員二人と、ご家族も誘って、その方のふるさとに行っただけです。ふるさとのご親戚に面倒をおかけしないようにちゃんとホテルや旅館をとって。私も二回ほど付き添って行っただけですが、施設にいらつしやるのとまるで違うんですよ。古いお友達も「帰ってきたんだね。会いに来たよ」と、

訪ねてくださる。本当によくおしゃべりされるし、活き活きされて。ふだんはあまりお話をさずれずに暮らしていらつしやる方も、それぞれにすごい人生があったんだということもふるさと訪問の取り組みでわかったんです。これってまさに個別ケアですよ。人生八〇年に思いを馳せる介護を」という合い言葉が生まれたのはここからなんです。



制度のどこに問題か

間宮 市川さんがこの世界に入られた頃は、ほとんどが施設型とい

(1) けま喜楽苑 社会福祉法人きらくえんの運営する特別養護老人ホーム（二〇〇一年、尼崎市食満に開設。設計監修は故外山義京都大学教授。同苑には認知症のグループホーム「いの家」が併設されている。同法人の運営する特養ホームとしては「けま喜楽苑」のほか「喜楽苑」（一九八三年）、「いくの喜楽苑」（一九九二年）、「あしや喜楽苑」（一九九七年）などがある。

(2) 「個室ユニットケア」 四床室、六床室などの多床室と違って個室を単位とするが、個室を一列に配置するのではなく、いくつかの個室を「ユニット」として生活単位化した施設（七頁の図面参照、そのような施設での介護のあり方について）。

いますか、私の言う「らしい」施設だったわけでしょ。私みたいな外部の人間には、どうしてもそうした施設がいいとは思われない。入居している人の顔はどこかさえないし、生命力も萎えてる。にもかかわらず、そのような施設に誰も疑問を抱かなかったのはなぜでしょう。施設をつくる人たちはそういった感覚を持っていなかったのだろうか。その辺はどうなんでしょうか。

堤 持ってなかったんだと思いますよ。特別養護老人ホームの制度をつくったのは昭和三八年で、そのとき厚生省はこれを病院の機能をもった施設、まさに医療施設にしようと思ってたんですよ。けれどそれは医師会に反対されてできなかった。ですから特別養護老人ホームなんです。おそらく名前は、例えば「療護施設」とかそういう医療っぽい施設というイメージで考えたんですね。特別養護老人ホームの「特別」がなければ養護老人ホームですけども、養護老人ホームの前身は生活保護法にあった養老施設なんです。

養老施設は生活保護法の低所得者のための施設ですよ。さらにその前身は何かっていうと、昭和四年にできた生活保護法の前身の救護法の養老院なんです。今でも養老院、養老院っていう人がいますけれども、それは戦前の救護法っていう低所得者・貧民救済のための施設の一つとされているんですね。身寄りのないお年寄りを救って面倒見てあげるっていう、そういう施設から来ているんです。ですから、どうしても上から目線で、市町村とか県とか行政が本人の希望に関係なく入所させる。今までの老人ホームをやっていた社会福祉法人の人にも今でもかなりそういう発想の人が多いんです。行政の手足としてやる、そういう仕組だったんですね。身寄りもなくてどうしようもないから保護してあげる、他で野垂れ死するよりはましだろうということを入れてあげるといふ発想でスタートしているんです。

間宮 それでもそういったやり方に疑問を持っている人もいたと思うんです。市川さんだってそうだったわけ。建物をつくる建築家にしたって、これじゃあ年寄りがあまりにもかわるいそうだとか。それがなぜ、その声が伝わって行政に反映されなかったのかという疑問をもつんです。

市川 やはり高齢者に対する差別意識といえますか、高齢者に対する意識がすごく低かったんじゃないかと思います。スウェーデンで

も差別がないわけじゃない、とどなたかおっしゃっていましたけれども、それでも日本とは格段に違って、一人一人の人間を大切にしようというのが北欧諸国の政治だし、市民もそうなんでしょうね。そこがなぜ日本はその方向に行かなかったか、私にはいまだに疑問なんですけどね。海外の方が喜楽苑に來られて異口同音におっしゃるのが、喜楽苑ではまず法人の理念から入るが、よそに行くとか制度の話ばかりで、自分たちがどう考えどう運営してるかという話が出てこない。北欧へ行くと、まず理念からとうとうと話をされる施設が多いですね。どこに違いがあるんでしょうね。

間宮 例えば、学校っていうのは日本では教師がいて、生徒がいて、上から下へ教えるという管理的な教育。それが日本の教育だったから、そうした性格が学校の施設にも反映されることになる。病院は医者と患者で、上から下へ治療を施すという上下関係になっていた。高齢者の施設の場合は高齢者が低く見られて、上から施してやる保護するという発想があったから、どうしたって建物自体が似てくると思うんですね。

堤 発想が同じだから老人ホームの建物も病院に似てきちゃったんですね。

個室化・ユニット化

間宮 建物がそこで生活する人たちの本来的なあり方とは合わなくなってきた、それがストレスになって学校ではいろんな問題が起った。高齢者施設でもやっぱりあったと思うんですよ、似たようなことが。そういった流れに対して、喜楽苑は別の方向を模索していった。転機はどういったことだったんでしょうか。

市川 私の特養ホームのあり方には最初から疑問を持っていたんですが、ハードのあり方については、まだ意識が低かった。《いくの喜楽苑》が二つ目のホームですが、ここではじめてハードから人権を守るということに挑戦しました。当時としては割と良いものが出てきたと思うんです。九二年のオープンですが、建設の話が持ち上がったのが九〇年ごろです。

そのころ北欧に行つて、方々を廻りました。当時、北欧のホームは七割ぐらいを個室化した段階で、三床室も結構ありました。カー

テンも何にもないところでおむつ交換がなされているといった具合で、いいところだけじゃなくて、負の部分もちゃんと見せてもらったんです。お金だけだったら日本のほうがずっとあるわけで、北欧がここまで来るんだったら、日本でもやれないわけがない、絶対にできると思いました。個室には素敵な家族の写真が飾られ、皆さんおしやれをしていらして、最初に行ったときは日本との落差にため息が出ましたね。ですけど、日本でもできると確信しました。帰ってきて持ち上がったのが、『いくの喜楽苑』の話だったんです。そこで個室にしよう。

またその頃、北欧では、古い施設も工夫して、一〇〇人定員でも二〇人くらいのユニットに分ける小規模化の動きが出ていたんです。それを知っていたので、『いくの喜楽苑』でも食堂とリビングをそれぞれ三カ所つくり、二〇人ずつぐらいの共用空間にしました。今でいうユニット化の試みをしたわけです。ところが全室個室は許可できないと県に言われたんです。個室だと皆さん寂しがると、オール個室化はいまの職員配置基準ではできないからそれはやめると。それと四床室と同じだけの補助しか出ないということで、役員会にかけたら、そんなにお金かかるんだったら四床室でいいじゃないかと言う役員さんたちも結構いました。それでやむなく、四床室を広めにとってカーテンのところに全部木の引き戸にして準個室化することになった。失敗したら木の引き戸を取り払えばいいわけですから。そういう試みをしたんですね。

間宮 木の引き戸というのは上が開いているものですか。

市川 残念ながら開いているんですけども、引き戸を完全に閉めると六畳くらいの個室にはなったんですよ。驚いたことに、認知症の方が大変落ち着かれたんです。外山（義）先生もおっしゃっていましたが、人間にとって、多くの他人と二四時間ずっと暮らさなければならぬ環境ほど過酷なものはない。人間には一人の空間、一人の時間というものが必要で、それが保障されてはじめて他人と交流する力が出てくる。このことがすごくわかりましたね。

すでに最初の四床室のホームのときから家具はもってきていたのだいたんです。その時は、認知症の方が自分の使い慣れた家具が身近にあったら落ち着かれるという北欧で聞いた話を実験してみただけでしたが、たとえ四床室でもその効果は大でした。六畳程度と

はいえ曲がりなりにも個室化された『いくの喜楽苑』で、何が変わったかと言ったら、認知症の方が落ち着いたことですね。認知症の方にも一人になる時間と空間があるんだと思いがちでした。人間である限り感じることはみな一緒なんです。だから「認知症の方にも」という言い方が良くなって、同じ人間と考えたときには当たり前のことだったんです。驚くと同時に確信を持ちましたね。

間宮 建築面では病院建築・学校建築はかなり法律で厳しいわけですが、老人ホームはもっと緩やかですか。

堤 似たようなものだと思います。廊下幅がいくらだとか、四床室だと何平米以上とかそういうのはきちんと決まっています。廊下がまっすぐじゃなきゃいけないとか、そんなことは決まっていなくても（笑）、幅などはきちんと決まっていますし、どうしてもそういうものをつくるときには建築コスト、あるいは国からの補助金がありますから、必然的にそうなるっちゃう。で、みんなの発想が、いまからすればなぜそういうことを思わなかったんだって言われるかもしれないけれども、市川さんはずっと福祉の世界一筋じゃない。一般的な感覚で見ておかしいなって思われたのでしょうか。スウェーデンなんかに行かれて、外の目から見てみたらやっぱりおかしい、自分でやってみたらますますおかしい。でも中にはずっとそれ一筋っていう人もいるわけですね。そういう人は業界の固定観念で、おかしいっていう発想はなかなか出てこないんですよ。よっぽど外から刺激がないと。

間宮 おかしいという発想が出てこないっていうことは、そこで生活をしている高齢者の様子をみていてもこれがあたりまえだと思うわけですね。

市川 そうですよ。しかもよくやっているとってらっしゃる。

間宮 年寄りだから元気がないとかね。

堤 それとその制度的なことに頭の中が締め付けられてるからね。



（3）外山（義）先生 外山義（一九五〇—二〇〇二）。岡山市生まれ。スウェーデン王立工科大学研究員、病院管理研究所（後の国立医療・病院管理研究所、東北大学を経て、一九九八年、京都大学大学院工学研究科教授。二〇〇二年、没。「おらはうす宇奈月」「ケアタウンたかのす」「風の村」などの設計を手がけ、「けま喜楽苑」で医療福祉建築賞受賞。著書には『クリッパンの老人たち』（ドメス出版、一九九〇）、「自宅でない在宅」（医学書院、二〇〇三）などがある。

いろんなことに縛られて、主観的には「一生懸命やってる」と思うわけですね。それはそれで否定しませんが、だからなかなかこういう発想が出てこなかったんだと思います。

市川 福祉系の研究者の方々もそうだったんでしょう、個室ユニットケアの制度に結びつくような動きがなかった。むしろ建築系に外山先生のような方がいらして、すばらしい調査によって国をその気にさせた。

間宮 外山さんが個室中心を考えたのは、建築家としての考えもあることながら、他方では人間の心理とか高齢者のもつ歴史の問題を考え抜いた挙げ句でもあったと思うんです。人間や社会の襲にまで入って考えることが出来る人だと思うんですよ、彼は。現場に行つて緻密な調査をやりますよね。我々社会科学をやっている人間は、社会という目に見えないものを扱うから、本から得た知識で理屈を組み立てる。どうしたって観念的になりやすいんだけど、外山さんの場合には現場があるわけで、それを非常に細かく観察するんですね。それはもう驚くほどです。

その一つの例が多床室での人間観察です。多床室だと会話が弾んで、和気あいあいの空間がつくり出されるというのが通説だが、本当にそうだろうか、むしろ逆ではないか、という仮説を立て、その仮説をもとに現場に臨むわけです。そしてほとんど分刻みに入居者の行為や動作を書き留める。案の定、話は弾まないし、みんな互いに背を向け合つてベッドに横たわっている。つまり眼に見えない壁をつくつて、ヴァーチャルな個室の中に閉じ込められているんです。外山さんの場合には仮説が先にあるんです。その仮説がどこから出てきたかという、それは経験からかもしれないし、あるいは自己反省からかもしれない。仮説と現実のギャップが彼を現場の観察へと向かわしめるのですね。

市川 堤さんはご存知だと思うんですけど、外山先生には子どもの頃からの体験がすごくあるんですね。お父様が牧師をなさっていて、教会に高齢者の方々がよく来られて、かわいがってもらったそうです。高齢者のすばらしさを子ども心にわかるようになったとおっしゃっていました。そういう方々がひどい状況に置かれているというのでずいぶん悩まれて、福祉先進国といわれるスウェーデンに行かれたと聞きました。

堤 そうですね。教会にくる高齢者の人たちは、いわば秋の収穫期を迎えた人たちです。秋って黄金の秋ですよ。輝きの季節に入つた人たちのために、高齢者の施設をみるとまるで冬の季節になっている。枯れて色彩を失つたような。

市川 原点はその辺におありなんじゃないかと私は思ってるんですけど。

なぜ個室か

間宮 私どもクリスチャンでも何でもない者が施設をみてもおそろしく似たような感じをもつんじゃないかと思うんです。そこで、個室の意味についてお聞きしたいんです。個室というところどうして一人で閉じこもる部屋というイメージですね。個室は私的な領域、私的な空間で、「私」という日本語はあまり良いニュアンスでは語られない。私利私益とか我利我利とかそんな感じで、滅私の美德が強調されたりする。

しかしちがう見方もあります。例えばフェミニズムの元祖ともいわれるヴァージニア・ウルフが、「自分だけの部屋」というエッセーの中でこう言っているんです。女性が自立するには年に五〇〇ポンドの収入とドアに鍵のかかる部屋を持つ必要があると。多くの人たちが一緒にいるようなところでは自立することができない。同じことは老人ホームの高齢者についても言えるのではないですか。鍵のあるなしは別として、自分の部屋があつてはじめて自分を成り立たせる。ところが通念では、一人だと引きこもってしまう、寂しい思いをするということになる。しかし通念とは反対に、個室で自分の居場所を持ったほうが社会的な広がりも出てくる。この点については現場で多くの実例があると思うのですが、少しお話していただませんか。

市川 私は「私」があつてはじめて「公共」があると思っています。自分自身の自己が確立されてはじめて人と交わる社会性が発揮されていくわけで、「私」が無かつたら、怖い方向へ行ってしまうこともあると思います。やっぱり、個があつてはじめて社会が広がりを持つていくんじゃないかと思っています。《けま喜楽苑》にいらつしやる方々は、物理的な話ですけども、個室になつて夜眠

れることが一番ありがたい、とおっしゃっています。周りの人のくしゃみやごそごそで起こされないということで体調がよくなっていかれ、体調がよくなると今度は精神まで生き活きしてこられます。一年目は、まだ平均年齢が今よりは若かったので、半数の方々の介護度が下がりました。

間宮 他方では社会があつてはじめて個があると主張する人もいます。鶏が先か卵が先かですが、私は公共性の問題を考える場合には、少なくとも同等のウェイトで「私」、プライベートの問題も考えなければいけないと思っています。外山さんの設計監修したこの《けま喜楽苑》を見て意を強くした次第です。公的空間と私的空間の相互作用を考えなければいけないのもちろんですが。

市川 私は昔、保育園の仕事をしてたんですが、二つ三つの子どもたちがあるときふっといなくなるんですよ。そしたら、階段の下とか人が来ないところに隠れてじーっとして、なんだか自分なりに楽しんでるふうで。そういう姿を見て、二つ目の保育園をつくる時には、心ゆくまで一人になれる隠れ家みたいな空間を設計に取り入れて欲しいと頼みました。子どもだからいつもわあわあとおんなで群れているのが好きかと思ったら、そうじゃなくて、子どももぼつと一人になりに行く。意外でした。そのころ、二〇世紀初頭のイギリスで保育学校を創設したマクミランの本を読み、「保育とはスペースである」ということを言い切っておられることに、意を強くした覚えがあります。子どもにしてそうですから、八〇年生きてきた高齢者においてはなおさらです。「私」を確立できる空間とそれを基本にした社会空間、そうした空間が必要だと思います。

行政を動かす

間宮 七〇年代ごろから、アメリカやイギリスの学校でオープンスクールの試みがなされました。学校の中の閉じた空間を開いて、一つの街みたいにしようにという試みです。日本にも導入されて、成果を上げているようです。ただ空間を開きすぎると、生徒の居場所がなくなるんじゃないかという気もするんですよ。市川さんがおっしゃったように、小さな子どもでも一人になりたいと思うことがあるわけですね。オープンスクールは社交の場はつくるが、一人だけ

の空間を閉め出していくのではないか、そういう懸念があるのです。市川さんの特養ホームの場合には、一人一人の居場所をつくったうえで、パブリックな空間をつくっていくという発想ですね。そこで堤さんにお聞きしたいのは、多床室の施設は、こういうと失礼ですが、どう見たって官僚的・お役所的な発想のなせる業だっている気がするんだけど、堤さんはこれを改めようと尽力された。堤さんは外山さんと交流があつて、彼の考えに共感するわけですが、それは個人的な共感ですか。それとも厚生省の方針からの共感ですか。

堤 まあ、両方ですかね。もともと、こういう分野の専門をしているジャーナリストの方などから、個室にしなさいっていつも叱られてたんですね。個室にしなさいと一九九〇年代前からずっと言われてたんですけども、お金の問題だとかいろいろあつて踏み切れなかった。そういうときに外山さんの試みが目にとまったのです。彼の個室主義は、個室が単純に横並びしているんじゃないで、ユニットになつていて。そこところで現実的な問題もかなり解消するんじゃないかと思いました。個室が一行に並んでいる場合には職員の動線が長くなって、職員をたくさん配置しなければいけない。そうすると自治体が税金でまかなう運営費も高くなる。旧自治省から交付税でちゃんと手当てして個室のホームをつくってやるって言われたこともあるんですけども、運営費を出すのは厚生省ですから、悔しいけれどお断りした。そういう前史もあつたわけです。

そういうときにユニットであれば、職員はそこに張り付けばいいわけです。動線もそれほど長くない。ユニット化すれば労働量が増えるように見えるけれども、職員の労働負荷もあんまり変わらない、そんな実証データを外山さんが出されたわけです。これだったらいいける、というので、厚生省全体っていうよりも、僕の部下だった数人の連中がこれをやろうというので、僕も大いに賛成して大蔵省の説得にあたったんです。外山さんの論文を持って行って、これを読めと言って。

間宮 反応はどうでしたか。

堤 まあそのために日頃大蔵省と仲良く付き合っているわけですから（笑）。当時の担当者とは良い介護保



「けま喜楽苑」平面図（二階部分）

除制度をつくろうと志を同じくしていましたね。こうして大蔵省を巻き込み、さらに政治も説得せにやいかんということで、総理を辞めたあとの橋本龍太郎さんの事務所にも行って、説得しました。

間宮 厚生省がこういったかたちでやりたいという。実際にはどういった方向で実現しようとしたわけですか。

堤 当時は整備費、建物を建てるための補助金がありますから、その補助金をこれからは個室ユニット型でなければだめですよというふうに決めちゃうわけです。今までの建物をすぐ改造することはできないですから、これから新設するのはみんなこれですよという原則を立てる。与党の先生方も野党のメンバーもバスに乗つけて（外山さんが設計した千葉にある個室ユニット型の）《風の村》に行き、見てもらうわけですよ。そこで外山さんが説明すると説得力があつて、「ああなるほど」と。当時、ある党の議員で理系出身の人がいて、「理系だから、こういう実証的なデータで説明されると弱いんだよねあ、説得力あるよねあ」と言われたことをよく覚えています。そういうことをしながら押し切ったんです。ちょっと押し切りすぎて今頃、反動がきてますけどね。

個室化は高くつくか

間宮 個室中心にするとコストはかかる、人員も当然増えるという通念があるわけですよ。その辺に対してはもちろん行政側から、もっと押さえてくれるというような横やりも入るでしょうしね。

市川 うちの従来型のホームでも一応不十分ながらユニットケアをしているんですよ。確かにユニットケアをすると、《けま喜楽苑》と同じぐらいの職員配置が必要になります。ですが、職員たちの労働負荷はむしろ少ないんですね。朝御飯が象徴的です。これまでの集団ケアですと、大食堂に全員を集めようと思ったら、やっぱり一時間ぐらいかかりますね。早出の職員と疲れ切った夜勤職員とで皆さんを大食堂にお連れするのは一大作業。しかも最初に食堂に連れてこられた方はそこで一時間も待つわけです。ところがユニットケアですと、好きな時間にそれぞれぼつぼつ起きて来られて―早起きをする方もいれば、寝坊の方もいて、九時頃起きてくる人もいる―職員一人で十分なんです。《けま喜楽苑》の朝食は部屋を出たと

ころにある準個室空間といわれる居間で摂って頂くので動線はゼロに近く、入居者、職員ともに楽なんです。昼食や夕食は食堂に行く人が多いですね。

間宮 ユニットごとに食堂があるんですか。

市川 食堂は一フロア三ユニットの二五人に対して二つずつ。従って一〇数人が集う食堂です。

間宮 部屋を出たところで食事してもいいし、食堂でとってもかまわない。自由に選べるわけですね。

市川 どちらでもいいんです。朝食は先ほど言いましたようにぼつぼつ起きてこられるので、職員が一人いれば対応できるんです。また個室には洗面所やトイレもありますから、移動しなくて良い。個室だからむやみに人手がかかるというわけではない。そうじゃないということ、私たちの実践が示していると思います。

間宮 通念というものが染み付いていて、個室にすると費用・人員を要するとか。実際はそうじゃないということを外山さん、一生懸命実証されようとしたわけですね。

堤 現場の実務が大変になると思われていたんですね、通念がはびこってますから、人手はかかるし、コスト高にもなると。だから個室がいいといわれても、なかなか乗れないわけですね。そこを外山さんが、なかなか賢いっていうか、政治家っていうか、「そんなに大したことないよ、あんまり変わらないよ」というものだから、財務省も聞く耳を持つ。説得術に長けているんです。

間宮 一九三〇年代の不景気のとき、従来 of 経済学者は、こんな時には政府は節約しなきゃいけない、けちけちなければいけないと言った。これに対しケインズは、いや逆だ、こんな時こそ政府は赤字覚悟で金を使えと言って、それが功を奏するのです。通念・通説を批判するには、逆こそ真なりというのがいちはん効果がある。外山さんもおそらくそうだったんでしょね。

堤 それはもうほんとに上手にかつ実証的に言われるものだから、説得力があるんです。

外山さんの人となり

間宮 外山さんの書かれたものには、「生活のかたち」とか、よく「か



たち」という言葉が出てきますね。食事をする、入浴するというのは栄養物を摂取することではない、人体洗浄でもない。全部、プロセスがある。このプロセスの全体が生活のかたちを形づくっているわけです。ところが従来の施設ではなかなかそうだったかたちがつくられない。それが入居している人に好ましくない影響を与えていることなんですね。

この生活のかたちをつくるには、人生におけるなんらかの連続性が必要になると思うのですが、認知症の場合、人生の記憶がだんだん薄れてきますよね。でも人間ってというのは不思議なもので、小さいころの記憶って結構残っている。人間の脳にはおそらく記憶の層のようなものがあって、歳をとるにつれて直近の上の層は剥がれ落ちていくのに、底の方はずっと残ったまま。むしろ、三、四歳ごろから小学生の頃の記憶はかえって鮮明によみがえってくる。春の山道に漂う若木の甘酸っぱい匂いとか、沼の小道を裸足で歩いていたときに踏んだ葉のぬるっとした感触とか。認知症の人もそういう記憶の層を持っているわけですね。外山さんは記憶の基層を活性化させようとする。残されている能力や記憶を、治療はできないかもしれないけど、喚起しようとするわけです。空間のあり方を改善することで、症状を悪化させないようにすることは可能だと言っていますね。

市川 さきほど「私」の話をされましたよね。人々がどのような暮らし方をしてきたか、それこそ暮らしのかたちについていうものがそれぞれにあると思うんですけど、外山先生はそれをきちんと皆さんに保障されようとしたと思いますね。外山先生自身が強い「私」をもっておられた。食事はゆっくり食べたいとか、敬虔なクリスチャンであるとか。つまり「私」の「文化」をもっておられたと思うんですよ。また、ご自分の文化だけでなく、高齢者には高齢者特有の文化がある。先生は一人のクリスチャンとして、人間の魂をどう満たすかというようなことも考えておられたんじゃないでしょうか。堤 直接聞いたことはないけど、やっぱりクリスチャンとして何か核があって、それがこういうところに結びついてるんじゃないかというふうに思いますよね。

市川 先生が亡くなられたあとに編まれた『対話―魂の器をもとめて』という追悼集がありますが、書名に「魂の器」という言葉が使

われているように、外山先生と親しかった人たちは、先生が高齢者の建物に「魂の器」を創ろうとされていたと感じておられたんですね。

間宮 魂というものをすごくお感じになりましたか。

市川 感じました。《けま》の最後の追い込みのときには、こちらに結構来られて、泊まっていたこともあるんですけど、教会をすぐ探してくれと。日曜日には必ずここから近くの教会に行かれました。やはりクリスチャンだったんだなあ、建築と信仰が深く結びついていたんだなといまさらながら思います。

公と私のあいだ

間宮 確かに信仰と建築が結びついていたでしょうけれど、外山さんにはもっと多面的な面があったように思います。先ほど堤さんが言われたように政治的な交渉にも長けていれば、酒も強い。外山さんは、あるシンポジウムの懇親会で一言二言言葉を交わしたただけなんですけど、フットワークが軽そうなお、陽気で気さくな方でしたね。彼においてはそうした多面性が実によくバランスを保っている。

外山さんは中間的な領域というものの重要性を非常に強調していますよね。パブリックな空間と

プライベートな空間を二項対立的に対置すると、大きな問題が生じてくる。その間というものがとても大切なんです。例えば、セミプライベートゾーンやセミパブリックゾーンというようなものが。空間と空間の間の境界が大事だっていうことは私も常々思っていて、外山さんの本を読んで、ああなるほどな、と意を強くするわけです。喜楽苑も中間的な領域がとても重要な役割を果たしています。それがあるとないではずいぶん大



(4) 『対話―魂の器をもとめて』外山の没後に刊行された追悼集。身体を「魂の器」とする考えは聖書にも見えるが、外山自身が建築を「魂の器」と呼んだかは定かではない。しかし追悼集の浅井靖子の文章（氏は当時NHKディレクター）によれば、外山の死の直後に放映された「もうひとつの家を 建築家 外山義（NHK教育テレビ「この時代の」の当初のタイトルは「魂の器を創る」であったそう、死の数日前に会ったとき、外山はこのタイトルを「これからの、自分の方向性を示された気がする」と言っていたそうである。

きな違いがあるのでしょね。

市川 全然違いますね。

間宮 『人環フォーラム』二八号で「境界を科学する」という特集を組んで、私も「境界から空間へ」という一文を書きました。空間を構成するさい、中間的なゾーンをないがしろにしてはいけない、特に公と私の境界は重要だというのが大体の主旨です。公が膨らんでいくと私が小さくなり、私が肥大化すると公が縮小する。近年、公共性が論じられる割には、「私」は語られない。「私」を犠牲にした公的空間を、私はファシズム的空間と呼んでいるんです。私的領域が浸食されて、国家Ⅱ公が私的領域に土足で入り込むようになる。家庭の中にいわば監視カメラをつけるんです。子どもがカメラの代わりで、親の行状を子どもに密告させる。ヒトラーの批判をしようものなら、それこそ強制収容所送りです。やっぱり中間領域を整えないと、公と私がしつくり咬み合っていないわけです。公と私の境界を建築に生かさなきゃいけないとは最近よくいわれるんですけども、外山さんの場合には、現場での経験から境界Ⅱ中間領域の重要性を導き出した。

市川 外山先生はよく縁側の話をされましたね。かつての日本では縁側があつて、地域とのつながりだつたて。

間宮 ある外国の建築家が東京月島の長屋の路地を見て、これはなかなかいいってことを言う。それは西洋の人が物珍しげに言うんじゃない。長屋の路地の幅は大体三メートルなんです。これが政治家だつたら、「プライバシーが保てない」「火事のときにはどうするんだ」ということになるのですが、その建築家によれば、三メートルには必然性がある。これより広いと、路地は通過路になつてしまふ。三メートルだから路地が親密な空間になり、外部空間でありながら内部空間のような性格を獲得しているんだ、とこういうわけです。

堤 セミプライベートなんですかね。やっぱり公と私の間みたいな感じがあつて。僕らは人間の体の範囲が自分の人格の領域だと思ふけど、どうもその周りにアトモスフィアがあつてそこにも人格が及んでるんじゃないかという気がする。それらが重なり合つて、セミプライベートゾーンをつくったり、セミパブリックゾーンをつくったりする。これまでは個人と公共の領域を完全に分けてきたけれど

も、個人の領域も公共の領域もじわじわと広がって、相互に浸透し合うというか、重なり合ってきていると思うんですね。僕は外山さんの四つのゾーンの議論を聞いたときになるほどなと思いました。どういう人だつ

て、金持ちだろうが貧乏人だろうが、これらのゾーンは人間すべてに対して保障されなければいけない。だから個室ユニットケアも例外なく絶対やらなければいけないと思つたんですね。市川 堤さんが積極的に進められたから、外山先生も本当に喜んでおられましたね。いつも堤さんのお話されてましたね。

間宮 五二歳で亡くなられたのは残念でした。その後外山さんの考え方を発展させて建物や施設をつくっている人はおられますか。市川 いらっしゃらないことはないんですけども、なぜかちよつと違うんですね。

堤 国の方針に沿って、かたちだけは個室ですよ、ユニットですよ、と体裁を整えるんだけど、実際を見てみると、ドアは開けっぱなし、私物何もなしっていうところがたくさんある。

市川 個室ユニットにもかかわらず、わざわざ食堂で一堂に会して食事をさせているところもあるんですね。それはまあ、運営の大きな間違いだと思えますけれど。個室ユニットでもね、空間の大きさっていうのが考えられていなくて、郡部に行ったら個室ユニットってめちゃくちゃ広いんですね。天井は高いしね。それちよつとちがうだと。暮らしのサイズであるじゃないですか。その暮らしのサイズが全然考えられてなくて。広くて大きいをつくれればいいというものでもない。なるほどそれでも、かたちは個室ユニットですけれども。

間宮 空間に対する感受性なんですよ。私は大学では副業として都市や空間のことをやってるんですが、学生たちによく言うのはね、日ごろ見慣れている建物でもこれはどうも違うなと思つたら、なぜそうなのかということを考えて。気に入っている場所、気



外山義氏（外山真理氏提供）



(5) 四つのゾーン プライベートゾーン（入居者個人の所有物を持ち込み管理する領域）、セミプライベートゾーン（プライベートゾーンの外部にあって複数の利用者により自発的に利用される領域）、セミパブリックゾーン（基本的に集団的かつ規律的行為が行われる領域、ただしプログラム間の空白時間には個人の自発的行為も行われる、パブリックゾーン（内部居住者と外部社会の双方に開かれた施設内領域）の四つの領域のこと。「自宅でない在宅」参照。

に入らない場所を考えさせる。さらに、なぜ気に入っているのか、気に入らないのか、自己分析してみろと。つまり感覚や感受性は外部世界のたんなる受容器ではない。感覚には出所があるわけで、それを明るみに出せということなんです。個室中心でも魂が入って入るものもあれば、そうでないものもある。感受性がそれを察知させるわけですが、その感受性がうまく機能していない。自己反省する力が足りないのかな。建築する側もそうで、建築行為を芸術作品の創作だと考えているふしがある。ちょうど画家が自分の作品に銘を入れるように、建築作品も建築家の銘によって世に流通する。観光名所となって、みんなが写真でパシャパシャ撮る。こうしたことに批判的な建築家がいらないわけではないが、どうしても主流たり得ないんですね。

阪神・淡路大震災のころ

間宮 東日本大震災が起こって、政府がエコタウン構想を打ち上げたとき、どうも違うんじゃないかと思いました。そのとき脳裏に浮かんだ建築家が二人いて、一人が外山さん。個室を中心にして、しかも自分の個室に思い出の品々を持ち込む。家具を持ち込んだり、絵を貼ったり、写真を貼ったりする。過去の歴史や記憶につなげ、そのことが入居者の生命力をかき立てる。大震災の被災者はまさしく家族や町の歴史をなくしてしまっただけでしょ。断ち切られた歴史の糸をつなぎ止めなければいけないのに、エコタウン構想はその点にまったく無頓着なんです。住み慣れた家を離れて老人ホームに入る高齢者、家族や町の歴史を断ち切られて避難所を転々とする人たち。事情はまったく同じなんです。連続性を断ち切ってつくられるエコタウンは被災者にとっては最後の避難所になりかねない。

もう一人がクリストファー・アレクザンダー⁽⁶⁾というアメリカの建築家。外山さんと感性がよく似てる人ですね。名古屋に戦後つくられた低層の大型団地があって、九〇年代に市が建て替えを計画した。まあ例によって例のごとし、見た目はいいんだけど、こんなこと住めるのかしらと思うようなプランを出してくるわけです。それはおかしいというので住民たちがアレグザンダーを招いて、独自の設計案をつくらうとする。その模様が九〇年代の初めにNHKで放映

されました。アレグザンダーが各戸を回って「あなたは何を残したのか」と聞いてまわるのが印象的でしたね。ある人はこの庭の木は小さいときに植えられたもので、思い出が詰まっている。そう言って、その木をバックに撮った一枚の家族写真を見せるわけ。それに対して、市の計画案は全体を一掃して「光と空気と緑」の団地を新設しようとするものでした。東日本大震災後の地域復興構想にもそれに近いものを感じたわけです。

もう一つ言わせてもらえば、避難所には仕切がなく、個人や家族の領域が欠如しているのも問題です。天皇、皇后が避難所を訪れたときだけ水色の衝立を立てていましたが、あとは被災者任せ、せいぜい段ボールで仕切る程度です。どうしても国が衝立を用意しないのか。それほど費用がかかるわけでもないでしょうに。衝立がないほうが会話ははずむだろう、悲しみが紛れるだろう、そんなふうに考えているのではないですか。悲しみっていうのは基本的には個人のものです。ところがどうも悲しみがパブリックなものになりすぎちゃって、がんばろうとか、なぐさめあおうとか、そういうふうになって、悲しみが一人一人のものになっていないような気がするんです。喜楽苑の話を伺っていると、どうも相通じるものがある。市川さんにそういった被災地についての話はありませんでしたか。

市川 いろいろなお話がありました。特に多くのマスコミが阪神・淡路の経験を取材したいと一時は殺到しました。こちらでも職員たちを東日本の被災地へ来週からボランティアとして交替で派遣することになっています。

ここで阪神・淡路大震災当時のことを少し。阪神・淡路大震災直後の《喜楽苑》は、ライフラインの途絶と交通の途絶により三分の一の職員が出動できないなど、騒然とした状態にありました。一週間が経ってライフラインが復旧し、また全国からボランティアが駆けつけてくれたり、自宅が全壊した職員や家族のために借家を借り上げて出勤体制を整えるなどして、一応落ち着きましたので、地域支援を始めました。学校の体育館等近隣一四カ所の避難所への支援も一〇〇回ほど行いました。

間宮さんがおっしゃった東日本の避難所の状況には私もショックを受けました。阪神・淡路大震災の時には、プライバシーの問題もそうですが、トイレが高齢者・障害者にとっては致命的で、段差の

(6) クリストファー・アレグザンダー オーストリア出身のアメリカの建築家、一九三六年生まれ。「都市はツリーではない」(一九六五)において近代都市計画を批判し、都市の本質をそのセミ・ラチス構造に求めた。多くの建築を手掛けるほか、『パターン・ランゲージ』(一九七七)、『時を超えた建設の道』(一九七九)『The Nature of Order』(四 vols)など、多くの著作がある。

ある自衛隊のトイレが運動場にずらり。夜は寒くて使えたものではないですから、やむなく自分で水分の制限をされる。これでは危ないと思いました。高齢者・障害者はここから早く救い出さないといいけないと思います。大震災の二週間後に兵庫県庁へ飛び込んで、高齢者・障害者の「ケアつき仮設住宅」の建設をお願いしたんです。

間宮 「ケアつき仮設住宅」を最初につくったのはどなたですか。

市川 「ケアつき仮設住宅」は阪神・淡路までは全くなかった仮設住宅で、日本では私が初めてアイデアを出した事になっていきます。その後、宮城県の浅野知事（当時）も被災地に入って同じアイデアを出されたのですが、私は大震災（一月一七日）の一〇日後に市に提案し、二週間後の二月一日に県に走ったので、時間的には早かったんだと思います。北欧のグループホームをいくつも見ていたので、ぱっと閃いたのです。

震災後の過酷な環境の中で、亡くなった人が九二〇人もいたんですよ、大震災では助かったのに。いわゆる震災関連死です。不安が的中してしまいました。何を措いてもグループホームのようなケアつき仮設住宅をつくって欲しい、そう県に直訴しました。

間宮 それが三反田（尼崎市）の？

市川 いいえ。三反田はもつと後で、当時外山研究室にいた三浦（研）先生が関わられたものです。私の提案でできたのは若屋のものが最初で、被災地では最も早く、あの年の四月でした。合計四棟です。三年後に仮設住宅を撤去するさいに、ケアつき仮設を残したいというので尼崎市が新たに建設したのが、三反田のケアつき仮設住宅なんです。

間宮 阪神・淡路大震災の時には、お仕着せのものではなく、きちんとした仮設住宅をつくらうとする動きがあちこちで出てきたわけですが、今回もそういう動きは出ていますか。

市川 私のところは、千葉・生活クラブ理事長の池田（徹）さんから、問い合わせがありました。ケアつき仮設の設計を教えて欲しいと。UR（都市再生機構）からの依頼だったそうですが、ケアつき仮設の細かなところはURにも伝わっていませんでした。もう一六年前のことですから。それで、ケアつき仮設の設計で注意しなければいけない点を細かに記し、当時の図面を送ったんです。

ふたたび当時の話に戻りますが、ケアつき仮設が開設したことで、

私たちの法人も助かりました。四月開設をめざして建設中の《あしや喜楽苑》も被災し、最大一メートルも傾いて、四月から働く予定の四〇人が働けなくなり困っていたのですが、全員ケアつき仮設のスタッフとして雇用することができたからです。

そんなこんなでケアつき仮設での二四時間ケアが始まったんですが、兵庫県はお金の問題もあって二四時間型は約二〇〇戸しか建てられなかったんですね。神戸市が一五〇〇戸、「ケアつき仮設」と

いう同じ名前で建てたんですけれども、昼間だけ巡回するという方式でした。当然のことながら二四時間スタッフがはりついている方が効果が上がりますので、私どもの「グループホーム型ケアつき仮設」が評判になったんです。私は北欧のグループホームを知っていたので、まず環境が大事だと思い、観葉植物を沢山入れました。せっかくの全室個室なのでトイレも洗面所も収納スペースもすべて備えてほしいと頼んでいたのですが、それもすべてなかったんです。エアコンも付きませんでした。

四月に開設すると、どつと入って来られた。ボランティアの方々を集めて手作りの食事をつくってもらったら、皆さん、ご飯や味噌汁の湯気のおいさに泣かれたんです。地震で薬を持ち出せなかった人も多く、最初は頻繁に救急車を呼びました。あれやこれやと大変だったんですけれども、二、三ヶ月したら「こない住まい方はない」と、皆さん見違えるほど元気になりました。家族を亡くした人もいましたので、音楽会を開いたり、有馬温泉にも行ったり、心のケアに努めました。

一般の仮設住宅は、都市中心部には土地がないのでかなり不便なところにも建てられたんですが、高齢者・障害者のケアつき仮設は地域の中に建てるべきだと主張して、それが実現したんです。それにここは住宅ですから何の規制もないわけですね。特養ホームの場



合は一般的には規制が多いのですが、ケアつき仮設は住宅だから全く自由。それなのに二四時間、誰か一人は棟内にいて見守ってくれる。

芦屋の場合は四棟あり一棟に一四の個室が配されました。真ん中に広いリビングルームが設けられたので交流も盛んでした。「いつでも一人になれるし、いつでも誰かと会える」というキャッチフレーズができ、皆さん本当に喜ばれました。家族も来やすいですしね。お店がぼつぼつ再建され出すと、あそこのコロケは美味しいから買いに行こうとか、とても元氣になられて。アンケート調査をする時、こういう住まいを望んでいたという回答が八〇パーセントにものびりました。

間宮 設計はいろんな方が知恵を絞って？

市川 出てきた設計図に足りないところを加えたり、浴室、トイレ、ケアに当たる職員の部屋などについてアドバイスしたりしました。いい経験になりました。

間宮 それは何年間ぐらい？

市川 三年二ヶ月です。ケアつき仮設での生活は私たちケアする側にとっても楽しかったですね。密着してはいても、基本は住宅ですから、皆さん、それぞれの生活をしていらっしゃる。ケアする側もされる側も、住民という意識で、水平の関係で生活しましたからね。

管理 vs ケア

間宮 そうですね。確かに垂直関係じゃなくて水平的にやると、介護する者・される者の関係じゃなくなってしまうんですね。ケアっていうのはおそらくそういうものだと思うんですね。上の者が下の者に対して上から目線で介護するのがケアじゃなくて、配慮すること、それがケアですからね。そのための空間をどうやってつくるかということの問題にしなければいけないんだけど、どうもまだまだみたいです。

市川 そうですね。なぜ管理したがるのか、私には不思議でならない。

間宮 それはやはり効率的だからでしょう。

堤 効率性を追求していくと、機械で全部介護するということにな

る。一度某機械メーカーの社長がこういうのを考えましたといって、そのショールームに連れて行かれたことがあるんです。小さなベッドがあって、おしりのところに穴が開いている。ボタンを押したら自動的に洗浄ノズルが出てくる仕掛けになっているんです。ベッドの下にはバスがはりついており、こうやって出せば、すーっとスライドさせてバスに移せます、テレビもついています、と。要するに二四時間このベッドのまわりでなんでもできますという代物。このような機械を開発させたのがある国会議員だったんですがね。

間宮 困った国会議員ですね。

堤 僕は社長に言ったんです。こういうのがずらりと並んでのを想像してごらん下さい。これじゃまるでナチスの収容所じゃないですか。効率性を追求していくと、似たような発想がとめどもなく出てくる。おむつをかえるのは大変だということで、どこかの会社がプラスチックカバーみたいな自動吸引機をついたおむつを開発した。現物を見せられましたよ。おむつのおしりのところにバキュームがついてるわけです。排便したら大きな箱に吸引する。これがあれば移動する必要は全くないと効能を垂れるんです。すぐ施設に入れてくれっていうから、なんとかとりなしたんだけど。介護の世界で効率性を追求していくと、とめどもなく非人間的なことになっちゃうんです。ケアの原点を考えていかないと、あやういところまで行ってしまう。

間宮 ふつう経済学では、医療も経済活動だと見なされる。医者は生産者で、患者は消費者というわけです。医療行為は医療サービスの売買だから、料金も自由化したほうがいいことになる。それに対してある社会学者⁽⁷⁾がこんなことを言っています。いやそうではない、医療というものは医者⁽⁸⁾と患者が一緒になって何かをつくり出す共同の行為だと。彼はこれをコモン・アンダーテイキングス(共同の営み)と言っています。では何をつくり出すかっていうと、それは健康という価値だ、そう彼は言うんです。だから医者⁽⁸⁾と患者は同等の立場で医療に参加するんです。医療は医者⁽⁸⁾と患者の共同行為だから、それぞれが一定の義務を負う。入院中の患者は酒を飲んじやいけないとか、就寝時間を厳守しなければいけないとか。他方医者も、患者の情報を漏らしてはいけないといった義務を負う。おそろく教育だってそうだし、高齢者のケアだって同じだと思うんです。

(7) ある社会学者 T・P・ソンス(一九〇二—一九七九)のこと。『社会構造とパトリステイ』(武田良三監訳 新泉社)の第二章「医療社会学の領域に関連する若干の理論的考察」において、医療の共同営み論が展開されている。「われわれがふつう治療と呼んでいるものは、単に医者の目標であるのみならず、医者と患者が一緒に構成する集合体の目標として見なされるべきである」(四四三頁)。「患者はたとえどんなに幼少であっても、医者のパートナーとして扱われるべきであり、患者はいつてみれば、保健サービスの単なる「消費者」ではなくてある程度まで「生産者」なのである」(四四三—四四頁)。

一方的に与えるのではなく、一緒になって何かをつくり出す。ケアというのもそういうものだと思うんですね。そういう発想がないから、堤さんがおっしゃったようなとんでもないアイデアが出てくるわけです。

市川 ケアとは人の命や生活を発展させるもの、それが喜楽苑の言葉なんですよ。どんなに重い障害を持っていても、心が前を向いて日々豊かに暮らせるんだったら、その人の命や生活は発展しているのとらえたい。それがケアだと言っているんです。例えば、重い認知症の方がピアノのコンサートをされた。息子の顔さえ分からなくなっているのに、見事にショパンを三曲弾かれました。またクリスチャンの方でしたけど、看取りに入る頃から、いつもオールド・ブラック・ジョーを口ずさんでおられた。しかも英語で。元英語の先生だったからと言ってたんですよ。でも歌詞をよく読んでみると、ぐっときましたね。自分の友人たちはもうあの世へ逝ってしまった。でも私にはその人たちの声が聞こえる。私ももうすぐ逝くのだ。彼女はこの歌でもうすぐ訪れる自分の死を納得させようとしているんだ、そう思うと何とも言えない気持ちになりました。

私たちが最後までその方を支えるっていうのは、短い間でも、その人の思いに寄り添い、その人が大切にしてきたことを実現することなんだということを、このような事例で学んだんですよ。実現できると本当に満ち足りた表情を見せて下さいますね。ケアとはこういうことなんだと胸に落ちていきました。

堤 介護保険で介護をサービスにして、民間企業もどんどん入ってくる。僕はその張本人の一人ですけれども。じゃあ介護は一般のサービスとどう違うんだってことは、やっぱりみんなに考えてもらいたいんですね。なるほどかたちはサービスの形式をとります。契約してサービスを売買するという形式をとるんだけど、サービスする相手は匿名の客ではなく、固有の名前をもった一個の人間なんです。その人が何を望んでいるか、ちゃんとわかっていなければいけない。ファミレスなどのサービスとはわけが違う。ところがそういうサービスと同じに思っている人もままいるようで、「ご利用者様」なんて言う。介護というのは、一般名詞の利用者さんに対するサービスなんかじゃなく、唯一無二の固有名詞を持った人間に対するサービスなんです。ケアっていうのはそういうものだと思うんです。

市川 名前がなくなるんですね。たとえばどなたかが見学にこられる、そして「〇〇です」と自己紹介される。その場にいるお年寄りも「〇〇です」と自己紹介して答えるのが普通の関係なのに、お年寄りには全然自己紹介させない。「入居者」というひとくくりで紹介するんですね。

地域社会との接点

間宮 冒頭で「らしい」とか「らしくない」ということを言いましたが、老人ホームの場合、「らしい」が異常で、「らしくない」があたりまえのことなんですよ。だから外山さんも言っていたでしょ、ノーマライゼーションの考え方を逆転させなきゃいけないって。ノーマライゼーションになっているのは障害を持った人を日常の生活に引きもどすことなんだけど、外山さんに言わせると日常のほうがいいまはアブノーマルになっている。だから障害者とか認知症の人と話していると、自分のほうがノーマライズされてる気がする、そんなことを言ってるわけです。日常と非日常、ノーマルとアブノーマルをもう一度考え直さなきゃいけない。

堤 老人ホームは、介護・ケアサービスを提供する施設であるとともに、家でもあるという両義的な面をもっているんですね。その両義的なところで皆さんもがいている。よく老人ホームに入所すると言いますが、本当は入居する、もつという転居する、でなければいけない。これからは老人ホームに転居するという時代なんです。

そうすると特養も他のいろんな住居やすまいと同じになってくる。しかしそれでも特養というかたちは残ると思いますよ、地域のコアになる施設として。

それからもう一つ。東日本大震災のとき、いまこそ生存権を、と憲法学者が言っていました。ふるさとに住み続ける権利も生存権の一つで



はないか。権利というより、権^リ理^リとして。東京は豊かだから東京に移りゃいいじゃないかという考えもありますが、どんなに貧乏な田舎であつても、そこに住み続けたいという人には、そこに住み続ける権理が保障されなければいけないし、そのための制度も必要となる。そこに住み続けることによって初めて伝統や歴史や文化が蓄積されていくわけですね。

間宮 ふるさとといつても、全然見たこともないふるさとであつては困るんで、記憶に残るようなふるさとじゃなきゃいけない。

市川 普通の生活を続けていくためには地域が欠かせない。ホームの中だけで生活が完結したら、家の中に閉じ込められているのと同じです。人間は社会的存在ですから地域の中、社会の中で暮らしていくことが大事で、特養ホームでもそれを実現することが重要だと思ふんですね。

間宮 外山さんのいうパブリック空間っていうのは地域との接点にある空間なんですね。施設の中で一番パブリックなところを言っているわけじゃない。

市川 さらに言うと、地域の方々がホームにいらつしやるだけじゃだめなんですね。あそこには気の毒な人がいるからボランティアしよう、行ってあげようじゃ。慈善的な気持ちで歌を歌いに来る人もいるんですよ。そうじゃなくて共に愉しむ。また地域の音楽会にどんどん出かけて行く。地域が抱えている課題を一緒に考えて解決していく。入居者を地域と結んでいかないと生活は生まれない。そのためには私たちスタッフが地域とのより良い関係をつくっていく必要がある。住まいである特養ホームは、地域との関係抜きには考えられないんです。

一方、出かけたら出かけたで、不便なことがあまりにも多い。地域のあちこちにちよつとした公園やベンチがあつて、そこで一休みできるとか、車椅子でも自由にシヨッピングができるとか、あるいは高齢者・障害者に優しいトイレがほどよい間隔で設置されているとか、地域の空間をやさしい空間にしなきゃいけないと思いますね。

間宮 施設が孤立してたんじゃ、そこに住んでる人だって孤立してしまう。外部との関係も慰問とかボランティアの関係になってしまいますね。そういう関係だけじゃなくて、ものを売ったり買ったりの市場的な関係であつてもいい。

堤 それは大事なことでね。昔の特養っていうのは本当に田舎の山の中にあつて、近くにゴルフ場があるところも多かったんです。これじゃいけないというので、デイサービスなんかも必ず併設することにして、街中にすこしずつ持つてこようとしたんです。昔は効率主義・管理主義の発想が強かったんですね。今では個室ユニットケアに踏み切つてやつてますけど、実はまだまだ反対論が根強くあるんですよ。行政の中、自治体にあるんです。福祉施設の関係者にもまだ根強いと思いますが、情けないですね。なんで想像力がないうんだらう。自分が相部屋の中でおむつ変えられるなんて。

市川 そうそう、想像力がなさすぎますよ。

間宮 想像力、イマジネーション、他者感覚っていうのかな、その欠如たるや、相当なものです。まちや建物は後まで残りますからね。残るだけだったらまだいいけど、それが人間に良からぬ作用を及ぼすんです。人間がそれを意識できればまだいいんだけど、意識できないから、内攻して屈折した現れ方をする。

堤 外山先生がもうちよつと長生きされていたらもつというんな展開があつたと思います。基本は変わらないにしてもですね。それは残念ですね。もつと発展させていろんなものを示してくれていたら。

間宮 いろんな能力、力量を兼ね備えていないと運動として展開していくのは難しい。学者然として書齋に閉じこもつてたつてだめだし。アピールする力もある、表現能力もある、もちろん設計能力もある。いろんな要素をもつてなきゃいけない。残念でした。そのぶん市川さんががんばつておられるし。

最後になりますけど、二〇年近く前、私が京大に来た時、所属講座が「生活空間論」という講座だったんです。経済と関係ないんだけども、そのころから空間というものに興味を覚えて、しょぼしょぼとやってきました。素人だからどうしても観念的になりやすいんですけれど、外山さんの本読んだり、今回こういうところにおじゃましたりして、外界の新鮮な空気に触れた気がします。空間について考える場合には、人間心理の襞にまで分け入つて考えないといけない。いろいろなことを教えていただきました。どうも長い時間ありがとうございました。

*本対談の原稿作成にあつて、金坂清則研究室の院生、上野莉紗さんにご協力いただきました。

日本映画とは何か

芸術とイデオロギー

加藤幹郎

MIKIRO KATO



加藤幹郎（かとう みきろう）
一九五七年、長崎生まれ。映画批評家。映画学者。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。博士（人間・環境学）。一九八七年に京都大学教養部助教授に就任。二〇〇六年より現職。主要著書は『映画のメロドラマ的想像力』（フィルムアート社、一九八八年）、『映画 視線のポリテクス』（筑摩書房、一九九六年）、『映画とは何か』（みすず書房、二〇〇一年）、『吉田秀和と、コブラ・レドランナ』（『序説 映画学特別講義』（筑摩書房、二〇〇四年）、『映画館と観客の文化史（中公新書、二〇〇六年）』『表象と批評』（岩波書店、二〇一〇年）、主要訳書『コリン・マッケイブ・ジェームズ・ジョイスと言語革命』（筑摩書房、一九九一年）『タニア・モドゥレスキー』知りすぎた女たち（ヒッチコック映画とフェミニズム）（青土社、一九九二年、共訳）など。

かつて映画館は全世界で毎週、何億人も
の観客を動員する特権的な場所だった。そ
のため映画という視聴覚媒体は、当初、二
〇世紀を代表する大衆娯楽商品とみなされ
ていた。しかし映画が誕生してゆーに一世
紀を閲した現在、映画が他の複製技術媒体
（写真や小説）同様、たんなる大衆消費財
にとどまらない、個人の深遠な想像力をか
きたてる芸術と、個人を社会構成員たらし
めるイデオロギーとの複合的所産であるこ
とは疑いをいれない。映画が写真や小説や
演劇といった先行表象媒体の影響を受けな
がら、大衆消費物から知的構築物へと、い
かにみずからの製作過程を洗練し、創造的
テクスト（織物）として成熟していったの
か、そしてそのことによって、いかにして
映画が二〇世紀から二一世紀の芸術とイデ
オロギーを具現するメディアムとなりえて
きたのか、わたしの映画学研究領域はそう
した問題を日本の映画作家たちの個々の映
画テクストをとおして分析するものである。

わたしの映画学研究領域に取りあげられる
多くの日本人映画作家たちは、世界映画史
と日本映画史の展開にともなう製作技法の
支配的法則を採用するにせよ、あるいはそ
こから距離をおいて独自の製作技法を探究
するにせよ、いずれにせよ一般に可視的な

芸術と不可視的なイデオロギーのはざま
で人間精神表象の多種多様な形式と内容を模
索する者たちである。

創造的行為が芸術と呼ぶに値するもの
なるのは、それが支配的イデオロギーから
一時的に離反するときである。芸術テクス
トが、選別と排除を人間社会に強いるイデ
オロギーから完全に自由になることは不可
能であるが、一瞬でも、わずかでもよい
から既存の理性的、感性的パターンから離
脱できれば、それが芸術生成の要となるで
あらう。偏見や予断や信念や慣行や公準そ
して独善的刷りこみ、そうしたものを刷新
しないかぎり芸術テクストは意味をなさな
い。真の芸術テクストとは、ほとんど同語
反復的に聞こえるかもしれないが、芸術史
と目されているものの刷新（芸術と呼ばれ
ている既成の理念体系からの一時的乖離、
了解可能と思われるいた世界の意味にたい
する擬議）であり、かならずしも道義的高
潔心や審美主義などと随伴するものではな
い。むしろ刷新された過去の芸術テクスト
それじたいも、大過去の芸術テクストを刷
新したものである以上、芸術史のなかで刷
新されつづけるテクスト群それじたいは基
本的に芸術的真価を失うことはない。人間
の創造的行為は、同時代的イデオロギー

（大多数の社会構成員がみずからの情緒安
定のために暗黙のうちに集団的に承服せざ
るをえない真偽定からぬ擬似制度）を意識
するにせよしないにせよ、なんらかのイデ
オロギー的前提から逃れることはほとんど
困難である。テクストの美学的、技術的巧
拙とは関係なく、ほぼすべての物語テクス
トは理想的な（ユートピア的な）ものであ



溝口健二の最高傑作映画『残
菊物語』（一九三九）のスタイル
（三六〇度移動撮影）の模様

ろうが陰悪な（デイストピア的な）ものであろうが、フィクションであらうがドキュメンタリーであらうが、なんらかのイデオロギー的呪縛のもとに成立するしかない。

人間にとってイデオロギーとは、たんなる権力統制や防衛手段や非人道的暴力（宗教的イデオロギーですら基本的に暴力を否定することはない）の正当化をはかるものばかりでなく、しばしば反駁の余地のない社会的「現実」という公然たる幻想世界である（非芸術映画を見て聴くことが大衆にとって「気晴らし」になるのは、そのためである）。イデオロギーは政治的、経済的、科学的、伝統的、革命的、哲学的、宗教的、文化的、情報的諸相下で現実社会に蔓延するため、人間はイデオロギーに囚われているかぎり、たとえどんな理不尽事態に見舞われようと、そのなかで憩うこともできる。支配的イデオロギーに埋没している人間は、みずからの人生の昏迷は回避できるかもしれないが、まさにそれゆえに多種多様な他者の人生にたいして 倫理的善行をおこなえとはかぎらない。すべての人間にとって、それなりのイデオロギーにそまっさえば、人間は非人道性の社会的表象であれ実践であれ、その正当性を鵜呑みにすることもできるのである。大衆は伝統的、権威的イデオロギーにたいしてはほとんど修正力をもたないため、既成のイデオロギーにひびをいれ、世界の表象と理解を刷新する芸術テキストの意義についてもしばしば無理解である。しかし理性の減退と感性の衰退に歯止めをかけるものもまた芸術テキストの機能のひとつである。

イデオロギーは仮設的総体世界の住人たる人間の精神的紐帯となりうるが、そのイデオロギーになじむ者もなじまない者も、芸術によつてはじめて仮設的総体世界からの一時的脱却をはかることができる。人間社会に秩序と安寧を保証すると言われる絶対正義という「普遍的概念」もまた仮設的総体世界内のあまたある幻想的構築物のひとつにすぎない以上、正義もまたそれじたい多様な解釈にゆだねられるイデオロギー的産物にすぎない。

したがってわたしの映画学研究領域で取りあげられる映画テキストは称賛されるべき独創的なものから、批判されるべき通俗的なものまで、「正義」的テキストから「不正義」的テキストまで多種多様である（その意味でわたしの映画学研究領域は異種混淆主義的であるし、それじたいイデオロギーから無色であることもありえない）。

ただし批判される対象は、テキストそのものでも、その作者でもなく、当該テキストが生成し受容される、テキストの意味と解釈を一元化しようとする同時代的イデオロギーである。ある映画テキストが批判するに値するとすれば、それはそのテキストが依拠しようとした社会状況の必然的産物として、集団的嗜好ないしイデオロギーの光景化に成功しているからである。それは隠蔽的な支配的社会通念に擬議をさしはさむうとしない映画作家と大衆観客との共謀の所産というわけではかならずしもない。一般的に「価値」に先立つ事実は存在しないのであるから、ある時期に属する集団精神にもっとも深く浸透する公認追従的な映画

テキストは批判的観点から論究に値するはずである。複数の多孔質映画テキストの内在的分析をとおして支配的社会通念の変容プロセスをさぐることは、映画テキストが社会的イデオロギーのなんらかの表象である以上、不可能ではない。歴史的イデオロギーはたんなる過去の遺物にとどまらず、たえず変容しつつながら今日の問題として人間をつつみこみ、人間精神の理想と現実のはざまに浸透している。なんであれイデオロギーの巨大な流れから逃れられる人間など存在しないであらうが、それでも既成のイデオロギー（価値の範例）から距離をおこうとする映画作家の創造的実践は論考に値する。映画テキストの芸術性はそこ



に起因する。

さてわたしの映画学研究領域は不連続な連続のモニタージュからなっている。わたしの映画学研究領域は相対的に定式化される「正典」映画史でもなければ（人間的実践の歴史の厳密な記述の試みは、たとえ錯綜した膨大な典拠的資料「公文書から日記まで」を実証的に整理しえたとしても、それらは変容を上げつつも永続的に人間を蒙昧性のなかに溶かしこむイデオロギーのなかにしか成立しえない「事実の記述は過去における不可解な疑惑の解明という特定の文脈内でなされないかぎり歴史叙述たりえない」以上、歴史（イストワール）叙述もしょせん物語（イストワール）となるしかない）、またわたしの映画学研究領域はテクストの肌理を度外視した抽象的映画理論でもない。芸術テクストの歴史に一貫した認識論的パラダイムなどありえない以上、個々の映画のテクスト分析をとおして芸術とイデオロギーの不連続かつ連続する複数のコンテクスト（文脈）を構築考察する以外、芸術と人間の関係をさぐる方法はない。しかも芸術とイデオロギーにはひとつの大きな共通点がある。両者はともに実用科学などとは異なり、客観的妥当性などもちえないということである。芸術とイデオロギーは人間の生活経験のうえにしか成立しない。それでも芸術を宗教的イデオロギーから乖離しさえすれば、芸術は一般に受容される生活経験を持続的に刷新する精神的価値をもちうる。それは実用科学（たとえば原発や原爆）が利便性と災厄性をあわせもつこととは対照的である。

わたしの映画学研究領域の分析スタイルが流動的なのは、分析の対概念たる総合（体系）もまたひとつのイデオロギー的産物にすぎないからである。そもそも理路整然たる人間の歴史など構築しようがあるまい（それはせいぜい記念碑的歴史叙述の一次元にすぎない）。映画芸術の真価は個別的テクストの錯綜的生成プロセスにしか見出せない。なぜなら芸術とは漸進的変化だからである。それは発展の歴史的プロセス上にはけっして統一的に整理されない、個別的事象の蓄積にすぎない。したがってわたしの映画学研究領域が年代順に個々の映画テクストを配列しているのは、そこに社会的記録の接点が見出されるからというよりも、イデオロギーへの従属とそこからの芸術的乖離が、個々の映画作家の人生の歩みに複合的に対応する多彩なコンテクストを構成しうるからである。しかし個々の芸術的テクストといえども、それが映画作家独自の規範によって創造されるものだとも言いきれない。たしかに芸術家はみずからが呪縛されているイデオロギーから離脱しようとするであろうが、芸術家の個人的規範にすら、なんらかのイデオロギーが混在していないとはかぎらないからである（テクストが生産される時代状況からテクストが完全に無縁であることなどありえないであろう）。

社会の表象体系は、個々のテクストとそれを産みだす映画作家の個性性を過度に単純化（抽象化したり感傷化したり）する。世界をあますところなく記述することなど個人であれ集団であれ、いかなる方法であ

れ不可能であるのだから、断片的テクストの内部で映画作家は一般性と固有性のあいだを揺れ動いている。その足取りを個々の映画テクストの連鎖と系譜（コンテクスト）のうちに読みとることができれば、ただたんに過去のすぐれた映画テクストの意味を理解するだけでなく、過去の映画テクストがはらむ諸問題がいかに現在の（あるいは未来の）映画テクストをとおして新たな展開をもたらしうるのかを究明できるにちがいない。世界の本質を「正しく」規定することなど誰にもできないのであるから、わたしたちに問われていることは、いかに多くの創造行為者が、その不可能な問題に個別に立ち向かった証としてのテク



ストの意味を真摯に分析できるかどうかというところにある。わたしの映画学研究領域に登場するすべての映画作家たちはイデオロギーに自覚的であろうとなかろうと、みずからの創造行為に真摯に取り組んでいる点では変わりはない。その成果としての映画テクストを個別に分析することは煩瑣な議論におちいることを意味するものではない。人間世界に典型的なものはあっても普遍的なものなど存在しないのであるから（あるいは変容しつつも支配的たりうるイデオロギーであるから）、人間の固有の生活経験を貧困化する無味乾燥な一般的、抽象的、観念的議論では芸術の真価を把握することは不可能である。膨大なる細部の検討なしには、芸術の水準にいたる映画テクストの価値を説明することはできない。それは人間精神の毛細組織を実感することなのである。

映画テクストにかぎらず、一個のテクストは暫定的であるがゆえに、つねに複数の解釈にゆだねられる。複数の映画テクストを錯綜した、それじたい特定しがたいコンテクスト（「現実」史にはなりきれない文脈）に照らして相互解釈することによって、ひとつの映画テクストからまがりなりにも意味の多元性を引きだすことが可能となる（あるいは逆説的に芸術テクストは既成のコードから逸脱するがゆえに暗黙の意味の生成不可能性を実現するであろう）。もちろん、いかなる分析手法を駆使してみても無窮の芸術の多元的意味を世界の複雑性と照応させることなどできない相談であろう。それでも芸術テクスト固有の活力は、対抗する

イデオロギーの一元性と固着性を超克することができるのである。その意味で、わたしの映画学研究領域は日本映画についての「実証的真理」にもとづくとされる幻想的意味とは無縁であり、映画テクストにおける芸術とイデオロギーの錯綜を具体的に考察するものでしかない。もっとも「現実」はイデオロギーの多重的成層によって成立している以上、わたしの映画学研究領域は、個々の映画テクストから出発し、さまざまなコンテクストを経たのち、芸術の真価が年代史的集合体に還元しきれないかぎり、ふたたび個々の映画テクストへとそれぞれ帰する回廊である（そうやってはじめて映画テクストは硬化することなく、さらな

る意味を観客に追補的に知らしめる）。人間は「現実」をありのままに見ることなどできない。理性的にも感性的にもつねになんらかのイデオロギーの色眼鏡ごしに「現実」を把握するしかない。それゆえわたしの映画学研究領域はイデオロギーの所産たることを避けえない映画テクストをとおして「現実」なるものを観察し（個々の映画テクストを年代順かつ断続的に配列することによって芸術革新の波形やイデオロギーの変容と持続の実態が観察できるはずである）、また支配的イデオロギーに対抗する芸術的实践としての映画テクストをとおして新たな日本の「現実」の多面的構築を生活経験に準じて模索するものである。



映画と睡眠

新宮一成

KAZUSHIGE SHINGU



新宮一成（しんぐう かずしげ）
一九五〇年大阪府生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。
一九八一年京都大学保健診療所助手。一九八八年京都大学教養部助教授を
経て現在に至る。京都大学医学博士。専攻は精神医学、精神分析。主な著
書に『ラカンの精神分析』（一九九五年、講談社）、「夢分析」（二〇〇〇年、
岩波書店）がある。

家の真ん前が映画館だった。映画館の前には猫の額ほどの空きスペースがあつて、夏には金魚すくい、そして一年を通して、たこ焼き屋の屋台が出た。そのたこ焼き屋がうまいか、それとも駅前のだこ焼き屋がうまいかは、子どもたちの間での論争的であつた。そして駅前にも映画館があつた。いわずと知れたたこ焼きの都、大阪での話である。

映画館には、学校から連れて行かれた。学校は映画を見ることが教育になると信じていて、定期的に映画鑑賞の時間を設けてくれた。何を見せられたかはしかしもうろ覚えである。

その映画館は、朝から晩まで、同じ映画音楽を繰り返すつと流し続けていた。聞かないでいることはできなかった。街がやかましくても人が当たり前と思つていた時代であつたらしい。『太陽がいっぱい』とか『黒いオルフェ』とかであつた。フォーレの美しい「シシリエンヌ」も流れていたが、何かの映画の主題曲になつていたのであるか。

子どもの頃の映画作品で、一番よく覚えていたのは『月光仮面』である。これは子守の代わりに映画でも見せておこうということで連れて行かれたという気がする。ス

トリーとか何か問題ではない。あの全身に布を巻いたミイラみたいな、あるいはモロッコのドレープみたいな出で立ちが画面に現れると、その周りの空気が、違うものになるように見えた。いま想うと、ちょうどあの森の暗闇に咲くという、「月下美人」の花が開いたかのようにあつた。ストーリーは一つも覚えていないが、映画館という暗い場所には、最もふさわしい鑑賞の仕方ができた気がする。ストーリーを覚えていたのは『キューポラのある街』だが、これは子どもの頃見た映画の最後あたりの作品で、少し物心ついてからだった。貧乏という言葉に希望の隠し味が詰まっていた時代の雰囲気、映画と共に記憶に残された。でもそれは思想である。良い映画だったが、自分にとっての映画の本質を表していたかどうかはよく分からない。映画とは自分の中でどういうものだったかというのと、やはり、暗い中に何かぼんやりと浮かび上がるというその一事が、本質だったと思う。月下美人でなければ、真っ暗な深海で、提灯を点してえさになっている魚が寄ってくるのを待っているチョウチンアンコ



『月光仮面』（1958-59年）



『キューポラのある街』（1962年）

ウの生存のようなものが、映画館の理念型である。

若かりし頃に自分で見に行つた映画としては、『禁じられた遊び』と『シェーン』がある位である。二つの映画の主題曲はどちらもたいへん好きだが、家の前の映画館からは流れていなかったようだ。そして私はめつたに映画に行かなくなった。

還暦に近くなつてから、私は片方の目に、網膜剥離を患つた。網膜が剥離すると、その部分は真っ暗になる。ちょうど日食や月食のように、暗黒が侵入する。眼科の教授は私の眼球を満たしていた硝子体を吸い出し、代わりにガスを入れた。ガスの圧力で、網膜が元通りに付着するようにする。この進んだ手術のおかげで、剥離した網膜は、再び付着して、また見えるようになった。



③シシリエンヌ（フォーレ作曲）



①太陽がいっぱい（『太陽がいっぱい』の主題曲）



②オルフェの歌（『黒いオルフェ』の主題曲）

ところで、この手術の関係上、私の目の水晶体（レンズ）は、人工物に置換された。

すなわち、私の目は、遠近調節が利かない。ちようど、映画館の映写機のピントがスクリーンに合わせられているように、私の目は、ある一定の距離の物だけをはっきり映し出す。

眼球の空間は、こうしてなかば映画館ふうなのである。レンズを通して、外界は網膜に像を結ぶ。結ばれた像を、誰が見るのか？ 光が像を結べば、どこかに、それを見る意識が現れる。意識は、像を見ようとして、出現する。意識の存立より、光の焦点形成が先だ。スクリーンに光が像を結べば、必ずそれを見る意識が、そこにやってくるだろう。見ている主体としての意識が、その像を見るようになるのである。網膜があれば見る意識があり、スクリーンがある限り、映画館には人が入るだろう。

映画を作るとき、フィルムに、光が像を結んだ。その時に現れた意識は、一応は監督の意識であろうか。さて、フィルムに、もう一度光を通して、スクリーンに像を結ばせる。つまり上映する。今度そこに現れるのは、どんな意識であろう。観客の意識である。観客がいるから意識があるのではない。そこに像が結ばれ、意識がそれに対して発生する可能性が発生したから、観客がそこにやって来るのである。観客は意識的に映画を見に来るのではない。意識が発生する場所に吸い寄せられてやって来るだけなのである。その行動を、われわれは普通、映画を観に行く、と言う。

生命とは、光である。それに操られて、

像ができ、意識が現れようとし、人は行動する。

ところがいつばうで、意識が現れたくない、光を避けたいという欲望がある。それは眠っていたいことである。像が発生すれば、意識が現れないわけにはいかない。眠りは妨げられないわけにはいかない。これは困ったことだ。なんとかして、その間をとって、眠りながら、像に対応し、意識が現れてもよいような事態はないだろうか。

一つだけ、可能性がある。それは夢を見るときである。意識は、像に対して発生する。しかし、眠ったままである。こういう特殊な意識のあり方が、いつの頃からか、人間には夢として可能になった。眠りながら、像に反応することができるようになった。

そういえば、「電車の中で眠る」ということについての想い出がある。車窓に次々と現れる景色は、われわれの網膜に活発な像を結ぶ。それに反応すべきかどうか。昔のことになるが、「電車に乗ったら、寝ている人がいる。外の景色も見ずに、もったいない」と言って、祖母が憤っていた。周りの人々から、「そりゃ、観客客は起きているだろうさ、いつも乗ってる人は見飽きてるから眠る」と反論されていた。しかし私は、その乗客の眠るという反応は、外の景色が初めてであるかどうかに関係がなく、像に対応して意識を発生させるのがいやだということに過ぎないと思うのである。

私が映画にめったに行かなくなったのは、多分眠りたいからである。映画館に行かな

くても、いつばい像が見られるなんて、夢とはなんとお得な経験なんだろう、と考えて映画館から足が遠のいた。映画にあまり行かない理由を聞かれて、人にはそう説明していた。しかし、さらに奥深い理由がありそう。私は、たぶん意識を発生させるのがおっくうなのである。朝の光は、私に不安を覚えさせる。何とかして、寝ていたのである。そう考えてみると、私は、自分がとても光を怖れている存在であると直観する。しかし、朝が来るのは怖い、ずつと朝が来ないのもまた恐ろしいことがある。

《参考》

「夢は眠りの番人である。」―フロイト『夢解釈・I』フロイト全集第四巻、岩波書店。

「意識というものの、それは「像」と呼ばれる何かを生み出すことができる表面が与えられるたびごとに生じるものである（…）。これが意識についての唯物論的定義です。」―ラカン『フロイト理論と精神分析技法における自我（上）』岩波書店。



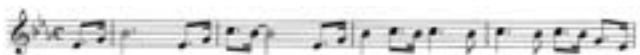
『禁じられた遊び』（1952年）のラストシーン



『シェーン』（1953年）



④愛のロマンス（『禁じられた遊び』の主題曲）



⑤遙かなる山の呼び声（『シェーン』の主題曲）

「眼には眼を、歯には歯ブラシを」

高谷 修 OSAMU TAKAYA

小学生の時、連れられて行って初めて見た映画は時代劇だった。その後、一人で映画館に行くようになり、映画雑誌『スクリーン』なども読むようになった。『ベン・ハー』や『天地創造』、『アラビアのロレンス』など見た記憶がある。また007ジェイムズ・ボンドの映画にも熱中するようになり、『女王陛下の007』のボスターを部屋に飾って嬉しがっていた。『エルビス・オン・ツア』は何度も見た記憶がある。エルビスの歌『ポーク、サラダ、アニー』は自然に口をついて出たが、当時の「ポーク」は豚肉のことだと思っていた⁽²⁾。大学では最終的にイギリス文学を専攻するようになり、そのためイギリス映画を見るが多くなった。以下は堅苦しい映画論ではなく個人的な映画鑑賞の回想である。

I 舞台と映画

ロンドンのマレット・ストリートに王立演劇アカデミー (The Royal Academy of Dramatic Art, 通称RADA) がある。これは舞台俳優の養成学校だが、卒業生は舞台だけでなく映画でも活躍している。二〇〇五年にノーベル文学賞を受賞したハロルド・ピンターもRADAに学んだ一人だ⁽³⁾。

彼は幾つかの映画に出演した後で本格的に劇作を始めた。サウスバンクの国立劇場へ芝居を見に行った時、ロビーでピンターの姿を見つけてちよつと愉快な気分になった。またその時、ピンター夫人で歴史作家のアントニア・フレーザー⁽⁵⁾も一緒に見かけた。彼女は穏やかで優しく、実に魅力的な人と思われて、すぐにファンになってしまった。その後、色んな機会にピンターと遭遇した。ある劇作家の追悼会で彼はスピーチをしたが、彼の声は元俳優であることを思わせる深くよく通る声だった。

ピンターの代表作に『管理人』⁽⁶⁾がある。三人しか登場人物がいない劇だが、オリヴィエ・シアターで上演された時、さつき見にいった。出演者の一人ミックの役をジョナサン・ブライスが演じていた。彼は細身の若者でRADA出身ということもあり、以後なんとなく気になる存在になった。(因みにその時、老人デイヴィスを演じたのはウォーレン・ミッチェルだったが、彼もRADAの出身である。) ブライスはその後、映画にも出演するようになり、『エヴィータ』ではマドンナのエヴィータに対して、ペロン将軍を演じた。また007のボンド映画 *Tomorrow Never Dies* (一九九七)

高谷 修 (たかや おさむ)
一九七八年、京都大学大学院文学研究科修士課程修了。大阪市立大学文学部講師を経て現在、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は十八世紀イギリス文学。論文に「プリアモスとアキレウスの対立と和解」「イギリス第二十四歌のポープ訳を巡って」「未分化の母体——十八世紀英文学論集——」所収など。

では、イギリス課報部に敵対するメデア・タイクーンのレイモンド・カーヴァー役に抜擢されたが、これは嬉しい驚きだった。

また国立劇場では『アマデウス』⁽⁷⁾も見た。奇矯なモーツアルトをサイモン・キャローが演じていた。サリエリはポール・スコフィールド⁽⁸⁾で演出はピーター・ホール。その後ミロス・フォアマンによって映画化されたが、映画でもサイモン・キャローがモーツアルトを演じるのだろうと期待していたら、彼は目立たない脇役だった。舞台で好演した彼がモーツアルトでなかったのがちよつと悲しく感じられた。その後、彼は『四つの結婚と一つの葬式』(一九九四)や『恋におちたシェイクスピア』(一九九八)などの映画に出演したが、髪の毛が少し白くなり恰幅がよくなっていた。最近ますます精力的に映画に出演しているようだが、眼が離せない俳優の一人だ。

II 国立映画劇場 National Film Theatre

ウォータールー・ブリッジの南岸、文字通り橋の下に国立映画劇場がある。ここではイギリス映画に限らず海外の映画も上映されている。日本映画特集もあり、ここへ

(1) イアン・フレミングのスパイ小説を映画化したもの。第一作 *Dx No* (2007) は殺しの番号「一九六二」によって人気に火がついた。

(2) 綴りは *Pork Salad Annie* である。

(3) ピンターの全ての作品を論じたものに、喜志哲雄『劇作家ハロルド・ピンター』(研究社、二〇一〇年)がある。

(4) *National Theatre* はテムズ川の南側、ウォータールー・ブリッジの東側にある劇場。内部に様式の異なる三つの劇場を擁している。オリヴィエ・シアターの舞台は緩やかな半円形で客席に向かつてせり出している。リトルトン・シアターは普通の額縁舞台。コッツロー・シアターは殆ど体育館のような雰囲気をもっている。

(5) *Lady Antonia Fraser* は歴史作家。彼女の『クロムウェル』、『チャールズ二世』はベストセラーになった。なお推理小説も書いておりテレビドラマ化もされている。

(6) 『管理人』の初演は一九六〇年。ミックをアラン・ベイツが演じ、デイヴィスをドナルド・プレザンスが演じた。この二人にロバート・ショアを加えた三人によるものが一九六三年に映画化されている。なお、『管理人』が一九九一年に再演された時にはミックをコリン・ファースが演じた。

(7) 『アマデウス』はモーツアルトのミドル・ネームとされる。ただし、彼の洗礼名は *Wolfgang* ではなく、同様の意味を表わすギリシア語名 *Teophylus* と伝えられる。

(8) ポール・スコフィールドはヘンリー八世とトマス・モアの確執を描いた映画『わが命つきるとも』(一九六六)で主人公のトマスを演じた。なお、ヘンリー八世をロバート・ショア、トマスの妻をウエンディ・ヒラー、また娘をサザンナ・ヨークが演じた。他、クロムウェルはレオ・マッカーン、ウルジー板機卿はオースン・ウェルズという豪華な俳優が脇を固めていた。

もよく足を運んだ。小津安二郎など日本では見る機会が無かったが、ここで見る事ができた。『東京物語』も見たが、より強烈な印象を残したのは『秋刀魚の味』（一九六二）の方だった。笠智衆が恩師（東野英治郎）を迎えてクラス会を開く。恩師の娘役が杉村春子だが、彼女はオールドミス of 悲哀を巧みに表現していたように思う。この劇場では日本映画を英語字幕付でイギリス人観客の間に座って見るといふ行為の奇妙さもまた味わうこととなった。イギリス人は英語字幕で見ているのだろう、どれくらい分るのだろうか、などと不安を覚えながら見ることもあったが、大抵の場合それは杞憂に終わった。

ここでドリス・デイの映画特集があった時には毎日通ったが、ドリス・デイの映画が見られると思うと自然に足が速くなるのを感じて驚いた。緊張が無くはないロンドン生活の息抜きになっていたのだろう。また幸いなことに書店でドリス・デイ映画の解説書を見つけて早速買った。これはその後格好の手引きとなりまた宝物ともなった。ドリス・デイは、明るく楽しいアメリカ的な映画に多く主演していた。ヒッチコック監督の『知りすぎた男』（一九五六）は有名かもしれないが、彼女が一番輝いていたのは『The West Point Story』（一九五〇）の頃ではないだろうか。一方で彼女はまたシリアスな映画にも出演している。『Storm Warning』（一九五〇）は人種差別主義で有名な Ku Klux Klan を描いている点で特異といえるだろう。この映画では悪に立ち向かう正義の味方が、後にアメリカ大統領に

なるロナルド・レーガンであるのが面白い。ドリス・デイは『The Winning Team』（一九五二）ではレーガンと夫婦を演じたが、俳優としてのレーガンはもう少し高く評価されてよいのではないだろうか。

ロンドンの国立映画劇場は映画が手軽に楽しめるよい施設だと思う。市内の映画館が上演しないような古い映画や、また世界各国の楽しく面白く、また興味深い映画を上映していた。気軽に色々な映画が楽しめるこのような国立の映画劇場が京都にも作れないものだろうか。

Ⅲ 名画座

ロンドンには普通の映画館の他に「名画座」のような映画クラブがあった。そこでは古今の名作が日替わりで上映されていた。よく通ったものは地下鉄のグッジ・ストリート駅から西に入ったところにあったように思う。またポートベロ・ロード⁽⁹⁾にある名画座にもよく行った。日本

に帰国すれば見ることもないと思われるような名作映画は努めて見るようにしていた。ヒッチコックの『三十九夜』

（一九三五）、『間諜最後の日』（一九三六）、『サボターージュ』（一九三六）、『海外特派員』（一九四〇）、『逃走迷路』（一九四一）、『断崖』（一九四一）などを見たのを覚えている。特に印象的だったのは『逃走迷路』で、犯人は最後にニュー

ヨークの自由の女神の松明から落下するが、この秀逸なシーンは一体どうやって撮ったのだろうか、いまでも不思議に思える。またダフネ・デュー・モリー⁽¹⁰⁾の原作による『ジャマイカ・イン』（一九三九）も見たが、主演がチャールズ・ロートンだったことと海辺の悪党の話だったこと以外には記憶がない。ロートンといえばマレーネ・デートリッヒ、タイロン・パワーと共演したビリー・ワイルダー監督の『検察側の証人』（一九五七）が記憶に残っている。これはアガサ・クリスティーの同名の戯曲に基づくもので、映画と舞台の両方を見る機会があったが、どちらにも感心した。

名画座で見た映画は戦前の白黒映画が多かった。ヒッチコックの『バルカン超特急』（The Lady Vanishes, 一九三八）はスリルとサスペンスとユーモアに富む作品で、よく覚えている。舞台は第一次世界大戦直前のバルカンの架空の国。イギリスに帰国しようとする客を乗せた国際列車は雪崩の



The Winning Team (1952) の
ドリス・デイとロナルド・レーガン。

(9) Christopher Young, *The Films of Doris Day* (Secaucus, NJ: Citadel Press, 1978).

(10) ジュリア・ロバートとヒュー・グラントが主演した『フッキング・ヒルの恋人』（一九九九）の中でヒュー・グラント扮するウィルが本屋を構えているのはこの辺りだった。

(11) Daphne du Maurier は小説家。『レベッカ』と『鳥』はヒッチコックにより映画化された。



『バルカン超特急』(1938)のシーン。右から三人目がマイケル・レッドグレーヴ。

ために足止めされ、客たちはホテルに宿泊せざるをえなくなる。ホテルは客で溢れ簡単には部屋を取れない。マイケル・レッドグレーヴ演じる主人公ギルバートはホテルに部屋を確保したものの、部屋で騒々しく騒いだために階下の女性客に告げ口され、おかげで部屋を追い出されてしまう。怒ったギルバートは仕返しに女性の部屋に押しかけて彼女の部屋に同宿しようとする。抗議する女性に彼は“an eye for an eye and a tooth for a toothbrush”（眼には眼を、歯には歯ブラシを）⁽¹²⁾ といって勝手に彼女の洗面台に自分の歯ブラシを置く。早口のイギリス英語が全部聴き取れたという自信はないが、それでもこの台詞は完全に理解できて、卓抜なユーモアに笑い転げてしまった。イギリス人は窮地にもユーモアを忘れないのだと感心したが、想い出に残る台

詞になった。

マイケル・レッドグレーヴの出演している映画は他にも見たが、彼がパブリック・スクールの老古典語教師を演じた『ブラウンニング版』⁽¹³⁾（一九五一）もまた記憶に残る作品だった。これはテレンス・ラティガンの戯曲を基にしたもので、芝居の方も国立劇場で見た。どちらも面白い出来だった。ラティガンのものは沢山映画になっており、『涙なしのフランス語』⁽¹⁴⁾（一九四〇）や『ウィンズロー家の少年』⁽¹⁵⁾（一九四八）なども見た。これら二作はアントニー・アスキス監督によるものだが、このような白黒映画はイギリス映画が生み出した最良の作品ではなからうかという気がする。

アレック・ギネスに関して嬉しい想い出がある。『ブラウン神父』⁽¹⁶⁾（一九五四）を見てみると、ギネス扮するブラウン神父が次のような話を語るシーンがあった。「ある男が蜘蛛の糸を昇っていて、ふと下を見ると大勢の人々が自分の糸を昇って来るのが見えた。その男が、これは俺の糸だ、お前たち降りろ、と叫ぶと糸は彼の上で切れた。」これを聞いた時、当然のように芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を連想した⁽¹⁷⁾。アレック・ギネスに関しては、個人的には彼が演じたジョージ・スマイリーの方が印象深い。スマイリーはジョン・ル・カレのスパイ小説の中のイギリス諜報部のボスである。丁度 *Smiley's People* の撮影現場に遭遇したのは、ある晩芝居を見て帰る途中だった。場所はマールブル・アーチからエッジウェア・ロードに沿って北西に歩いて西に入ったところの公園だったから、コノー

ト・スクウェアだと思う。ここでジョージ・スマイリーが知人と分かれタクシーに乗って去る場面が撮影されていた。近くで見るギネス（スマイリー）は、黒いコートを着て山高帽子を被り、物静かな紳士という雰囲気だった。タクシーに乗り去ってゆくのだが、このシーンが四・五テイク撮影されていた。どのような映像になるのだろうかと興味津々で完成を待ったが、実際に完成したのを見てみるとその場面はたった一〇秒ほどに編集されており、まったくがっかりした。それでも撮影現場に遭遇できたことは嬉しい想い出になっている。

名画座で見た白黒映画の中で、強い印象を残した作品に『ブライトン・ロック』⁽¹⁸⁾（一九四七）がある。これはグレアム・グリーンの同名の小説を映画化したものだが、



『ブラウン神父』(1954)のアレック・ギネス（右から二人目）。

(12) 台詞は『旧約聖書』出エジプト記、第二章二三・二五節を使った駄洒落。なお同様の記述は「申命記」にも見られる。
(13) 原題 *The Browning Version* は、ギリシアの悲劇詩人であるアイスキュロスの作品「アガメムノン」を詩人ロバート・ブラウンニングが英訳した版という意味である。
(14) 芥川の「蜘蛛の糸」とポール・ケラスの「因果の小車」との関係が論じられることがあるそうだが、ケラスを哲学者の鈴木大拙が明治三一年に日本語に訳しているのは興味深い。

ロンドンに幾つかある名画座は実に快適で便利で楽しい映画館だった。古今の名作が日替わりで見られるこのような施設が京都にも出来ないものだろうか。

これほど原作と映画の違いを思い知らされたことはない。手短に紹介すれば、悪党のピンキーは妻にせがまれて簡易レコードに自分の声を録音するが、その言葉は“you think I love you, but...”（お前は俺がお前を愛していると思っているだろうが、実は：（略）という罵倒の言葉だった。それを知らない妻はピンキーが死亡した後、このレコードをかける。原作では妻が非常なショックと幻滅と落胆を感じるだろうことが暗示される。ところが映画ではそうはなっていないかった。レコードにはキズがついており、蓄音器はピンキーの“I love you”という言葉は何度も繰り返す。映画の最後にこのシーンを見た時の衝撃は忘れられない。映画と原作とはまったく別物で、映画は原作をどのようにも処理することが出来るということをお願い知らされた瞬間だった。



『ブライトン・ロック』(1947)のポスター。
主演はリチャード・アッテンボロー。

IV “Bond, James Bond”

最近、映画は劇場で上映される
と時を置かずしてDVD化される
ことが多いのではないだろうか。
DVDには映画とは違った利点がある。好きな時に好きなだけ繰り返し見られるという点はその一つだろう。また「製作裏話」のような特典が付いていることもあり、（映画のみが重要で付録は不要と考えるような人でなければ）それもまた利点だろう。ボンド映画がDVD化された時、早速全作品を購入した。テレンス・ヤング監督の『007は殺しの番号』はボンドが映画に登場する記念すべき第一作だが、この作品の中でボンドが初めて登場するのはロンドンのクラブの場面である。ボンドは深夜カジノでシルヴィア・トレンチという美女相手にChemin de Ferなるトランプゲームをやっている。ボンドは彼女から名前を尋ねられて、“Bond, James Bond”（ボンド、ジェイムズ・ボンドです）という、後に評判となる台詞を喋る。ボンドが初めて姿を現すカジノのシーンは何度見ても飽きることがない。極めて巧みな演出で見る度に感心する。初代のシヨーン・コネリーから数えてこれまで六人の俳優がボンドを演じてきた。現在のダニエル・クレイグは六代目のボンドだ。彼に代わってからこれまでの『カジノ・ロワイヤル』と『慰めの報酬』の二作が公開された。二〇一二年公開予定で二三作目のボンド映画が計画されていると

いう。クレイグ主演の最新作がどのようなものになるのか、映画も、そしてDVDも楽しみだ。



『007は殺しの番号』(1962)のカジノの場面。シルヴィア・トレンチとボンド（後ろ姿）。

(15) 題名はブライトンで売られている砂糖菓子（Tootsie）に因む。なお二〇一〇年に『ブライトン・ロック』はヘレン・ミレン主演でリメイクされた。

(16) 彼は『007は殺しの番号』の他に『ロシアより愛をこめて』と『サンダーボルト作戦』の三作品を監督した。『ゴールドフィンガー』では監督を依頼されたものの、日程が合わず辞退したという。

映画とまち

ロメール『獅子座』を通して体験する50年代のパリ

伊從 勉

TSUTOMU IVORI



伊從 勉（いより つとむ）
一九四九年神奈川県生まれ。京都大学工学研究科博士課程（建築学専攻）単位取得退学。パリ・ウィルマン建築大学（ENSA）学位（建築理論）。現在京都大学大学院人間・環境学研究科教授。都市建築・環境・風土の理論と文化学、図学専攻。主な編著書に『琉球祭祀空間の研究』（中央公論美術出版、二〇〇五年）、『近代京都研究』（共編著、思文閣出版、二〇〇八年）、『みやこの近代』（同前）など。

どこでもいい、ある都市を舞台にした映画をみることは、不可避的にそのまちの仮想的経験である。学術的な都市研究ではどうしても到達できないまちの擬似実存的体験に、映画はなんなく導いてくれる。それに、映画に登場する人物を介してえられる「まちを生きる」共感、ひよっとすると、実際にそのまちを訪れてもえられない経験かも知れない。話はフィクションでも現場ロケで撮られるまちの情景は、映画の中で臨場感を保ち続ける。現実の都市でさえ、事実から乖離したイメージ操作が行われることを考慮すると、虚構の映画がある真実を語ってもおかしくはない。

人間・環境学研究科は授業カリキュラムとは別に、「環on映画会」というアフター・シックスの催しを毎月一回行っている。図書館職員と教員・院生有志のご尽力のおかげである。映画DVDを皆でみるのであるが、それだけでなく、映画をネタに議論し飲むという「社会行為」であるところが重要である。下宿で独り寂しくビデオをみる個人の行為とは違うところが重要だ。

「まちで映画を観る」ことは、重層的なまちの体験だという意味を教えられたのは、私の場合、一九七一年から七二年にかけてのパリ暮らしのときである。特に、自分の

いるパリをもっとよく知るために、パリを舞台にした映画をよく観た。なかでも記憶に残っているのは、五〇年代のパリを舞台にしたエリック・ロメールの『獅子座』（一九六二年五月封切り）と、アニエス・ヴァルダの『五時から七時のクレオ』（一九六二年四月封切り）という映画だ。どちらも主人公が尋常ではない境遇に置かれ、まちを彷徨うことが筋を形成しているため、観者は主人公に感情移入しつづしばしばまちを生きたことになる。本年二月の「環on映画会」に話題提供を依頼されて、ロメールの『獅子座』を選んだ。前記ヴァルダの映画もそうだが、主たる舞台はパリ左岸である。当時のパリは、右岸の旧市街はうら寂れて薄暗く、歴史的街区として再評価される以前である。インテリや学生たちは、パリ左岸、サン・ジェルマン・デ・プレやモンパルナス界隈を好んで徘徊していた。ジャズメ

ンや実存主義者のたまり場でもあった。フィルム・ノワール（ギャング映画）が右岸を舞台とするのと好対照をなす。映画では、サン・ジェルマン・デ・プレ教会の前のキャフェ・デ・ドウ・マゴや隣の街区のキャフェ・ド・フロールというスノブなキャフェと、金のない若者が集う裏街区のもつと安いキャフェが対照的に繰り返し現れる。

『獅子座』の粗筋

キャストと制作スタッフは注記のとおりである。タイトルの由来は、後に述べよう。主人公は強度の米国語訛りのフランス語をあやつる音楽家崩れのボヘミアン、ピエール・ヴェッセルリン。演ずるはフランスに帰化した米国人俳優ジェス・ハーン。

ピエールの住居はセーヌ左岸、シテ島の南側のグラン・ゾギュスタン河岸二七番地の恐らく最上階（図1参照）。セーヌ川を望む北向きの窓からは右手上流側にノートルダム寺院（マルテの油絵を想起）、左手下流にはシテ島の先端に掛かるボン・ヌフが見えるはずだ。正面のシテ島側には警視庁がある。

夏の休暇を前にした六月二二日、叔母の死亡の報せを受け取ったピエールは、巨額の遺産を当てに、ジャーナリストの友人ジャンリフランソワ（以下J・F）から五万フランの借金をしてパーティを開く。それほどつきあいの深くない友人知人が三々五々集まり夜通し騒ぐ。ピエールの交友関係がこうして分かる。その後、J・Fは取材の仕事でアルジェリアに出張、友人達が仕事や休暇で田舎に出かけてしまった留守に、

（1）映画が封切られた年の八月にいわゆる「アンドレ・マルロー法」が公布され、歴史的街区や建築の保存が始まる。しかしパリの二地区（バステイユ付近のル・マレ地区と第七区の官庁街）が保存地区に指定されるのは、一九九〇年代になってからである。

（2）原題「Le signe du Lion」。

制作スタッフ 監督・脚本：台詞 エリック・ロメール
Eric Rohmer / 撮影監督 ニコラ・エール Nicolas Hayer / 撮影技師 ピエール・ロム Pierre Lhomme / 音楽 ルイ・サゲール Louis Sager / 演奏 ジェラルド・ジャリ Gerand Jarry / 録音 ジャン・ラベランエール Jean Labusiere / 編集 アヌ＝マリ・コトレ Anne-Marie Cotret
キャスト 映画のなかの名前（プロフィール）俳優本名
ピエール・ヴェッセルリン（パリのアメリカ人） Pierre Weselin-Jess / ハーン Jess Hahn / キャティ（エールの女友達） Cathie-Jill / オリヴィエ Jill Olivier / ジャンリフランソワ・サントウイユ（パリマッラの記者） Jean-François Sautouill-Fan / タウデ Van Doude / ドミニク・ロム（その恋人） Dominique Laurent-Michel / ジラドン Michèle Girardon / ミシエール・キャロン（J・Fの同僚カメラマン） Michel Caron / シンベル・エダール Gilbert Edard / フィリップ・シャセル（J・Fの知り合い） Philippe Chassel / クリスチャン・アレール Christian Aler / フレデリック・ランベール（画家崩れ、皮肉屋） Frédéric Lambert / ポール・クロン Paul Crauchet / ウィリー（街の友達） Willy (William) / ホール・ピシリア Paul Bisceglia / クリス（ウィリーの女友達、画学生） Chris-n-fy / ベロー Sophie

遺産が又従兄弟に全部わたってしまい、所持金も底を突き、さらには売りに出されるアパートの契約解除で、彼は街に放り出される。

七月二三日、革命記念日の前日、取材から戻ったJ・Fは、恋人ドミニクと同僚ミシェル・キャロンと一緒にキャフェにいる。ピエールがアパートを出て、ホテル暮らしをしていると知る。街でみかけたウィリーから、ピエールが文無しとなったことを聞かされる。会社からまた出張の命令が出て、キャロンと会社に戻る車は、そうとは知らないピエールが滞在するホテルの前を走り去る。

ピエールは、セーヌ街五二番地のオテル・ド・セーヌ（今も実在）という安宿（映画当時）にいる。女主人からは宿賃を催促されているが知り合いが皆留守で無心も出ない。たった一人、夜祭のダンスパーティーの広場をさまようピエール。旧知のフィリップに会っても本音は言えない。翌朝、街頭で夜を過ごしたピエールは、傍を通り過ぎるフィリップの車を止め、一万フランを借りる。

七月三〇日、ピエールの所持金も少なくなってきた。手持ちの推理小説を河岸のブックニスト（古本屋）に売り（四〇〇フラン）、ホテル近くのブユッシュ街の市場でバゲット（パン、三四フラン）とチーズ、鰯の缶詰（サンドイッチの最低の材料、一七〇フラン）そしてデザート

の桃を四つ（四五フラン）買う（写真1）。ホテルに戻り自室でわびしくサンドイッチを食べようとして、缶詰を開け損なってズボンを汚してしまふ。染み抜きベンジン（八〇フラン）を買ってホテルに戻ったピエールは、待ち構えていた宿の男主人（若しくは女主人の愛人）に追い出されてしまふ。

別のホテルに泊まろうと、パンテオン近くのオテル・ド・サンリスで建築家ペーター・ヴィンターと詐称して交渉するが、前金払いを要求されて断念、また街に飛び出る。サン・ミシエル大通りをさまよいセーヌ河岸に出て、フランス学士院とループル方宮の間に掛かる学芸橋（写真2）の上で途方に暮れるピエール（以後、図1参照）。古巣の界限に戻ったピエールは、ウィリーに会い、金が要るなら、いかがわしい運び屋商売をしているバリ西方郊外ナンテールに住むルーマニア人ラデスコに相談

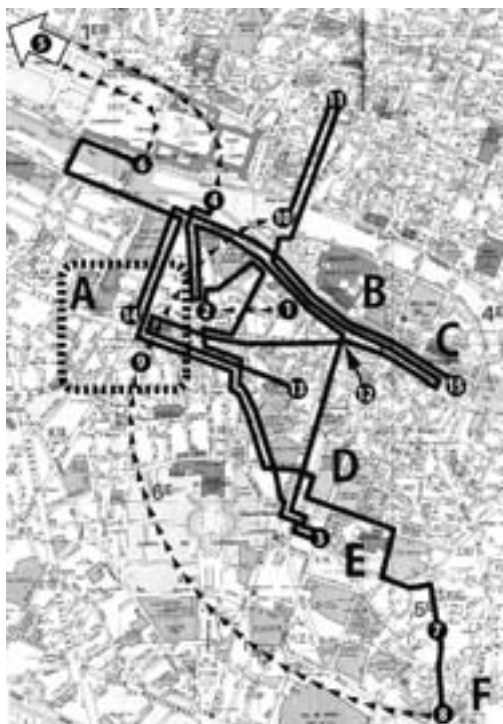


図1 主人公ピエールの7月30日から8月2日の放浪経路



図2 パリの歴史的國家軸とサン・ジェルマン・デ・プレ地区

することを勧められる。ウィリーから二枚の地下鉄切符を買い取ったピエール、所持金は六フランを残すのみとなる。深夜のキャフェ・ド・フロールの椅子で寝るピエールは、寒さに鼻をかんだハンカチと共に地下鉄切符が落ちたことに気がつかない。翌七月三一日、ナンテールに向かうピエール。地下鉄一号线終点ヌイイ橋で降り、徒歩でヌイイ橋をわたり更に数キロ先のナンテール、12, rue des carrièresのラデスコの家に着いても、本人はいない。来た道を引き返す。地下鉄に乗ろうと切符を探すが見つからない。ここから、ピエールのパリ放浪が始まる（図2）。

戻る先は、やはり古巣のサン・ジェルマン・デ・プレ界限。ナンテールから一キロもの直線距離を、夏の暑さのなか歩いて戻る。この映画のクライマックスである。途中で休憩するシャン・ゼリゼの公園ベンチで聞こえてくるオフィスガールのヴァカ

Picard / オテル・ド・セーヌの女主人ステファンヌ・オドラン Séphane Audran / ルンベン仲間（歌の上手）ジェジャン・ル・ブーラン Jean-Luc Godard / バリテイの音楽オタク Jean-Luc Godard

図1 いつも戻るサン・ジェルマン・デ・プレ界限（経路は筆者の土地勘で補っています）

図中地点凡例

①ピエールのアパート（グラント・ジグスタン河岸27番地）、②安ホテル（セーヌ街52番地のホテル）、③サンリス・ホテル（旧サン・ジャック門近く）、④学芸橋、⑤ナンテール方面（11キロ西郊）、⑥カルゼル橋、⑦ムフタル街、⑧サン・メダール教会、⑨サン・ジェルマン・デ・プレ地区のキャフェ、⑩ボン・ヌフ（新橋）、⑪中央市場、⑫サン・ミシエル広場、⑬パリ第5大学の石壁、⑭サン・ジェルマン・デ・プレ地区の路上、⑮モントベロ河岸（乳母車のルンベンと会う）、これ以降、遺産相続を知られる八月二二日まで、サン・ジェルマン・デ・プレ地区の路上暮らし
A サン・ジェルマン・デ・プレ地区/B シテ島/C ノートルダム寺院/D バリテイ大学（ソルボンヌ）/E パンテオン（サン・ジュスヴィエール）/F ゴブラン地区
図2 ベースマップ『地区別パリ地図』（ミシュラン社、一九八八年版）
図2 ベースマップ『ミシュラン・グリーンガイド・パリ』（実業日本社、一九九一年）
なお図1、図2の作図は川崎修良君に協力してもらいました。

ンス談義と給料の話。チュイルリー公園を経て、ルーブル河岸カルーゼル橋の高水敷で、子供のサンドウィッチを盗むのに失敗。食べものを漁るために、カルチエ・ラタンを横切つて市場のある第五区ムフタル街まで歩いていく。ここでは菓子置きに失敗、最後の六フランで、九フラン分のパン四分の一をおまけしてもらふ。古巣の界限に戻つてもヴァカンスで友人はいない。万事休すだ(図1⑥)~(9)。

ボン・ヌフの橋の上の石のベンチで夜を明かした翌朝、右岸の卸売市場レ・アルに行き、捨てられた果物を漁る。シテ島やパリ左岸の川辺で過ごすシーンは、あらゆるつてに見放された外国人の哀れな境遇を示して余りある。絶望したピエールは、延々と続く鞏固な石造の壁の前で「*salte de pierre* 汚い石」で出来たパリの街「め」とのしる(図1⑩)~(13)。

八月二日、誕生日を迎えたピエールは不幸のどん底にある。路上で目覚めた彼は、サン・ジェルマン・デ・プレからシテ島をさまよううち、とうとう靴底が割れる。疲れ絶望してノートルダム寺院の対岸モントベッロ河岸(15)で座り込んでしまふピエール。ここに、別のショットが入る。車



写真1 ピエールのまちな現在の



写真2 ルーブル宮と学士院を結ぶ国家的軸線の学芸橋



写真3 学芸橋からみるボン・ヌフ(新橋)とシテ島

を運転する男が、並木道を曲がり損ね樹木に激突して亡くなるシーンである。自動車には、Christian Wesselin, Moltra Strasse 17, Karlsruheの金属プレートが付いていて、ピエールの被相続人が亡くなったと分かる。それとは知らずに、河岸で寝ているピエールに、乳母車を引くルンペンが話しかける。

日付は飛んで八月二日、取材旅行からオルリー空港に戻ったJ・Fとミシエル。サン・ジェルマンのスナック・バーでJ・Fとドミニクは、フィリップからピエールの境遇を聞き、彼を探し始める。

他方、ピエールは、乳母車のルンペンとペアを組んで、ルンペン歌劇で物乞いの毎日。身をやつしたピエールと相棒がキャフエ・デ・ドウ・マゴの前で物乞い歌劇を演じた時、たまたまJ・Fとドミニクがそこ

に居合わせた。即興でピエールが弾いたバイオリン曲から彼の存在に気づき、J・Fはピエールに遺産相続者となったと伝える。ピエールは一瞬にして億万長者となつて映画は終わる。

映画の見所

タイトルの由来 この映画は、かつてのフランス人の夏休暇の取り方を知らないとい理解できない。革命記念日(七月一四日)前後に一斉にパリから人がいなくなつてしまふのである。獅子座の季節とは、標準的には七月二三日から八月二二日だそうだが、映画では六月二二日から八月二二日までの二ヶ月の出来事を描いている。「ヴァカンスのパリに起きた獅子座生まれの外国人についてのひとつの出来事」ということだろう。

(3) 恐らく、サン・ジェルマン大通りのパリ第五大学ルネ・デカルト校のルステイカ仕上げの地上階の石壁を背景に撮影された。ルステイカ仕上げとは、ルネサンスイタリヤの邸宅建築で流行した地上階を力強い石積で構成し、上階の柱列様式や窓枠様式の装飾と区別するデザイン方法。因みに、近年京都大学の人環や文学部建物のデザインもその本歌取りと推測できるが、似て非なるもの。

写真1 ピエールがサンドイッチの材料を買ったピュッシ街、二〇〇九年六月。

写真2 セーヌ川増水時、二〇〇一年三月。

写真3 彼方の高層ビルは六〇年代建設のジュシュのパリ大学の校舎、一九七二年八月。

パリの外国人というテーマ 主人公ピエール

を演ずるジェス・ハーンは、一九二一年生まれ、ノルマンディー上陸作戦に参加した元米国海兵隊員。戦後フランスに帰化し、九八年ブルターニュ地方サン・マロで死去。独特の風貌と声量の大きさ、そして米語なまりのフランス語で多くの映画⁽⁴⁾に出演したが、紋切り型の「アメリカ人」役に終始したのは気の毒である。ロメールの『獅子座』は彼の風貌を上手に生かし、必ずしもアメリカ人役ではない。友人のいなくなるヴァカンスに、遺産相続から見放され一文なしに陥るパリ暮らしの外国人の孤独と絶望、そしてとうとう、まちをすまいとするルンペン暮らしに陥る境遇を普通のパリジャンの暮らしと対比させて描き出す。

しかし、この映画が制作から四年も遅れた封切りで、しかも評判にならなかったのは、パリにいる外国人を特別に思っていないフランス大衆に受けなかった所為であろう。その無関心は、映画のなかでJ・F以外のパリ人がみせるピエールへの無関心と重なる。しかし、外国人を主人公とせずにはこのストーリーは成り立たなかった。パリ住まいのフランス人が文無しになれば、帰る田舎があるからだ。しかもパリを解放した米軍の海兵隊出身のハーンにこの役を振ったのは、五〇年代、米国文化の影響が色濃く表れていたパリの流行に対するロメールの戦略だったと思われるが、当たらなかった。この手の主題の作品は、ロメールの続く六〇年代の「六つの教訓物語」シリーズには出てこない。

ただ、六八年（学生争乱）以前のパリを

味わうには、六〇年代のロメールの映画や前記ヴァルダの映画はうってつけである。ともあれ、金のない貧乏学生で七一年のパリに住んでいた筆者には、人ごとでない映画として、記憶に強く残る所以である。

ピエールとJ・F、ドミニク、ミシェルと曖昧な友人関係 J・Fはジャーナリストで、仕事場は右岸の業務地区にある。恋人のドミニクは仕事で何かは分からないが、いずれも右岸の住人と推測される。彼等が右岸から左岸のサン・ジェルマン地区に遊びに移動するシーンは、コンコルド広場（右岸）とフランス上院（左岸）を結ぶコンコルド橋を渡るか、廃兵院のアレクサンドル三世橋を車でわたるシーンで示される。

いわゆる境遇の違いが、ボヘミアンのピエールと職業人J・Fやミシエルの間に厳然と存在する。住み働く地区と遊ぶ地区が違うのである。ドミニクは、J・Fが気がよくてピエールに踏み倒されると分かっている金を出していると思っている。ミシエルは、遺産相続が借金の嘘のいいわけであると思っている。したがって、J・Fがどうしてピエールと親しいのかがこの映画では分からず、シナリオのプロットが宙づりになっているような印象があるが、ロメールの映画にはよくあることで、意図的なものかも知れない。

他方、フィリップ（シトロエンDSを乗り回す事業家風）は、革命記念日の朝に、ピエールに一万フランを貸す人物だが、八月二二日のシーンで、出張から戻ったJ・Fとドミニクが、サン・ジェルマンのスタック・バー「ル・ヴィラージュ」でフィ

リップとたまたま会った際、次のように、ピエールを評している。

「一万フランを貸した話の」後日談があるんだ。数日してピエールが手紙をよこし、私（フィリップ）の家に泊めて欲しいと頼んできた。そして旅行費用も貸して欲しいと来た。多分路上暮らしをしているのだらう。当然無視したがね。彼が死んだら私の責任かも知れない。彼はこうも書いていた。追いつめられて盗みや人殺しさえしかねない。思うに、彼はわれわれの間にあると信じている「嘘の（字幕）友情に捕らわれて働こうとしないのではないか。」

“je crois bien qu'il est incapable de sortir de notre escorte anical où il ne travaillait.”

これに対して、J・Fは、「君はきついね」と答えているが、彼の感じている親密さの由来は不明なままなのである。

街の友人関係の浅薄さは、相続の前祝いのパーティーに集まった人間達のうち、皮肉屋の画家崩れフレデリック・ランベールの言動に表れている。また、パリからいなくなった友人たちのヴァカンスの居所や田舎の住所さえピエールは知らないのである。また、ガールフレンド（キャティ）の帰省先（田舎の両親の家に帰ったことになっている）さえピエールは知らないのである。

映画に出てくるものの値段 主人公が文無しになる映画だから、物価の描写は細かい。この時代、フランスはインフレで通貨切り下げ直後であった。一九五八年には二九%（対金相場）であったフランが、六九年には一一%となる。私が学生だった七一年当

(4) 詳しい解説はフランス語版のウィキペディア http://fr.wikipedia.org/wiki/Jess_Hain を参照。

時、映画の物価に一〇〇分の一を乗じた価格水準であったと記憶する。当時の私の一ヶ月の奨学金が三五〇フラン程度でゼロを三桁加えた旧フランを「ミルバル」と呼ぶ口語を若者たちが使っていたが、映画でも庶民や若者が口にする。映画に登場する物価をいくつか挙げてみよう。とにかく桁が多い。

- ・相続後返済の約束でピエールがJ・Fから借りた金額 五万フラン
- ・革命記念日にフィリップから借りた金額 一万フラン
- ・オフィスガールの平均給料 四万五千、五万フラン[ジャン・ゼリゼ公園での女性の会話]
- ・安ホテルの一泊代金 六〇〇〜七七五フラン[オテル・ド・サンリス]
- ・バゲット・パン 一本三四フラン、因みに一九九〇年当時三・五フラン(パンは公定価格)

- ・チーズ、鰯の缶詰(サンドウィッチの最低の材料) 一七〇フラン
- ・桃四つ 四五フラン
- ・ゴロワーズ(たばこ) 一箱 三〇フラン
- ・地下鉄切符(一枚) 一五フラン

映画の効果音の特徴 石と人への怨念 映画のなかで聞こえる言葉や音には、いろいろな仕掛けがあるようである。思いつくまゝ挙げてみよう。

①街の通行人の会話(内容は重要でない)を意図的に増幅してカットに挿入する。主人公ピエールの孤独が強調される。この手法は、後にヴィム・ベンダースも確か西ベルリンを描いた映画に使っている。

②友人達と騒いでいる頃には強調されなかった靴の音(石畳を歩く音)が、ピエールが放浪を始めるところから強調され始める。その靴音は、履き潰れた靴底が割れるシーンまで続く。この音は、当然、パリの舗装の石の硬さを思い起こさせる。

③落ちぶれたピエールがうろつくセーヌ河岸は、すべて石造の構造物で出来ている。石の拒絶感、ピエールの絶望を増幅させ、ピエールはパリの石、石で出来たまち、そしてパリの人間たちを呪う[*salut de pierre, salut de Paris, les gens.*]⁽⁵⁾、そして彼自身の名がPierre、つまり「石」⁽⁶⁾。

④ピエールが放浪を始めるきっかけとなった郊外ナンテール行き。目指す住所は、*rue des carrières*、すなわち「石切場小路」。パリの建物は、郊外の石切場から石を運んで出来ている。因みに、この名前の通りはナンテールに実在する。

⑤以上の効果音と、台詞に登場する「pierre」の言葉は、シナリオを書いてるのがロメール自身であるから、偶然ではなく意図的に選択されている。

ピエールの放浪経路 パリ左岸の生活空間と「歴史」国家的空間軸線 主人公のまちなかの放浪経路にはある特色がある。それを挙げてみると、

①この映画は、サン・ジェルマン・デ・プレで始まり、サン・ジェルマン・デ・プレで終わる。五〇年代パリのインテリとボヘミアンと学生の生活空間のシンボルであったが、この映画にとってもシンボルである。映画にはしかし、学生がほと

んど出てこない。唯一の例外は、近くの美術学校の生徒と思しきウィリーの女友達クリス。学生の生活については、ロメール作品『パリのナジャ』(一九六四年)という作品がある。

②主人公ピエールが暮らしていたグラン・ジグースタン河岸とサン・ジェルマン・デ・プレの間の地区は、五〇年代から六〇年代には、庶民的な境界であった。古い路地も多く、革命期ダントンが徘徊したオデオン地区(写真1)に隣接する。南にリュクサンブール公園を控え、その間を東西に中心市街サン・ジェルマン大通りが走る。

③映画には、パリ右岸が、モンマルトルと旧卸売市場(レ・アル)そして金を引き出す銀行を除いて、出てこない。五〇年代と六〇年代のパリでは、ロメールらを含むインテリや前衛芸術家たちの活動の場は、サン・ジェルマン・デ・プレからモンパルナスが中心であったからだろう。

④七月三十一日、ナンテールから歩いて帰ってきたピエールは、さらにパンテオンの丘(サント・ジュヌヴィエーブ山)を越えて、ムフタール小路の市場まで、食料を漁りに出かける。この経路は、左岸カルチエ・ラタンのもっとも起伏に富んだ散策路で、ムフタール小路はローマ時代から存在する歴史的道路軸線である。

⑤仕事を求めて、地下鉄一号線をヌイイ橋まで、後は徒歩でナンテールの「石切場小路」まで出かけたピエールは、切符をなくし、徒歩で一キロほどの道に戻ってくる。この一直線の軸線(図2)は、

(5) ピエールの姓ヴェッセルリン *Wesselin* はドイツ語圏に実在の名ではないようだ。ドイツ語の *Wasser* は「水」の掛け言葉とも考えられるが、映画の中で「水」を思わせるものはセーヌ川のみ。発音上はフランス語の *le bled* (血洗い) のイメージが想起されるが、この姓とストーリーとの関連は不明だが、以下は筆者の夢想。因みに、パリの「びんころ石」敷の車道は時として「セーヌ川」になるのをご存知だろうか。上流で取水され、路上を水洗する歩道に仕込まれており、道路清掃人がこの栓をひねると、すなわち、パリの街路がセーヌ川になるのである。残念ながら、映画にはこのシーンが出てこなかった。さすれば、ピエール・ヴェッセルリンの名すなわち「石を洗う人」という名付けも生きたことであろうと惜しまれる。

ルイ一四世時代からフランス国家がパリに植え付けた都市軸線である(写真4)。出発点は、チュイルリー宮(現存せず)。チュイルリー庭園が前庭でシャン・ゼリゼが遠近法の中心軸である。フランス式庭園の都市大への拡張例である。今も、革命記念日のパレードはこの軸線を辿る。

⑥さらには、ヌイイ橋の西方のラ・デファンス地区で五〇年代に始まる副都心開発は、この軸線の延長計画である(写真5)。ナンテールに向かうピエールが、曲面屋根の近代的な建物の脇を歩いていくシーンは、この開発を示している。しかし、この軸線は、宮殿の視座から発する視線で空間を支配しようという為政者の設置する遠近法であるから、現実にはその軸線に沿って移動するには鉄道や車が必要とする、まことにフランス独特の軸線趣味である。ロメールは、炎天下、ピエールにこの軸線を歩かせることによって、パリの歴史空間軸への批判的なディスクリを映画に忍び込ませているともいえる。

⑤と⑥に挙げた、国家的空間軸の延長線上に、五〇年代から開発の始まったラ・デファンス地区は、七〇年代には、見るも無惨なアメリカカ地区(民間業務高層ビル街)として、パリジャンが失敗と揶揄する代物であった。後のミッテラン大統領の時代にして政府がつくることによって、フランス流の国家的空間軸に回収したことはよく知られている。

ピエールがこの国家的軸線を歩き疲れて、サン・ジェルマン・デ・プレ界隈の彼の生

活空間に辿り着くときに渡る歩道橋が、ルーブル宮と学士院の間にかかる芸芸橋(ポン・デ・ザール)である(写真2)。一九九八年のパリと京都姉妹都市四〇周年記念に、長さを半分に縮めて水量の少ない鴨川に京都市が架けようとした橋である。⁽⁶⁾セーヌ両岸の国家施設を結ぶ橋が、京都では歓楽街の祇園北町と先斗町を結ぶ橋に相応しいかどうかは、読者諸氏の想像力にお任せするとして、この映画のなかでは、パリを形づくっている石(pierre)を呪う主人公ピエール(Pierre)がパリに絶望して佇む木と鉄の橋である。歴史上セーヌに架かる初めての鉄骨構造の橋で、一九世紀初めに架けられた。ピエールが木の床と鉄骨構造のこの橋にしばし絶望を癒す時を過ごすのも、映画が描くパリの都市構造の対位法に係わっている。

以上のように、

追いつめられていく主人公ピエールの境遇に対応して、ロメールはパリの都市空間を対位的に解説してみせてくれる。外国人とパリジャン、右岸と左岸、国家的空間軸に対峙させられる文無し徒



写真4 ルイ14世の庭園師ル・ノートル創案のチュイルリー庭園とシャン・ゼリゼを貫く国王の軸線



写真5 映画製作の時代に始まった「国王の軸線」上の業務地区ラ・デファンス

歩のピエール、国家空間軸と親密都市界隈のデ・プレ地区、石造都市とセーヌ川、石造橋(ポン・ヌフ)と鉄骨橋(ポン・デ・ザール)、まちの友人の浅薄な友情とルンペン同志の親密さ、などなど。

しかし、とうとう遺産を継承したことを知ったピエールは、直前まで彼を苦しめたパリの石の重圧を一瞬にして忘れてしまうかのようだ。獅子座のヴァカンスに悩まされた悪夢を水で洗い流すかのように。

以上の映画のプロットは、ここでは触れなかったヴァルダの『五時から七時のクレオ』とそっくりである。ほぼ同時に封切られた二本の映画は、同じコンテクストとしてのパリのまちから生まれた相似た夢だったのかも知れない。

(6) 拙稿「鴨川歩道橋とパリ芸術橋の真似の不可解な関係」『京都「Tomorrow」』一九九八年。次のインターネットでも公開中。<http://www.kyotomodiatyoinkan.kyoto-u.ac.jp/kyori/art-ville1998.html>

写真4 ベレルの版画、17世紀、パリ市カルナヴァレ美術館蔵、P. Pinon (sa direction), Les Traversées de Paris, Edition du Monteur, 1989

写真5 コンコルド広場のオペリスクとシャン・ゼリゼの凱旋門の右に建設中の高層ビルがみえる、一九七二年八月。

本稿に使用した写真は、4 以外は筆者の撮影。

シンクタンクの世界から考える 生物多様性の保全

古賀啓一 KEIICHI KOGA



古賀啓一（こが けいち）
一九八二年福岡県生まれ。二〇〇七年京都大学大学院人間・環境学
研究科相関環境学専攻生物環境動態論分野修了。後、株式会社日本
総合研究所入社。現在、創発戦略センター、グローバル・アジア・オ
フィス市場開拓グループ所属。専門は生物多様性、CSR、農業。主
な著書に『なぜ、日本の水ビジネスは世界で勝てないのか』（共著）
（二〇一一年一月、日刊工業新聞社）、『図解次世代農業ビジネス』
（共著）（二〇〇九年十二月、日刊工業新聞社）、『地球温暖化で伸び
るビジネス』（共著）（二〇〇七年二月、東洋経済新報社）がある。

1 “Do” tank

「カナダには新鮮な野菜がない、植物工場はきつとニーズがあるよ。」

中高大と同じくした友人は、大学院修了後ビジネスの世界に移った自分とは違い、アカデミックの世界に残ってポストドクをカナダで過ごしていた。カナダの冬は寒い。

この時期になると野菜を生産しようにも生育できる環境がない。必然、スパーに並ぶ野菜も値段の割に品質の悪いものばかりになってしまい、自炊を好む友人の不満の声となっていた。新鮮な生野菜を求めてしまうのは日本人だからということもあるだろうが、カナダでは新鮮な野菜というだけで全く新しい商品として市場のポジションをとる可能性がある。およそどのような環境下でも野菜生産を可能にする植物工場はこうしたニーズに応えることのできる技術だ。

植物工場の定義は難しい。一見してどこにでもみられるようなハウスのようなものから、完全に人工光のみで栽培を行うタイプなどがある。いずれにも共通しているのは、太陽光の補助か、太陽光に代わるものとして蛍光灯やLEDなどの人工光が使わ

れている点である。密閉された環境下では農業なしで病害虫の発生も最小限に抑えることが可能となり、生産された野菜は外側の葉も捨てることなく、しかも洗わずに食用として利用することができる。

植物工場野菜は、国内では関東関西を問わず広まりを見せており、私たちも知らずに食べているかもしれない。例えば外食産業では洗わずに利用できる事が受けて利用が広まっているほか、小売価格についても特に二〇一〇年の春先に起きた異常気象時など露地物の野菜より安くなったぐらいで、徐々にその存在感を増しつつある。

先の友人がカナダに植物工場が欲しい、ということを書いていたが、今まさに私がビジネスとして植物工場の導入を進めている先は中国だ。よく知られている通り、中国では食品の事故が多発しており、自国産の食品に対する信頼が非常に低い。消費者アンケートの結果によると、自国の食品を信頼していると回答したのは一〇％以下という結果もあるほどだ。これは三つの点から大きな社会的課題だといえる。

ひとつは食品安全の問題だ。国内での事故が続くことは、生活する国民全体の命を危険にさらすことになる。二点目は農民問題だ。中国では農村部の住民の所得が特に

低く、格差が広がっている。今でも農村部の住民の暴動が起きかねない状況であり、特に地方政府としては農村部の住民の所得を上げることが重要なミッションとなっている。これらは中国国内の課題だが、三点目は日本を含む世界全体にとっての課題である。世界の人口が九〇億人まで増加するとされる中で、食料資源の限界は早くから警鐘を鳴らされている。こうした状況下で、広大な農業生産地を持ちながら食品として危険で利用できない、しかも人口増加で食料の需要量が増加する中国を放置することは世界にとってのリスクだ。

こうした社会的課題に対して解決策をトライアンドエラーしていくことを、現在の私はシンクタンクの端くれとして取り組んでいる。これは一般にシンクタンクで想像されるリサーチや政策提言の活動から一歩枠を越え、実業の世界に片足を入れることになり、その点をして考える（Think）だけでなく実行する（Do）、“Do tank”を標榜している。技術的な専門性や事業経験が実業の世界の方々に及ぶ物ではないのは当然であり、社外のご協力なしには進めることができない。先の植物工場についても、実に多様な業界、業種の方との協働のもと取り組みを進めているのである。

中国に何度も赴き、現地での食料生産の現場を見るにつけ感じるのは、環境との共存の難しさだ。大陸型の環境と言ってしまうまでもないのであるが、日本の農村と比べると圧倒的に植物層が貧相だ。目に見えるところはもちろん、目に見えないところでも環境破壊は進む。例えば水について、農業等による汚染水の流入が原因となる水質汚染や過剰な地下水くみ上げによる砂漠化は現在も進行中の危機として知られている。

“Do tank”としての私の業務は、こうした課題を当事者に認識してもらうこと、課題解決に有効な方策を検討・提案すること、そして、実務へと落とし込み、事業者の活躍する場を整備することにある。理想論を現実結びつけるという言い過ぎかもしれないが、私にとっては環境問題の解決、特に生物多様性の保全が理想であり、既に技術を有する企業や今後活性化すべき分野へとつなげていくために日々いそいそしている。日々の業務に幅広い分野への理解が必要となる中で、その素地は大学時代に築くことができたと感じている。

2 環境問題の生物多様性への帰着

私が総合人間学部、人間・環境学研究科にきた理由は高校時代に遡る。当時から環境問題にはほんやりと興味を持っていたが、京都議定書に係る締約国会議の存在がこの分野に進む事を方向付けた。といっても、京都議定書への共感ではない。むしろ逆に、世間がCO₂一色で環境問題を語ろうとし

ている風潮に反感を感じたことが原動力となった。教科書では公害から始まる環境問題が、有明の干潟が、オゾンホールが、まだまだ環境というくくりで解決されなければならぬ課題が世界中に転がっているだろうに、なぜ、CO₂だけ世間がこきまて大騒ぎしているのだろうか。当時、関連する新聞の記事を切り抜き、集めている中でそのようなことを考えていた。環境問題の本質は何なのだろうかということを考え始めたときに、環境を学べる大学として紹介されていたのが、総合人間学部だった。

総合人間学部の専攻・副専攻制度は環境問題へのアプローチの多様さを感じ始めていた自分には魅力的で、およそ環境と関係があると感じたものにはなんでも飛び込んでみた。環境サークルをはしごしつつ、農学部のゼミや内外のセミナーにも参加した。試行錯誤の中で自分なりにたどり着いた答えが、環境問題は生物の変化によって認知される、ならば生物の保全を考えていけば自然と環境問題の解決につながっていくのではないか、ということだった。この短絡な仮説について、研究室配属時、瀬戸口准教授にバイカモの保全研究というテーマを与えてもらい、検証させていただいた。

バイカモはかつて水田雑草としてどこにでもありふれた植物だったが、農業や水路のコンクリート整備が進んだ結果、絶滅が危惧されるまでになった水草だ。研究では国内の分布、集団の遺伝構造、種間の遺伝構造を調査し保全に向けた提言も含め考察を行った。

この研究を通して学んだのは、感覚とし

ての種分化の歴史の重みと、保全すべき対象への視点・考え方だったように思う。集団間の遺伝構造が、どのような地理的移動、集団の絶滅と再移入を繰り返してきたのかを考察したとき、一つ一つの集団・個体のたどってきた歴史の偶然性、今ここに存在することがいかに奇跡的なことを思い知らされた。そして、その結果として生まれた生物多様性というものが、いかに貴重なものかということを感じとして理解することができた。このことは、以後環境問題について考える際の私の基本となって根付いている。

例えば植物工場について、照明や空調にエネルギーを使うことで環境負荷が高いという考え方があり。一方で、植物工場では野菜を促成栽培させることができ、年間で一〇毛作以上を行える。しかも多段式の栽培棚でプランターを上方向に積み上げることにより単位面積あたりの生産量をさらに一〇倍にすることができる。すると、単純に考えれば同じ農地を一〇〇倍に広げると同等の生産力が期待できることになる。これは、生物多様性減少の最大要因とされる生息地破壊について、農業のための新たな開墾を抑制することで貢献できるのではない。土壌改良と栽培時の施肥・農薬による水質汚濁などの可能性も、植物工場の場合は外部環境と隔離することで解決できる。もちろん既存の露地栽培が農村での生態系を作ってきたことは間違いないわけであり、それらを否定するつもりはない。実際、植物工場で置き換えることができるのは一部のケースにとどまるだろう。しかし

図1 中国で最も広まった施設園芸手法である中国式温室（左）と、露地栽培現場（右）。モデル農業園区では大規模造成が行われている。



ながら、農業の不使用や施肥の減量を進める既存の環境配慮型の農業に、別視点のアプローチとして植物工場は有効なのではないかと考えている。

もうひとつ、私が関わったビジネスと生物多様性をつなげた事業に、生物多様性ファンドというものがある。これは、住友信託銀行の商品として一般向けに販売されている投資信託商品で、簡単に言えば生物多様性保全への取り組みがある企業の株を購入し、それら企業の事業を間接的に支援する試みである。環境やCSRに配慮した企業の株を買う社会的責任投資（SRI）という考え方があがるが、同様の思想に基づいた金融商品が存在し、企業の取り組みを評価するため、社会の方向性に消費行動を通して意見する仕組みが存在していた。生物多様性保全の取り組みが企業にとってどのようなメリットがあるか理解が広がらない中で、このファンドは株価という形で明確に貢献することができる。まだまだ小さな取り組みだが、世界で初めての生物多様性ファンドということで海外でも国連関係機関の記事にて報告された（図2）。こうした地道な取り組みで、生物多様性の保全が利益につながることを明らかにしていけば、自然と生物多様性の保全が回りだすことになる。

3 生物多様性とビジネスの連結

生物多様性の保全が企業の利益につながるものが一般化し、ビジネスとの連結を強

く意識することが生物多様性の保全を強く後押しすることになる。このことは、CO2をめぐる社会の取り組みと比較すると分かりやすい。一〇数年前まではCO2を認知している人などほとんどいなかった。それが、国としてのCO2削減枠が定まり、省エネルギーによるコスト削減と、新エネルギーや再生エネルギーなどのエネルギーの多様化による事業の安定化、CSRとしてのブランドイメージ効果等と相まって、今や世間の常識となった。社会での課題認識、検証は科学の世界が始め、政治が社会問題として公式に認知すると、ビジネスがサービスを生み出し対価をもらう社会システムが組み上がる。ビジネスは社会システムを構築する過程でより多くの人々をステークホルダーとして組み込み、課題解決の原動力を強化することができる。現状、CO2はビジネスのステージにあり、生物多様性は科学のステージから政治のステージに足を伸ばし始めたばかりだ。生物多様性について、昨年一〇月に生物多様性条約締約国会議COP10が名古屋で開催され、期間中にはメディアの注目を集めることに一定の成功を収めた（図3）。しかし、直後の今になって、震災の影響もあるとはいえ生物多様性の話題はすっかり影を潜めている。政治の面では、せっかく生物多様性条約締約国会議を日本で開催し、名古屋議定書を採用しておきながら、署名はこの五月に入ってからという有様だ。生物多様性保全がビジネスと結びつき、社会システムができあがるのは、まだまだこれからといったところだろ

う。生物多様性の保全が社会に浸透するまでまだ時間がかかるとして、その間にできることは何だろうか。ひとつは、生物多様性保全に係るテーマの抽出と、その対処法の確からしさを高める事にあると感じている。例えば、ビジネスの世界で生物多様性によかれと考えて実行に移された、社会貢献としての植林事業がある。科学者やNGOの指導のもと実施された一部の植林事業は、時を経て森林の生物多様性を減少させる悪影響を指摘されるようになった。当初は環境によかれと思って実施したことに疑いはないが、結果として悪影響を与えるに至ってしまったのである。こうした事例が増え、企業として二の足を踏むきっかけを増やすことになってしまう。また、日本だけを見ても植林以外に手を付けなければならぬテーマは数多く存在している。しかし、企業が真っ先に目を付けるのは先行事例の蓄積のある植林というのが実態だ。取り組むべきテーマの優先度を明らかにし、その対処法を精査していく必要がある。

その上で、CO2に排出権取引制度のようなビジネスが生まれたように、生物多様性の保全につながるビジネスが成立するルールを新たに作っていく必要がある。例えば、生物多様性にもオフセット制度を作ろうという試みは海外で既に始まっている。オフセットが成立するのは質的に等価な物を相互にやり取りできる場合に限られるため、CO2では成立しても生物では成立しないと声もあり、私自身も厳密に言え

図2 国連環境計画・金融イニシアティブ（UNEP FI）の機関紙にて、日本で作られた世界初の生物多様性ファンドが紹介される。



図3 生物多様性条約締約国会議COP10を前にメディアが活発に取り上げた。筆者も、松本環境大臣との対談に研究員として参加した。



ば穴の多い考え方だと感じている。しかし、オフセット制度の不在は生物多様性の減少を抑える社会的な理由作りを先延ばしすることになる。CO2では目標を達成できなかった企業にとって未達分を購入する必要が危惧された。事業活動を圧迫しないようにする必要性からCO2削減の取り組みが実行されたのである。対して生物多様性にはそのような仕組みは存在しない。事業活動に合わせて保全を求めるルールを作れば、それだけ現在よりも保全へのインセンティブは高くなるはずだ。

ルールができればそれに合わせた新しい事業領域が生まれる。環境ビジネスという形でくられる領域に生物多様性の保全を明確に位置づけていきたい。前述の生物多様性ファンダムその一つとなるだろうし、環境アセスメントや新エネルギー、農林水産業などにもビジネスの種は広がっている。ルールの検討と同時に種を撒き続けていくことが、今私の立場からすべきことだと考えている。

4 今と未来の二つの軸

環境面から社会のあり方を考えたとき、生物多様性の保全がCO2やオゾンホールといったその他の社会的課題と対立することとはほとんどない。しかし、環境以外にも含めて考えると単純に運ばない。最近特に頭を悩ましているのは、貧困問題との対立である。

今、ビジネスの世界でBOP (base of the pyramid) と呼ばれる貧困層を対象とした

ビジネスが注目を浴びている。広義には人口ピラミッドの中で特に多数を占める貧困層に合わせたビジネスを展開することをさす。貧困問題という社会的課題の解決という視点でとらえると、貧困層の所得をあげるためにビジネスを現地化していくということも含まれる。実際に同じ部署において、アフリカやインドで事業が立ち上げられている。

倫理的な意味において、こうした貧困問題の解決に異議はほとんどないだろう。しかし、誤解を恐れずに述べると、純粹に環境の面から考えたときに貧困層の所得増加は環境への負荷を上げることになり、生物多様性の保全という意味では逆方向に進む可能性がある。貧困問題が現在世代の生活に係る課題であることに対し、生物多様性保全の問題が将来世代の生活を見据えた課題であること、この時間軸の差が議論となるように思う。

二つの課題を同時に解決する方法が存在するのか、よくわからないというのが正直なところだ。ただ、一般に将来もたらされる価値は現在の価値として換算する過程で割り引かれる。そのため、将来起きるかもしれない不確実な影響への予防より、現在既に起こっている影響への対処が優先されるのは仕方ないことなのかもしれない。それでもできることがあるとすれば、利用できる資源の枠を決めてしまうことが挙げられる。エネルギーや鉱物等の天然資源の採掘然り、開拓や都市開発に係る土地の開発然り、最初から枠を決めておくことができれば、最悪それ以上影響を与えずにすむ。

あらゆる資源が有限であることを鑑みると、CO2で言うところのキャップを、社会の活動のあらゆる面で考えていくべきなのかもしれない。日本は元々狭い国土にわずかな資源の上で工夫を凝らして発展してきた国だ。世界全体でキャップができたときには意外な強さを発揮するのではないか。

生物多様性のビジネス領域への浸透はまだ課題ばかりだ。行政、事業者、一般消費者、それぞれに合わせた言葉でそれぞれが関心を示さざるを得ない方向を考えていく必要がある。そうしたとき、生物に係る専門性を高めつつ多方面への視野を高める事ができた総合人間学部、人間・環境学研究所という場は私にとって最適だったと改めて感じている。修了後も多方面に散らばっていった同級生と頻繁に連絡をとっており、意見交換を通して自分なりの解を探している。

研究者としての専門性もなく、実業で鍛えられた実績もない自分が、それでもシンクタンクの世界で必要とされるには、個別の知見・技術を理解した上で、あるべき方向性を示し、それに合わせた知見・技術の組み合わせを提示していくしかない。ニッチなこのつなぎ目の世界に、様々な形でインプットしてくれる、協働してくれる仲間が増えていくことを期待したい。そして、私のライフワークとして、生物多様性保全ビジネスと称される領域が当たり前に存在する社会へ導く礎の一つとなっていきたい。

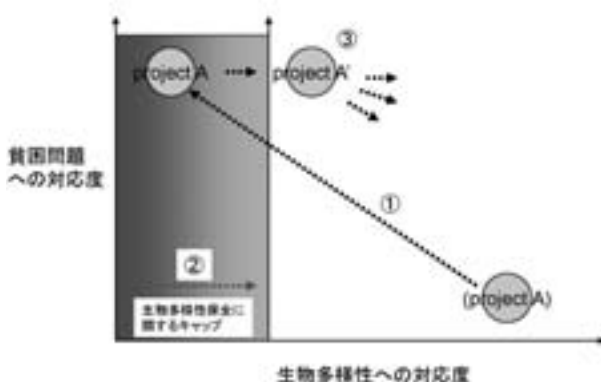


図4 ① project Aについて、貧困問題への対応に重点がかけられ、生物多様性への対応が後回しになりがちところを、②社会的なルールとしてキャップをはめることで生物多様性への対応を義務化、スタート地点に生物多様性を組み込むことで、③その後の対応に係わらず一定の保全効果を見込む。

オオサンショウウオに 迫る外来種問題

吉川夏彦

NATSUHIKO YOSHIKAWA



吉川夏彦（よしかわ なつひこ）

1982年栃木県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。
京都大学博士（人間・環境学）。専門は爬虫両生類学、動物系統分類学。

オオサンショウウオという生物をご存じだろうか。おそらく大部分の読者の方々は本や新聞で読んだり、動物園や水族館で実際に見た経験があるだろう。オオサンショウウオは世界最大の両生類の一つであり、最大で全長一・五mにも達する。国の特別天然記念物にも指定されて手厚く保護されており、日本のみならず世界的にも非常に有名な生物である。そんなオオサンショウウオは、分類学的には両生類の中の有尾類と呼ばれるグループに含まれ、山地に生息する小型のサンショウウオ類や、水田などでよくみられるイモリに近縁な仲間である。オオサンショウウオ類の化石はヨーロッパからも発見されており、かつては北半球

全域で繁栄していたものと考えられるが、現在では世界に三種、北米東部産のアメリカオオサンショウウオ、中国産のチュウゴクオオサンショウウオ、そして日本固有のオオサンショウウオが知られるのみである。このうち日本産と中国産は互いに近縁であるが、アメリカオオサンショウウオはこれらとはやや遠縁にあたるのがわかつている。

日本のオオサンショウウオは愛知県より西の本州と大分県に自然分布しており、一般には山奥の清流にすむ珍しい生物と想われている。しかし、元々は山村の田畑の間を流れる河川にも普通に生息していた身近な生物であり、特別天然記念物に指定される以前は食用とされていた地域も多い。京都市内でも主要な河川の上流部に多く生息しており、下流に流された個体が市街地で見つかり新聞紙面を賑わすことがある。中でも賀茂川は、桂川支流の清滝川と並ぶ有名なオオサンショウウオ生息地であり、多数の個体が生息している。しかし近年の調査から、この賀茂川のオオサンショウウオに非常に厄介な問題が生じていることがわかってきた。ここでは、その概要について紹介していきたい。

外来種問題

近年、生物多様性の危機が叫ばれ、その保全が世界的な課題となっている。その危機を引き起こしている大きな要因の一つが外来種の問題である。現在日本で問題となっている外来種としては、沖縄に移入さ

れたマングースや、今や琵琶湖はじめ各地の水域に定着したブラックバス、ブルーギルなどが特に有名であるが、他にも多くの外来動植物が競争や捕食を通して在来種を絶滅の危機に陥れている。そして現在、賀茂川のオオサンショウウオに起こっていることも、この外来種問題なのである。

ただし、賀茂川では少し事情が違う。賀茂川に持ち込まれた外来種は、オオサンショウウオ（以下日本産）の近縁種であり、生態もよく似たチュウゴクオオサンショウオ（以下中国産）だったのである。さらに厄介な問題は、導入された外来種と近縁な在来種がいる場合には、在来種と外来種の間で交雑が起こりうるということである。これは遺伝子汚染と呼ばれ、いったん起こると外来種と在来種の遺伝子が混じり合い、純粋な在来種の消滅へとつながる。そして現在、賀茂川に元来生息していた日本産と、移入された中国産との間で実際に交雑が起こり、日本産の種としての純粋性が失われつつあるのである。同様な問題は、タイワンザルとニホンザル、タイリクバラタナゴとニッポンバラタナゴなどでも深刻化しており、雑種の駆除などの対策が取られているが、オオサンショウウオについてはまだ有効な対策はとられていない。

この中国産の正確な由来はわかっていないが、現在の賀茂川状況からみると、まとまった数の中国産が放たれたことは間違いないように思われる。新聞報道によれば、一九七三年（昭和四八年）に岡山県の建設業者が中国産八〇〇匹を食用に輸入したが、文化庁から「日本産との区別が困難であり

在来種の密猟を助長する」との指導がありほとんど売れなかったという。このとき輸入された個体の一部が賀茂川に放たれたのが問題の発端ではないかと筆者らのグループでは考えている。

賀茂川のおオサンショウウオの現状

この問題について現状を明らかにするために、筆者らは賀茂川でオオサンショウウオの捕獲調査を行い、二〇〇九年六月から二〇一〇年八月にかけて七九個体を捕獲した。そして全個体について遺伝子鑑定をおこなった。その結果、純粋な日本産と判定されたのはそのうち三個体のみで（図1）、七六個体が何らかの形で中国産由来の遺伝子を保持しており、日本産と中国産の雑種もしくは中国産と推定された（図2）。実に賀茂川産オオサンショウウオの九六%以上が遺伝的に純粋な日本産ではないとの結果が得られたのである。

さらに、雑種の中にはミトコンドリア遺伝子と核遺伝子とで結果が食い違う個体も多く見られた。つまりミトコンドリアでは日本産と判定されるが、核遺伝子では中国産と判定される、もしくはその逆の遺伝子型を持っているということである。このような遺伝子型を持つ個体は、雑種同士または雑種と親種との交配によってしか出現しないものであり、日本産と中国産の交雑どころか、交雑によって生まれた雑種がすでに成熟し、繁殖し始めていることを示している。このことはまた、遺伝子鑑定で日本産と判定された個体の中にも、実際には

雑種の親に由来し、現在の鑑定の精度では「見かけ上」日本産となっている個体が含まれる可能性があることを示している。このため我々は、調査する核遺伝子の数をさらに増やして遺伝子鑑定の精度を高めることを試みている。これが実現すれば、さらに詳細な賀茂川のおオサンショウウオの現状が明らかになってくるだろう。

日本産と中国産の雑種が、なぜ賀茂川の中にこれほどまでに広まってしまったのだろうか。正確なことはわからないが、これには巣穴を占有した一匹のオスが多数のメスを独占するオオサンショウウオの繁殖習性や、雑種強勢による影響があるのかもしれない。実際に北米産のカリフォルニアトラフサンショウウオでは、釣り餌用に移入された近縁種オビトラフサンショウウオとの交雑が報告されている。そして雑種強勢により生活力が強く、強健な性質をもった雑種が増加し、在来種をはじめとして多くの両生類を駆逐して個体数を減少させているという。これと同じことが賀茂川で起こっているのかどうかは不明であるが、河川生態系の頂点に位置するオオサンショウウオの異常事態が、他の生物にも大きな影響を与えている可能性は高い。

この問題を根本的に解決するには、賀茂川からの雑種と中国産の隔離・保護が必要だが、これには膨大な手間と時間がかかる。また相手が保護動物であることから、対

策にあたっては法的な手続きも必要であり、今後は行政が主体となって長期的な視野で対策事業が行われることが望まれる。そしていつの日か、純粋な日本のオオサンショウウオが賀茂川に戻ってくることを期待したい。



図2 賀茂川で捕獲されたオオサンショウウオ。(上) 中国産の特徴が強い体色の個体。全長102cm。(下) 日本産と中国産の中間的な体色の個体。全長89cm。

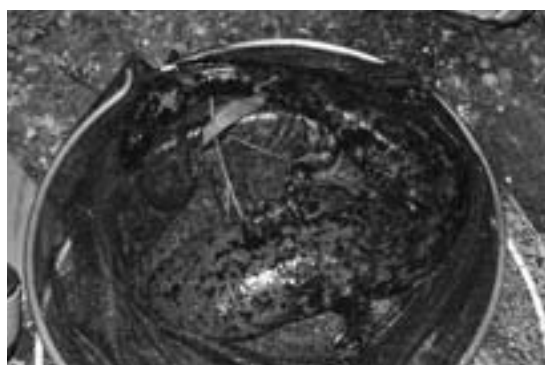


図1 賀茂川で見つかった日本産の1個体。全長85cm。頭部にみられる多数の小さな黒い点と、黒い大きな斑紋がある体色が日本産の特徴である。しかし外見だけでは雑種との判別が難しい場合も多い。

(1) 遺伝子鑑定はミトコンドリア遺伝子と二種類の核遺伝子を用いて行った。ミトコンドリア遺伝子は、細胞質中に多数含まれるミトコンドリアに存在するので分析が容易だが、母親からしか遺伝しない特性から雑種の判定には使用できず、日本型・中国型の判定のみに用いる。核遺伝子は細胞の核に含まれる遺伝子で分析に手間がかかるが、両親に由来する遺伝子を特定できるため雑種の判定が可能である。

(2) オオサンショウウオのオスは八・九月の繁殖期が近づくと繁殖用の巣穴に入り、そこでメスが来るのを待つようになる。繁殖に適した巣穴の数は限られているため、オス同士で争いが起こり、強いオス(メス)が巣穴を占有することになる。そこに産卵のために複数のメス(一匹あたり四〇〇〜五〇〇個産卵)がやってくる、このメスが中国産だった場合には産卵した卵の大部分が中国産の精子を受精してしまうことになる。

(3) ある生物種間の雑種が、大きさや成長速度、繁殖力、環境への適応性など様々な性質において親種よりも優れること。

思いがけぬ新史料の「発見」 ——天一閣蔵明鈔本「天聖令」

辻 正博

MASAHIRO TSUJI



辻 正博（つじ まさひろ）

1961年、滋賀県生まれ。1986年京都大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了。博士（文学）。京都大学人文科学研究所（東方部）助手、滋賀医科大学医学部助教授を経て、現在、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は中国中世～近世の政治制度史。著書に、『草創期の敦煌學』（高田時雄編、知泉書館、2002年、共著）、『唐宋時代刑罰制度の研究』（京都大学学術出版会、2010年、単著）、『中国訴訟社会史の研究』（夫馬進編、京都大学学術出版会、2011年、共著）などがある。

古代日本が唐の政治制度を範として国制を整えたこともあって、わが国ではこれまで「律令制」に関する研究が数多くなされ、唐律・唐令に対しても強い関心が持たれてきた。散逸した唐令の条文集成が日本人の手によってなされ（仁井田陞『唐令拾遺』、東方文化学院、一九三三年）、その補編がやはり日本人研究者によって編まれた（仁井田陞著・池田温編集代表『唐令拾遺補』、東京大学出版会、一九九七年）のは、決して理由のないことではない（写真）。

よく知られているように、唐代の法典は「律・令・格・式」から成る。律は刑法、令は行政法、格は追加法、式は施行細則である。このうち、典籍の形で今に伝わるの

は「律」のみであり、「令」以下については早い時期に散逸してしまい、中国西陲の敦煌やトルファンから出土した古文書の中に僅かにその姿を止めているに過ぎない——ごく最近まではこのように説明されてきた。しかし、近年になって状況は一変した。中国・寧波の蔵書楼にひっそりと守り伝えられてきた書物がじつは「令」の写本であったことが二〇世紀末に判明し——亡佚したとされてきたものが見つかったという意味において、これを「発見」と呼ぶことも許されよう——、二〇〇六年に公刊されたからである。

「発見」されたのは、「天聖令」という十一世紀前半に編纂された法典（後半の三分の一のみが残存）である。この法典が編纂されたのは北宋時代であるが、その内容たるや、唐令を土台としつつ必要最低限の改変を加えただけの古色蒼然たるものであった（実のところ、唐令と大して変わらない条文も珍しくない）。それゆえ、宋代法典としてのインパクトは弱く、むしろ、唐令復原の重要資料として注目を集めることとなった。

小文では、この新史料「発見」経緯のあらましを紹介することで、私の研究分野である唐宋法制史研究における「知の息吹」をお伝えできればと思う。

明刊本『名公書判清明集』の衝撃



写真1 『唐令拾遺』と『唐令拾遺補』

のことをどうしても想起してしまう。長らくその存在を忘却されてきたこの書物が一九八〇年代後半にふたたび脚光を浴びたこと——これもまた「発見」であろう——が、宋代法制に対する研究者の関心呼び起こし、研究を活気づかせるきっかけとなったからである。私が法制史の分野に関心を持つようになったのも、これと大いに関係している。

私が唐宋時代の法制のことについて勉強し始めたのは、一九八八年に人文科学研究所（東方部）の「歴史地理」研究室の助手になった前後のことである。当時教授として研究室を主宰されていた梅原郁先生は、一九八六年より「中国近世の法制と社会」研究班を組織され、私も博士後期課程在学のころからその末席に連なっていた。

人文研のいわゆる「共同研究班」には、研究発表を主とするものと、史料の輪読（本読み）を主とするものがあるが、この研究班は後者に属し、年に一―二回、輪読の当番が回ってきた。そこから受ける知的刺激は、時に忘れたいほど強烈なもので

（1）この外、『故唐律疏議』についても、テキストの精密な校訂と訳注が、律令研究会によって行われた。『訳註日本律令』律本文篇・唐律疏議訳註篇（東京堂出版、一九七五―九六年）。

あり、今でも複数の研究班に参加しているのは、無意識のうちにそれを期待してのことも知れない。

さて、それまで中国近世の都市をテーマとする研究班を主宰してこられた梅原先生は、八六年から宋代法制史料を読む研究班を立ち上げられた。その前年、名古屋大学（当時）の高橋芳郎氏が上海図書館所蔵・明刊本『清明集』の一部を、写真版として日本に将来し紹介されたことが、そのきっかけとなっていたようである。

『清明集』は、南宋時代（十二～十四世紀）後期の判牘（はんく）（裁判の判決文）を集めた書物である。書物じたいは従来からよく知られていたもので、戦前に仁井田陞氏が「清明集戸婚門の研究」（一九三三年、『補訂中国法制史研究 法と慣習・法と道徳』東京大学出版会、一九八〇年所収）を発表したほか、戦後にはたとえば滋賀秀三氏の『中国家族法論』（弘文堂、一九五〇年）、『中国家族法の原理』（創文社、一九六七年）といった著書において史料として縦横に引用されている。しかしそれは、静嘉堂文庫（東京）が所蔵する天下の孤本・宋版『清明集』であり、「戸婚門」のみを収めるものであった。

これに対して、明版『清明集』は、「戸婚門」（宋版には無い史料を含む）の外、官吏・賦役・文事・人倫・人品・懲惡の諸門から成る、全十四巻の大部な書物である。つまり、高橋氏が日本の学界に紹介された明版『清明集』は、従来知られていた宋版『清明集』に比べて数倍ほどの内容をもつ、まさに「新史料」と呼ぶべきものであった。

一九八七年、中国社会科学歴史研究所

の陳智超氏らにより明刊本を底本とした標点本が出版されたことが更なる呼び水となって、宋代法制史に対する関心は以前にも増して高まった。『清明集』に記されている内容を正確に理解するために、当時の司法制度や社会全般についての理解を深める必要が生じ、それに関する研究も数多く発表されるようになった。私もその驥尾に付して、何本か論文を書くことができた。折しも、同年代の研究者が何人か近いテーマについて関心を持っていたため、お互いに刺激し合って研究を進めることができたのは幸いであつたと思う。昨年刊行した『唐宋時代刑罰制度の研究』（京都大学学術出版会、二〇一〇年）の後篇に収めた諸論考は、こうした中で書きためた文章を整理したものである。

『慶元条法事類』の整理・標点

『清明集』によって宋代の法制に対する研究者の関心が高まったこともあってか、従来必ずしも研究資料として活用されてきたとは言い難い法制史料にも、スポットライトが当てられるようになった。南宋時代の法令集である『慶元条法事類』について、標点本が出版される運びとなったのも、こうした流れの上にあると言えよう。この書物は、梅原班でも『清明集』と交互に輪読していたのであるが、テキストに使っていた清鈔本（静嘉堂文庫所蔵）の出来映えが今ひとつであったことも手伝って、その読解にはかなりてこずったものである。

折しも中国では、特に九〇年代以降、大

型の出版企画が相次いでいた。その背景に、一九八〇年代より推進されてきた「改革开放路線」の経済面における輝かしい成功があったことは、言うまでもない。企画の多くは、書棚に飾って見栄えのする美術書や複製の線装本などを中心に据えたものであったが、図書館向けの「資料集成」が企画されることも時にはあった。

「中国珍稀法律典籍集成」なる叢書（全十四巻）が一九九四年に北京の科学出版社から出版されたのも、かかる大型出版企画ブームの流れの中に位置づけることができる。むろん、法整備を急務としていた法務当局の関心が伝統中国法にも向けられていたことも、企画の実現に大きく作用したことは想像に難くない。

中国大陸のみならず、台湾・日本・アメリカ・ロシアなどに所蔵される中国法制史関係の稀覯本を集めて整理・標点するというこの試みは、大方の好評を博したらしく、間もなく続編が企画された。それに収録する典籍の一つとして『慶元条法事類』がリストアップされ、上海師範大学の戴建国教授にその整理・標点が割り当てられた。そしてこれこそが、「天聖令」が世に現れる直接のきっかけとなったのである。

「世紀の発見」——明鈔本「天聖令」

戴氏は、『慶元条法事類』のテキスト調査を進めるなかで、偶然にも寧波の天一閣博物館が「官品令」なる書物を所蔵していることを知った。「天一閣」とは、明代の著名な蔵書家・范欽（一五〇六～一五八五）の建

てた蔵書楼であり、その蔵書内容は『天一閣書目』等の目録により知ることができる。戴氏が「官品令」の存在を知ったのは、『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、一九八六年）という目録を通してであった。それには、

官品令三十卷、明□□□撰、存十卷、
卷二十一至卷三十。烏糸欄、鈔本。⁽²⁾

と記されていただけであったが、戴氏の慧眼は、これが明代の書物ではなく、それ以前つまり唐宋時代の法律典籍であることを見抜いた。『大明令』は吏・戸・礼・兵・刑・工の各令から成っており、「官品令」なる篇目は存在しないからである。

しかし、唐宋時代の法典のうち現存するのは、前掲の『慶元条法事類』の外には、北宋初めに編纂された『宋刑統』⁽³⁾くらいしかない。唐代に何度も編纂された「令」は、いずれも散逸してしまっている。唐令について調べようとすれば、前掲の『唐令拾遺』や『唐令拾遺補』を取りあえず参照するというのが、これまでのやり方であった。

さて、次に戴氏がなすべきは、「官品令」を実際に手にとって仔細に調査することであつた。ところが、天一閣はその当時すでに博物館組織となっていて、その蔵書を閲覧するのは容易ではなかった。しかし戴氏は、さまざまな伝手を頼り、「友人の援助を得て」、遂に「官品令」の閲覧を果たした。

表紙の題簽に「官品令 貞⁽⁵⁾」と記されたその書物の開卷第一葉（写真2）を目にし

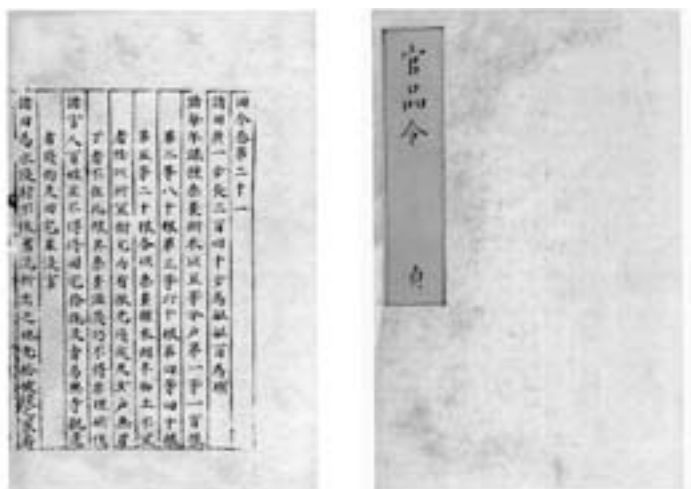


写真2 天一閣蔵明鈔本「天聖令」表紙と開卷第一葉（『天聖令校証』より）

たとき、おそらく戴氏は相当に驚いたのではないかと思う。その一行目には「官品令」ではなく「田令卷第二十一」と記されていたからである。ひよつとすると、この本は「唐令」そのものではないか？ そのような予想が脳裏をかすめたかも知れない。しかし、更にページをめくってみると、宋代の官制用語が散見する。とすると、これは宋代に編まれた「令」ということになる。となると、この書物はいったい……。その時の戴氏の気持ちを思うと、こちらまで気が昂ぶってしまう。

慎重な考証の結果、戴氏はこの書物を、北宋の天聖七年（一〇二九）に仁宗皇帝に進呈され、若干の試行期間を経て同十年に

出版・頒行された「天聖令」三十巻の明鈔本（明代に書写された写本）と断定するに至る。絶えて失われたとされていた十一世紀前半の法典が、後半の三分の一（巻二一から巻三〇までの十巻。田令・賦役令・倉庫令・既牧令・関市令・捕亡令・医疾令・假寧令・獄官令・營繕令・喪葬令・雜令の十二篇）とは言え、鈔本の形で伝存していたことが、ここに明らかとなったのである（発見・考証の詳細については、戴建国「天一閣蔵明抄本『官品令』考」、一九九九年初出、戴氏著『宋代法制初探』黒龍江人民出版社、二〇〇〇年所収、および戴建国『天聖令』の発見とその研究意義『上智史学』四八、二〇〇三年を参照）。まさに「百年に一度といつていい発見⁽⁶⁾」であった。

戴氏の研究は、これに止まらなかった。閲覧の際に作成したノートをもとに、唐令の復原を中心とした研究を立て続けに発表したのである。

唐《開元二十五年令・田令》研究（『歴史研究』二〇〇〇年第二期。兼田信一郎氏による邦訳が『マテシス・ウニヴェルサル』（獨協大学外国学部言語文化学科）三二、二〇〇二年に掲載）

宋《天聖令・賦役令》初探（上）（下）（『文史』五三、二〇〇〇年、同じく五四、二〇〇一年。戴氏著『宋代法制初探』所収）
唐《開元二十五年令・雜令》復原研究（『文史』七六、二〇〇六年）

この間、戴氏は上智大学の招聘を受けて、二〇〇三年二月から二ヶ月間日本に滞在し、

(2) 「烏糸欄」とは、黒色の細罫が引かれた紙をいう。「鈔本」は写本の意。「抄本」も同義。

(3) 『宋刑統』も、もとは天一閣に所蔵されていた天下の孤本である。北宋初めの建隆四年（九六三）に出版・頒行された刑法典であるが、現存のものは明鈔本である。

(4) 『故唐律疏議』が唐の「律疏」（律の公式注釈書）に基づいていることは確かであるが、典籍としての成り立ちに不明瞭な点があり、これを「唐宋時代の法典」と呼ぶには些かの躊躇を覚える。

(5) 「貞」とは、『易経』の「元亨利貞」に基づくもので、この冊子が全体の四冊目であることを示す。つまり、天一閣蔵「天聖令」はもと四冊で一揃えだったのである。蔵書目録の記載によれば、第一・三冊は十九世紀前半のある時期に失われたらしい。

(6) 『朝日新聞』二〇〇六年十一月二十八日朝刊記事。

講演の傍ら、学術交流も積極的に行なった。戴氏について驚き且つ敬服することのひとは、自らが採録した天聖令条文の写しを、関心を持つ研究者に対して、発見当初から惜しげもなく分かち与えたことである。このため、「天聖令」の条文研究は、それが正式に公開されるかなり前から、活潑に行われることとなった。以下に主要なものを挙げる。

兼田信一郎「戴建国氏発見の天一閣博物館所蔵北宋天聖令田令について——その紹介と初步的整理——」（『上智史学』四四、一九九九年）

池田温「唐令と日本令（三）唐令復原研究の新段階——戴建国氏の天聖令残本発見研究」（『創価大学人文論集』一二、二〇〇〇年。田令と捕亡令の条文を紹介）

大津透「北宋天聖令・唐開元二十五年令賦役令」（『東京大学日本史学研究室紀要』五、二〇〇一年）

宋家鉉「明抄本北宋天聖「田令」とそれに附された唐開元「田令」の再校録」（『駿台史学』一一五、二〇〇二年。この

「修補」が『駿台史学』一一八、二〇〇三年に掲載されている）

渡辺信一郎「北宋天聖令による唐開元二十五年令賦役令の復原並びに訳注（未定稿）」（『京都府立大学学術報告（人文・社会）』五七、二〇〇五年）

渡辺信一郎「北宋天聖令による唐開元二十五年令田令の復原並びに訳注」（『京都府立大学学術報告（人文・社会）』五八、二〇〇六年）

明鈔本「天聖令」が正式に公開されたのは、二〇〇六年十一月のことである。范欽生誕五百周年・天一閣建閣四百四十周年を記念して寧波で開催された「中外蔵書文化国際学術シンポジウム」において、「天一閣蔵明鈔本天聖令校証——附 唐令復原研究（中華書局）の出版が披露され、それを記念して日中の学者によるシンポジウムが開催された。「発見」の功労者である戴建国氏とその場に招かれていたことは言うまでもない。ただ、このシンポジウムで話題の中心となったのは、唐令の復原研究であった。

失われた「唐令」をもとめて

「天聖令」は、「唐令」を土台として宋の「新制」を必要最低限度まぜ込んだ条文を主体とし、その後ろに「不行」つまり今後無効とされる「唐令」を配した法典である。そのこと自体は、文献史料の記載によって以前から知られていた。もちろん、今回発見された明鈔本「天聖令」の構成も、その通りになっている。

このことは取りも直さず、「天聖令」条文を仔細に分析することによって、失われた「唐令」を復原し得ることを示している。『天聖令校証』に「唐令復原研究」が附されたのは、その意味で至極当然であると言えるだろう。

唐令復原研究の成果として、われわれの手許にはすでに『唐令拾遺』と『唐令拾遺補』がある。復原研究は必然的に、『唐令拾遺』『唐令拾遺補』の「答え合わせ」と

しての側面をもつことになるが、同時にそれは、唐代以降の典籍に引用されてきた「唐令」がどのようにアレンジされたものであったかを知る作業でもある。

現在、私は科学研究費による共同研究メンバーの一員として、「日唐宋律令法の比較研究と『新唐令拾遺』の編纂」という大きな課題に取り組んでいる。研究期間は平成二十一年度からの三年間なので、今年が最終年度である。貴重な新史料「発見」に際会した幸運を喜びつつ、失われた「唐令」の更なる復原に微力を尽くしたいと思っている。

「他所者」としてのユダヤ人 ——ジンメルとゾンバルト

恒木健太郎

KENTARO TSUNEKI



恒木健太郎 (つねき けんたろう)

1979年兵庫県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位認定退学。専門
は社会思想史。主要論文：「ヴェルナー・ゾンバルトの保守革命—「資本主義的精神」と「ド
イツ社会主義」の精神」、青地伯水編『ドイツ保守革命—ホフマンスタール／トーマス・マン
／ハイデッガー／ゾンバルトの場合』松籟社、2010年、179-250頁。„Die Einflüsse der
Wertpapierlehre auf die Disputationen über Juden im Kaiserreich: — noch aufzuklärende
Fragen aus japanischer Sicht —“, *Journal der Juristischen Zeitgeschichte (JfZG)*, 2008,
Heft 1, S. 20-24.

はじめに

ゲオルク・ジンメルとヴェルナー・ゾ
ンバルト——。二十世紀初めに「ユダヤ人」
について重要な論考を書いたふたり。百年
も昔のことだから、もうふるい話でいまさ
らよむ必要もないと思われるかもしれない
だがそこには、現在のグローバル化した社
会の問題点をえぐりだす、重要な視点が含
まれている。

1 ユダヤ人のイメージ——歴史との落差

いまから十年前、ナチスによる大量虐殺

を映画化する動きの相次いだ頃だが、「ユ
ダヤ人は資本力があるからこういうことが
できるんだよね」といわれて、絶句した覚
えがある。悲惨な史実を映画化しようとす
る苦勞と善意はロビイスト的な圧力でしか
ないというのか。とてもショックをうけた。

ユダヤ文化の歴史を話題にすると、商
業・金融で成功したユダヤのイメージを思
いうかべる人が多い。そこにナチスの強制
収容所で殺された、富裕とは縁のない大多
数のユダヤ人はでてこない。こうした偏見
じみた像がいまだに影を落としている。今
日的にみると奇妙な光景である。

日本にかぎってみても、すでにアンネ・
フランク『アンネの日記』（邦訳一九五二
年）やV・E・フランクルの『夜と霧』
（邦訳一九五六年）をはじめ、ナチスによ
るユダヤ人迫害やユダヤ人大量虐殺の実態
を伝える書物は数多く存在する。また、ク
ロード・ランズマンの九時間半にも及ぶ大
作『ショア』（フランス、一九八五年）
が一九九五年に本邦で初公開されてからは、
映像によって残酷な史実を深く知りうる機
会が増えた。

さらに近年の研究では、言語（イディッ
シュ語）や音楽（クレズマー）に象徴され
る、ナチス政権以前の東欧ユダヤ人たちの
独自の文化活動の内実が明らかにになってき
ている。そこには、「金持ち」というイ
メージのユダヤ人像とはかけはなれた、む
しろ貧困のなかで豊かな文化を紡いでいく
ユダヤ人たちの姿がある。

もはや「巨万の富」だけで語られる「ユ
ダヤ人」は固定観念でしかない。にもかか

わらず、それがまかりとおる。そればかり
か、この像をもとに「ユダヤ人が世界を動
かしている」というユダヤ人陰謀説を唱え
る論者が後をたたない。なぜか。じつは、
このような類の話は、いまに始まったこと
ではないのである。

2 迫害の歴史——中世から近代へ

ヨーロッパではキリスト教の成立後（す
なわち西暦以降）から、すでにユダヤ人も
しくはユダヤ教徒に対する憎悪・差別・迫
害が存在した。とくにキリスト教がローマ
帝国の国教となりカトリック教会が正統と
されてから、ユダヤ人はヨーロッパの「他
所者」ないしキリスト教の「異端者」とい
う扱いをうけた。すなわち、キリスト教か
らすればユダヤ教は宗教的に異端であるゆ
えに、自分たちの信仰を脅かすものとして
恐怖の対象とみなされたのである。

十五世紀末のイベリア半島では、レコン
キスタ（国土回復運動）によるカトリック
教国成立とともにユダヤ人が追放された。
その発端となったスペインのユダヤ人追放
令がだされたのは一四九二年。あのコロ
ンブスが、イサベラとフェルディナンドの両
王からの援助をえて大航海へと出立したの
ちに、「新大陸」（アメリカ大陸）を発見し
た年である。また中欧の各都市では、ユダ
ヤ人が「ゲット」と呼ばれる区画のなか
に閉じこめられてしまう。さらに、追放を
免れようと改宗したユダヤ人に対しては、
「マラーノ」（もとは「豚」を意味する蔑
称）もしくは隠れユダヤ教徒とされて、過



ヴェルナー・ゾンバルト (1863-1941)



ゲオルク・ジンメル (1858-1918)



グラナダの陥落 1492 Francisco Pradilla y Ortiz (1848-1921)

酷な異端審問が行われた。全財産の没収はもちろん、命を奪われることさえあったのである。とくに激しかったのはイエズス会の強かったスペインであり、その範囲はインドや中南米の植民地にまで及んだ。

3 他所者と商業・金融

——ジンメル（Ⅰ）

こうした「異端者」としてのユダヤ人たちに残された生計をたてる術は、農業や手工業といった土地に根ざす生産活動にはなかった。商業や高利貸といった、キリスト教徒に嫌われやすかった仕事だけが頼りであった。その理由のひとつには利子を禁止したカトリックの教義を挙げることでもできるが、この点についてより興味ぶかい見解をしめしているのは、ゲオルク・ジンメル（一八五八—一九一八年）の「他所者についての補論」（一九〇八年公刊の『社会学』のなかの一節）である。

ジンメルによれば、ヨーロッパのユダヤ人の歴史は「他所者」の典型例である。「他所者」は経済的なボジションに空きのない圏域へ余計な者として入りこんでいる。そこにおいて第一次的生産（農業や手工業）は生産者たち以外を養えない。しかし、商業はつねに第一次的生産よりも多くの人々を吸収することができる。それゆえ、商業は「他所者」にふさわしい領域なのである。

いかなる生産物も商品として売られなければ貨幣を得ることができない。自給自足経済ならともかく、商品経済において貨幣は新たにモノを得るために必須である。だが、生産者は特定の場所に留まってモノをつくるのが基本であり、生産者が直接販売する範囲は小さい。生産を放置して遠方まで販売していくにしても、農業では閑農期にしかできない。手工業はもうすこし自由だが、販売のために長期の生産休止を余儀なくされる。つまり、生産者の力だけでは顧客の新規開拓が難しく、貨幣の獲得にもおのずから限界が生じざるをえない。

これを突破するのが商業のもつ可動性である。商業は生産者の周辺部にどまりがちな生産物の顧客の範囲を、その外部にまで広げていく。商業を仕事とする商人は、生産側の事情に煩わされることなく顧客の拡大に専念できる。特定の場所に縛られることなく動けるのが商人の特長なのである。ジンメルはここに「他所者」のひとつの性質をみる。それは、商人となることの多い「他所者」はネットワークキングの面生産者よりもはるかに優れている、というこ

とである。商業の純粋化した形態が為替などの金銭取引であり、高利貸もまた土地や物品を担保にした金銭取引の延長線上にある。これらも含めた商業・金融業における「他所者」の可動性が、ユダヤ人のネットワークの広さを支える源泉として評価されたのであった。

4 ユダヤ人が経済の盛衰を決める？

——ゾンバルト（Ⅰ）

一方で、こうした認識は「世界を動かすユダヤ人」という陰謀説の根拠にも反転かねないものだった。その典型として悪名高いのがヴェルナー・ゾンバルト（一八六三—一九四一年）の『ユダヤ人と経済生活』（一九一一年）である。これによれば、十六世紀以降の経済中心地の変動はユダヤ人の移住にあったという。たとえば、十六世紀中頃にスペインが没落しオランダが勃興したのは、スペインを追われたユダヤ人がその莫大な富を伴いつつオランダへと移ったからである。ユダヤ人を迫害した南欧は経済的に衰退する一方、ユダヤ人を受け入れたイギリスやフランスなどの西欧諸国、ならびにフランクフルト（アム・マイン）やハンブルクといったドイツの一部の都市は繁栄した。

では、なぜユダヤ人の移住が国家の盛衰に影響をあたえたのか。それは、近代資本主義の成立に大きな役割を果たした経済的要素にユダヤ人が深くかかわっていたからだ、とされる。国際的な商品取引の活性化、近代的な植民地経済の創設、貸付等を通じ

た国家財政への寄与、近代的な証券経済の発展。これらはユダヤ人の活動なしにはありえなかった。そう考えたゾンバルトは、近代資本主義の成立における商業・金融分野の発展を重視する立場から、ユダヤ人の貢献を高く評価したのであった。

ゾンバルトのユダヤ人評価をめぐっては、一九一一年の出版当初から多くの異論が出されてきた。例えば、日本にも大きな影響を与えたマックス・ヴェーバーは、ゾンバルトのユダヤ起源説を否定した。プロテスタントによる合理的な労働組織の創出を重視する立場から、商業・金融分野にいたユダヤ人はこうした労働組織をつくりださなかった、と彼はいうのである。また、現在の歴史学で商業・金融分野の成長を重視する立場が主流であるが、その立場からみても当時のユダヤ人の役割については限定的に評価する議論が少なくない。

にもかかわらず、このゾンバルトの見解を完全な虚構とみなすことはできない。この当時イベリア半島出身のユダヤ人（セファルディム）が、ヨーロッパ国際商業・金融の主要な一角をなしていたからである。問題は、こうした事実関係のみがクローズアップされて極端に評価されてしまうことにある。つまり、ゾンバルトの見解は「ユダヤの資本が世界を動かす」という、先にみた陰謀論に根拠を与えるものであった。——この点は、十九世紀後半以降のドイツにおいて危惧されるべきかたちで現れていた。

5 ドイツの反ユダヤ主義とシャイロツク ——ジンメル（Ⅱ）

数百年の長きにわたる分裂状態からプロイセンを中心としたドイツ帝国への統一が成った一八七一年、「信仰の自由」の原理がその全土へと適用されてユダヤ人は宗教上での差別から法的には解放された。だが、それによってユダヤ人への差別がなくなつたわけではなかった。

一八七〇年代初頭に起きた会社設立バブルとその崩壊を起点とする二十年以上の長きにわたった大不況、および一八八〇年代にロシアで起きたユダヤ人への大量虐殺（ルビボグロム）の影響による東欧ユダヤ人の流入。これらは、宗教的差別に加えてユダヤ人資本への批判と人種主義をともなった新しい反ユダヤ主義をよび起こした。会社設立バブル期に積極的な投資を行つたのはユダヤ人であったといわれる。こうしたユダヤ人たちは金融のみならず重化学工業やデパートといった新たな産業部門へと進出していった。一方で、大不況下においても取引所の価格乱高下によるバブル崩壊は何度も起きていた。その原因は、「巨万の富」を動かす金融部門および資本市場にあるようにみえた。そして、たび重なるバブル崩壊に苦しめられた民衆の怒りは、そこを支配していると思われていたユダヤ人資本へと向かった。

さらに東欧ユダヤ人の流入は、これまでキリスト教文化に親しんできたドイツ人にとって異貌（いぼう）の風習をもつ民族の存在を確認させた。ユダヤ人はそもそも「人種とし

て」違うのだ。こうした考えは、統一国家成立とともに高まったナショナリズムと呼応しながら次第に急進化していく。そのような風潮のもとで、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』の登場人物であるシャイロツクのような「血も涙もない高利貸」というイメージが、そのままユダヤ人への憎悪につながっていた。

シャイロツクのなかに権利を求めても拒絶される中世ユダヤ人の典型を見出したルードルフ・フォン・イエーリングの『権利のための闘争』（初版一八七二年）の一八九一年版「序文」は、シャイロツクの権利を剥奪した裁判過程を擁護する法律家の議論がいかに多かったかを物語る。「人道」のためなら不法を犯してもよい。そう取られても仕方のない発言を、それも中世ユダヤ人の典型とされる物語の登場人物に対する裁判に仮託して、法曹関係者が行う。これは、ユダヤ人差別のみならずユダヤ人に対する迫害をも「人道」の名において肯定するかのような印象を与えずにはおかなかったのではないか。

先のジンメルによると、「他所者」は土地に固定されないがゆえに地域独自のルールを外から鳥瞰（ちょうくわん）しうる客観的で自由な眼をもつことができるという。しかし、それがために地域内では「内なる敵」としても扱われてきた。反乱等がおきたときには、「他所者」のせいになされることが多かった。みずからを不安に陥れる都合の悪い要素のすべてを「他所者」に帰するという短絡的な見方——これは、今日のユダヤ人陰謀説のみならずあらゆる陰謀説にあてはまる。

ゾンバルトのテーゼは、こうした陰謀説的なユダヤ人への偏見を学問的に補強する側面があった。彼にとってシャイロックとは資本主義的人間類型の主たる要素であった。そして、その精神的起源をユダヤ人の民族心理のなかに求めたのである。彼は後年、ナチス期に「ユダヤ的精神」の排斥を唱えた。それをみれば、ナチスの人種主義的反ユダヤ主義に掉ざっているとみられても致しかたのないところがある。今日にいたるまで、グローバルな資本主義の発展にともなう害悪の責任をユダヤ人に負わせるかのごとき言説は数多く出ている。そのひな型をゾンバルトが提供している点は否めない。

6 迫害を踏み台にした資本主義

——ゾンバルト(Ⅱ)

しかし、ゾンバルトのユダヤ人観には今日のユダヤ人陰謀説と質を異にしている側面もある。「他所者」としてのユダヤ人に対する迫害、という観点である。植民地経済と無記名証券の法形式に関する考察のなかに、この視座がはつきりとみえている。

前者については、「新大陸」での砂糖プランテーションや奴隷貿易においてユダヤ人が目立った活動をしていたことが指摘されている。この記述のみであれば、先の陰謀説を支持することにしかない。だが、彼がそこで注視したのは、このユダヤ人たちが他ならぬイベリア半島で迫害をうけた人々であった、ということである。すなわち、自国の宗教的統一によって排除した

「他所者」を植民地主義的国际貿易の尖兵として利用することで、資本主義がさらなる発展を遂げたことを、彼は示唆しているのである。

後者についていえば、追放や異端審問の恐怖のなかでユダヤ人が国外移住とキリスト教への転向のみならず偽名を使用して自分の財産と生命を守らざるをえなかったことを、ゾンバルトは正確に認識していた。そこでユダヤ人が利用したのが、近代的な無記名証券の法形式である。これが彼の主張である。基本的には自分の素性を詮索されることなく、証券を所持しさえすれば債権の他人への譲渡(売却)や権利行使(債務者への支払請求)ができる。この仕組みによって、ユダヤ人は自分の財産を守りぬくことができたのだ、というのである。

ゾンバルトが近代的無記名証券の典型と理解する手形や銀行券(紙幣はその一種)や株式などは、現在の金融経済を支える基盤となるものである。投機を伴ったその発展のなかに、彼は資本主義の動力源をみていた。そして、その原因をユダヤ人の迫害と結びつけたのである。

このようにゾンバルトは、国家の「統一」のために「異端者」を排除する極端な思考が、「他所者」に非道徳的・非合法的とみなされる行為を強いる構造を、適切に把握していた。つまり、ユダヤ人が国家から排除されたために非道徳的・非合法的とされる領域において世界の資本主義的發展のための「隅の首石」とならざるをえなかった、その側面を見抜いていたのである。これがユダヤ人を世界支配の主体とみなす

陰謀説とは似て非なる議論であることは明らかだろう。

おわりに

ナチスによるユダヤ人財産の剥奪から「ユダヤ人問題の最終解決」にいたる過程がすでに知られている今日にあってなお、「人道」という名のもとに行われる不法の危険は潜在している。国家保全やテロ対策のためなら、犯罪をおかしたとされる者からは犯罪行為で得た収益のみならず全財産をも奪い取ってよい。そのような乱暴な議論まで出てきているのが現状である。ジンメルやゾンバルトのユダヤ人論は、こうした大義名分の突出がもたらす事態への警告として理解することができる。

「他所者」に対する不法の肯定へと短絡する「人道」という名の排外主義的陰謀説。それがはびこりかねない現在において、二人のテクストは今なおその隘路を伝えてくれている。その内容の精査がこれからも重要な課題となることは間違いない。

危機の続く世界のなかで、彼らがもう一度読み直されるべき時を、私たちはいま迎えているのである。

現代史における 情報操作について

西牟田祐二

YUJI NISHIMUTA

西牟田祐二（にしむた ゆうじ）

1956年愛知県生まれ。京都大学大学院博士課程修了。京都大学博士（経済学）。東
京大学社会科学研究所助手等を経て、京都大学大学院経済学研究科教授。専攻は経
済史・経営史。著書に『ナチズムとドイツ自動車工業』（有斐閣、1999年）などが
ある。

全学共通科目のポケット・ゼミで「現代史における情報操作について」というテーマで開講してから五年ほどになる。これを始めた趣旨としていつも最初に学生に話しているのはこうである。

まず第一に、「大学における勉強は高校までと決定的に違う点がある。決められた教科書という枠がなく、現実そのものが考察対象なのだ。科目によつては『テキスト』が掲げられている場合もあるが、それも実は書いてあることが正しいかどうかも含め検討の対象なのだ。君たちはそれに戸惑うかもしれない。しかし大学というところに入った以上君たちはいやおうなしにそういう世界に投げ込まれたのだ。」

そして第二に、とくに「現代史における情報操作について」というテーマを掲げた理由は、「現代社会は重要な事実が場合によつては伝わらない、あるいは少なくとも、伝わりにくい、構造になっているというわたくし自身の強い思いがあるからだ。現代社会では、場合によつては、真実でないことがあつたかも知実であるかのように流布していることがある、とわたくしは考えている。従つて君たちは、何が真であり、何が偽であるのか、真偽を判断するための方法（あるいは方法論）を持たねばならない。重要なことは、信じることを根拠を持つて判断することは違うということだ。君たちはこれまで、何を真とし、何を偽としてきたかをよく反省してみるといい。いかに単に信じていただけのことが多いか。きみたちが知識人となろうとするなら、信じるという領域から、根拠を持つて判断するという領域に進まねばならない」と語りかけている。

実にえらそうなことを言っているのだが、言っている本人は大まじめなのだから厄介である。しかも近年ますますそう感じていくのだから始末に負えない。この辺の事情をみなさんに投げかけてみようと思う。

わたくし自身の研究生活から

わたくしは自分の研究を、「ナチズムとは何か?」という問いに答えることにおきてきた。当初の問題意識は、「ナチズムはドイツに組み込まれた前近代的なものの所産であり、それが最も極端に現出した

ものである」という「命題」の是非ということであつた。ナチズムに関する一般向けの歴史叙述はほとんどがまぎれもなくこうした「トーン」で書かれているのだが、この「命題」は、実際にそれを研究史のなかで詳しくフォローしてみると、いつ誰がどこで言つたかを正確に跡づけることが非常に難しいという性格を持つていたのである。そこでわたくしは、こうした解釈をひとまず置き、直接具体的に何が起つたかを見ることがし、ドイツ自動車工業という存在に目を付けた。なぜならいわゆる「ナチズムの遺産」ということでは、「フォルクスワーゲン」と「アウトバーン」という両方ともドイツ自動車工業に関連するものが言及されるのが常であつたし、ドイツ自動車工業が現在に至るまでのドイツ経済の代表的部門であることは明らかであつたからである。その研究の成果を『ナチズムとドイツ自動車工業』（有斐閣、一九九九年）という最初の書物にまとめたが、結果的にわたくしにとつて重要であつたのは、ドイツ自動車工業がワイマール期における発展の行き詰まりを、ナチス政権におけるモータリゼーション促進的な政策展開に助けられて打開し、急成長、かつ第二次世界大戦におけるドイツの軍事力の中核的な工業的基礎になつたという事実であるばかりでなく、その中においてドイツに進出したアメリカ自動車企業ドイツ子会社（ドイツ・フォード社およびアダム・オベル社）GM社の百パーセント子会社）が本社との密接な連携関係をずっと維持して、第二次大戦におけるアメリカ参戦に至るまでの時期、積極的

にこれに参加していたという事実であった。これは一次史料によって完璧に実証された。しかしわたくしにとって新たに問題になったのは、先に述べた従来のドイツの類型的な特色によるナチズムの説明とこれらの事実が全く相いれないように思えたことである。私が一次史料によって確証した事実（ナチス・ドイツにおけるアメリカ企業の存在）は、従来の歴史叙述からは全く切り取られてしまっている。つまり従来のナチズムに関する歴史叙述はあたかもこれらの事実がなかったかのように叙述されていた。「ナチズムに関する一般的な説明は重要な事実を削除することによって成り立っている」とわたくしは受け止めた。

「公式説明」と挑戦者

これはわたくしにとつて非常に新鮮な経験であった。このあたりから今回のわたくしのテーマに関連が出てくる。つまり、「現代史における情報操作について」である。このテーマのポケット・ゼミを構成するにあたって、わたくしは、幾つかの検討対象を考えた。

- ①二〇〇一年九月一日の「米同時多発テロ事件」いわゆる「9・11事件」
- ②第二次大戦直後アメリカ占領期日本で起きたいくつかの未解明事件（とりわけ「下山事件」、および「帝銀事件」）
- ③ナチズムに関する諸説の検討、などである。

何よりもまずわれわれの目の前で起こったことについて検討してみるのが導入とし

てよからうと考えた。その対象として取り上げたのが二〇〇一年九月一日に起こった「米同時多発テロ事件」いわゆる9・11事件である。9・11事件をきっかけとして現代アメリカの外交政策が展開されていることはいうまでもない。ところがこの事件に関してはいまだに必ずしも真実は解明されていないのではないかという意見がアメリカの知識人の中にも根強く存在する。二〇〇六年一月には「Scholars for 9/11 Truth」「9・11の真実を求める学者たち」という大学研究者を中心とした団体が設立された。この団体は、その後内部における見解の相違から、具体的技術的な事実の解明に重点を置きそれに活動を絞って行こうとするグループとより広い社会的な関連を追求しようとするグループに分裂しながら、後者が事実上脱落し、前者が、「9・11の真実を求める建築家と技術者たち」という団体を中心に活発な活動を続けている。そして二〇〇九年には全世界向けに講演ツアーをおこない、日本にも東京から沖縄まで講演旅行に來た。わたくしはその関西における二つの講演（二月七日の立命館大学、二月一日のエル大阪での両講演）に参加し、その後講演者でアメリカの建築家R・ゲイジ氏と詳しくディスカッションする機会も得た。そこでこの講演記録や主な論点を提起しているほかのドキュメンタリー作品を素材として取り上げ四コマほど議論する。

つぎに、第二次大戦直後アメリカ占領期日本で起きたいくつかの未解明事件のうち二つ、「下山事件」および「帝銀事件」を

取り上げ、作家松本清張氏が数少ないノンフィクション作品として発表した『日本の黒い霧』（上、下 文藝春秋社）における問題提起を検討する。

さらに、わたくし自身の研究経験を踏まえ、ナチズムをめぐる事実と解釈についての諸説を検討する、という順序でこのゼミを進めている。

いずれの対象についての議論でも問題となるのは、政府サイドから発表されるいわば「公式説明」と、それに対して自ら発見した事実を根拠として疑問を提起する側との間の対決である。そのポイントは「公式説明」の中にある情報操作、情報隠し、および意識的な虚偽情報の流布（disinformation）の有無である。

議論の展開と錯綜

これらがわたくしの意図どおりに、順調に進められればよいのだが、実はそうはどっこい問屋がおろさない。その辺りの事情を紹介することしよう。

検討対象として提起した②、③については割愛して、検討対象①すなわち9・11事件の検討を行った際のエピソードを二つお話しする。

9・11事件はまず一機目の航空機がWTC北棟にぶつかったことから始まる。この直後から全世界に向けての同時中継が行なわれている最中に今度は二機目の航空機がWTC南棟にぶつかるという事態が起きたがゆえに、その映像が全世界に同時発信され、そればかりか約一時間後には世界の公

衆の面前で二つのビルが完全に崩壊したことによって、全世界へのこの映像の周知効率は考えうる最も高いものになった。この一連の過程に関してマスコミを通じて与えられたいわば公式の説明は、ほぼ一つの説明、すなわち「オサマ・ビン・ラディンを首謀者とするイスラム原理主義テロ組織アルカイダのメンバーがハイジャックした旅客機が衝突し、その衝撃とジェット燃料の高温による火災が両ビルを崩壊させた」というものに限られていた。それ以外の議論や、捜査、解明の過程は示されないまま、

次にはアメリカ政府による「緊急事態を理由とする法的手続きの一時停止」という論理の下に、国内的には「愛国者法」の制定、対外的には対アフガニスタン、続いて対イラク「対テロ戦争」への突入が行なわれて行く。こうした中でほとんどの人間が両ビルの崩壊についての「公式説明」を受け入れていたと言えるだろう。だがとくに二〇〇六年以降、先に紹介した真相究明団体を中心に、航空機の衝突とジェット燃料の高温による火災（燃焼温度一〇〇〇℃以下）では鉄骨構造のWTC両ビルのコア支柱（融点は一五三八℃）の崩壊による現に起きたような左右対称を保った真下への完全崩壊は生じないこと、またWTCビル崩壊によってニューヨーク中にまき散らされた粉塵の分析によってその中から鉄骨構造を崩壊し得る爆発物の痕跡が発見されたことが発表された。同団体はこれを根拠として航空機衝突以外の要因に関するWTC両ビル崩壊過程の再調査を要求している。

これが具体的かつ詳細に提示されると学

生たちは例外なく驚き、目を丸くする。その説得力は十分である。「公式説明」の信頼性が崩れる瞬間である。しかし発生する疑問はそれにとどまらない。「それでは誰が、何のためにこれを行なったのか?」「誰が、どのようにしてこれを行なったのか?」c.c.c.c.が連鎖的に生じてくる。

いずれも再調査が行なわれて初めて少なくとも一歩一歩解明される可能性が存在しているにとどまっていることである。現段階で根拠を持って主張できることは極めて限定されている。しかし具体的な根拠を持った疑問の提起によって「公式説明」の信頼性が崩れる時、「公式説明」がかつて持っていた全体性も崩れる。他方では、疑問の提起によっては、全体的な説明性が再建されるわけではない。しかし人間心理は常に一挙なる説明を求めるものなのである。従って、別の一挙なる説明が再建されるまでの間、「いったい何を信じればよいのですか?」という、すべての事柄に対する信頼性の崩壊が訪れることになる。人間心理はこうした状態にあまり耐えられないように思われるのである。事実の解明は一歩一歩しかできないが、人間の心理は一挙なる説明を求めるものなのだ。やれやれ!

これはポケット・ゼミで9・11事件についての検討・議論を行なうと必ず生じる事態である。戦後直後アメリカ占領期における「下山事件」、「帝銀事件」に関する松本清張氏の『日本の黒い霧』を検討・議論する時には事態は違ったふうに移す。なぜなら松本清張氏は個別の事実の発見に

よって「公式説明」への疑問を提起した後で、かならず明示的に「大胆な推理」とことわって、仮説的ながら全体的な説明を敢えて与えようとするからである。この後者の手法は、作家だから許されることなのか、それとも「科学の手法」の中にも取り入れることができることなのか。この点がわたくしの現在の悩み所である。

市民運動の中での「9・11事件検証」

昨年（二〇一〇年）度は、わたくしにとつて、「現代史における情報操作について」というテーマが、大学という枠を少し超えて一般市民の方々との交流につながった年であった。

四つの出来事があった。まず二〇一〇年四月一八日に京都大学の一教室を会場として「9・11事件検証@京都大学」という市民シンポジウムを開催した。『9・11の子どもたちへ』という題名のドキュメンタリー映画を東京の学生たちが製作・公開したというニュースを聞いて、別件で上京の折、プロデューサーと連絡をつけ特別試写をお願いしたわたくしは、すぐにこの映画の関西での初上映を思い立ち、提案、了承してもらった。それと同時に市民シンポジウムを企画・実行したのがこの四月一八日であった。その準備過程として、本理学研究科の教員の幾人かの人たちと個別に交流し、意見やアドヴァイスを求めた。当日は二〇〇名ほどの学生、教員、市民の参加を得て充実した時を持ち、これからのために「9・11の真実を求める日本の科学者

の会」を設立した。「おまえは科学者か」と言われそうだが、「社会科学も科学の一つだ。9・11事件は、事件そのものの総合性ゆえ、自然科学者、社会科学者、人文科学者の総合的協力によってはじめて解明につながるのだ。わたくしはそのコーディネーターになるつもりだ。」と突っぱねた。

次に、九月四日高知市の市民団体から講演を頼まれ出かけて行った。会場となった高知市の自由民権記念館では二六〇人もの市民が集まり、活発な議論をしたが、さすが自由民権運動の中心地高知人だけのことはあると感銘を受けた。

第三に、九月一日には、ちょうどこの日に京大で応用心理学会の年次大会が開かれ、大会企画のひとつとして9・11事件に関するシンポジウムが行なわれた。わたくしは「9・11事件に関する応用心理学的考察——応用心理学会に向けての問題提起——」と題する報告を行なった。この問題に関して学会で真正面から討議する機会をもうけていただき、とても感謝している。

第四に、二〇一一年三月一九日には、大阪の阿倍野市民学習センター講堂を会場として「9・11事件を検証する公開討論会——WTC三つのビル崩壊とペンタゴン攻撃を中心に——」が開かれた。ここでの論敵は、O大学教授（物理学専攻）のK氏であった。K氏は、著書のなかで、9・11真相解明運動全般を、「科学的根拠を持たない陰謀論にすぎない」という趣旨で批判していたが、著書の中では実際には具体的な検討を何もしていなかったので、わたくしはこの際これを具体的に質問しようと考える

て公開討論会に臨んだ。

物理や建築などの専門からはほど遠いわたくしが物理学の教授に論争を挑むのであるから、これはもともと非常にシビアな対決であると感じていたが、じつさに準備してみると、The Open Chemical Physics Journalなど化学分野の論文を熟読し、理解せねばならず、とても大変な作業であった。この時ほど自分が目標にして呼びかけた「科学の諸分野の総合的協力」の早期実現を切に願ったことはない。実に「言うは易く、行いは難し」なのだ。呼びかけてすぐ集まってくれるほど皆さんは暇ではない。それぞれの目の前の業績を上げることで毎日を懸命に暮らしているのが大学人の実態なのである。だが討論はそれなりに充実し噛み合ったものとなったとわたくしは思っている。論争過程で具体的に分かったこと、はつきりしたことも多いのだ。やはりこういう問題でも、対決し、議論することが重要なのだ。実は現在自分のほんらいの学会では、それぞれ各人が分野を住み分け、本当の対決や議論が乏しいのではないかと感じ続けていた。本当の対決を避けてはならない。本当の対決こそが進歩の具体的な手段なのだわたくしはこの経験を通じて改めて感じた次第である。

フロンティア ■ 個体差研究の魅力 ■ 松永哲郎

TETSURO MATSUNAGA

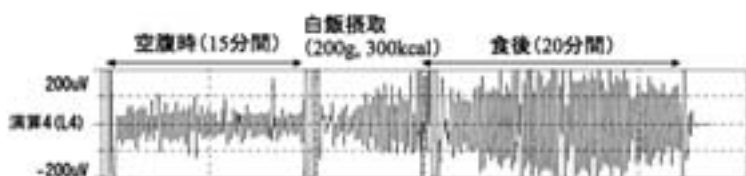
同じように食べても太りやすい人と太りにくい人がいる。逆に同じような体格であつても食べる量が違うということがあつて、これには所謂「体質」が大きく関係している。当然、運動量や生活習慣といった環境因子の影響も大きいが、同じように運動してもダイエット効果に「個人差」があるのは、やはり生まれ持った「体質」というものに一部は起因するのであろう。

生まれ持った「体質」とは何であろうか。生物学を勉強したことのある人なら「遺伝」という用語が連想されるのではないだろうか。私はこの「遺伝」によって規定される「体質」の個人差に興味を持ってこれまで研究してきた。具体的には、遺伝子のDNAの配列（塩基配列）の個体差（遺伝子多型）の研究である。ヒトの体細胞は核内に約三〇億の塩基配列からなるゲノムを持つが、その配列のヒト同士の一致度は九九・七％以上であり、残りのわずかに〇・三％程度の違いで「体質」をはじめ、人種や顔つきなど無数の個人差が生まれる。もちろんこの中には先述の太りやすいか否かといった体重調整に関わる多数の遺伝子多型も含まれる。ここでは一つ例をあげて、最近の成果を紹介したい。

摂食や体重調節に関与するホルモンの一つにグレリンと呼ばれる摂食促進ペプチドがある。グレリンは主に胃で産生され、血液に乗って脳の視床下部を刺激し、食欲を増進させる。また、胃自身にも作用し、胃運動を亢進させて消化機能を上昇させる。最近、このグレリンの遺伝子にDNA配列の個人差（アミノ酸配列で七二番目のLeu

がMetに置換した多型）が存在することが報告され、肥満等との関連性が注目された。この多型がグレリン産生量に影響する報告はされていたが、摂食量や胃運動との関連性については報告がなかった。そこで、私は学生約一三〇人に対して食事調査と胃運動測定（胃電図計測）を実施し、グレリンの遺伝子タイプにより比較した。すると、Metタイプ保有群（約四〇％）では、摂取カロリー量がLeuタイプより多く、胃運動も高かった。一方で体重に差はなく、代わりに自律神経活動（熱産生能）が亢進していた。つまり、推測ではあるが、この多型は摂食量や胃運動の個人差に関与する可能性があるが、若年時には代償的にエネルギー消費量が亢進し、体重増加を抑制している可能性が示唆されたわけである。加齢などにより代償作用が減弱化すれば、将来的に体重増加につながるかもしれない。さらに大規模集団での複数の検証が必要であるが、本研究によってこの遺伝子多型がヒトの食事量や消化管機能の個人差に関わっている可能性を示せたわけである。

このような「個体差研究」の成果は、将来的なテーラード医療や栄養の実現に貢献するものと思われる。しかし、その道のりはまだ遠く、安易にその成果を社会に還元することはできない。それは、肥満や生活習慣病は単一遺伝病と異なり、多数の環境要因と遺伝要因が複雑に絡み合っており、個人の疾患リスクを数個程度の遺伝因子では評価できないからである。また、個人の遺伝子解析にはいまだ技術的な課題や倫理的な問題もあり、実現



食事による胃電図波形の変化。周波数解析（スペクトル解析）により、胃運動を反映する胃電気活動の周期と大きさを評価する。



松永哲郎（まつながてつろう）一九七九年、長崎県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。京都大学大学院農学研究科博士研究員を経て、現在同研究科特定助教。

には時間がかかると思われる。そのため「個体差研究」には、その期待が大きい分、確かなエビデンスの蓄積と応用へ向けたシステムの構築が求められる。私の研究もその実現へ少しでも貢献できればと願っている。

私は現在、個体差研究とあわせて、「だし」の研究をしている。日本料理の要である「だし」はみそ汁など様々な料理に用いられ江戸時代より長年日本人に愛されてきた。この「だし」にはどのような効果が隠されているのだろうか。「だし（鰹だし）」を被験者の方に飲んでもらい、その食後効果を胃電図やアンケートにより評価している。「だし」を飲んだ感想を尋ねると、「非常においしかった」と答える人と「普通」とか「あまりおいしくなかった」と答える人と様々である。味覚にも個人差がある。最近の研究で「だし」にも含まれる「うま味」の感じ方に遺伝的個人差があるとの報告がなされた。とすると、この「だし」に対する味覚や効果にも遺伝的な違いがあるのかもしれない。同じみそ汁もDNA配列の違いによって味が変わるのだろうか。

「個体差研究」は、ありとあらゆる個性（individuality）が研究対象である。個性は「遺伝」との相互作用の中で経験や環境によって変化する途方もなく複雑で、非常に難しい研究対象である。しかし、難解だからこそ、それを科学的な立証により紐解いていくのが「個体差研究」の醍醐味であり、私はその魅力により研究を続けているのかもしれない。

下記の絵を見て、あなたは何を思い、何を連想するだろうか。その凄惨さに目を逸らしたくなるかもしれないし、自分の隠れた欲望に気づかされるかもしれない。では、作者は何を欲望してこのような絵を描いたのだろうか。こんな問いとともに、病跡学への道が拓かれる。

この絵は、『佐久間大学』（『魁題百撰相』の一部）と題された浮世絵である。幕末から明治にかけての時代の変革期に、浮世絵師として活躍した月岡（大蘇）芳年によって描かれた。芳年は躁うつ病であったと考えられており、その中であって創造性を開花させ、世に数多くの作品を残した。「血みどろ絵」と呼ばれる無惨絵を多く描いたことでも有名である。『佐久間大学』は、そんな人気を博した「血みどろ絵」のひとつである。

作品には、芳年の病理の問題が表われている。『佐久間大学』においても、対象備給の口唇的なリビドー段階への退行やナルシズム的な同一化への自我の退行などの躁うつ病者に特有な傾向の一端が見受けられる。生首を喰らう佐久間大学の姿は、その傾向を収斂して具現化している。画面の構造は、まさに芳年の主体のあり方を示しており、芳年は躁うつ病者に特有な退行の問題を、自我ではなく作品へと向け替えることで、自我の貧困化を回避していた可能性を窺わせる。『佐久間大学』の制作は、芳年にとって、躁うつ病という病理を通して自らの存在を位置づける試みだったのだろう。

この作品にはまた、「上野山に転がっていた彰義隊士の亡骸のスケッチをもとに描かれた」とする逸話が残されている。この逸話は、芳年のまた異なる欲望、すなわち「死者との同一化」を巡る欲望を示唆しているように思われる。というのも、対象が失われた時、その対象を幻想の中で食べることで、前よりも強い対象との一体感が獲得されるといふ、死者の食人的な摂取と再建に纏わる問題が垣間見えるからである。

芳年とその父との関係性は、攻撃性に強く彩られたものであった。そのため、死んだ父との同一化を試みては失敗を繰り返す反復の中に、芳年は住まわざるを得なかった。躁うつ病の症状は、父との関係の「断絶」を巡るそんな反復の一側面であったと言える。一方、この作品は、江戸から明治へと時代が大きく変革されようとしていた時期に描かれた。明治国家の政策は、伝統的生活様式への抑圧と編成替えの強要を意味し、前の時代との「断絶」を人々に押し付けるものであった。人々は、時代の変革に伴う「断絶」を巡る葛藤の中に身を置きながら、自らを主体化するように迫られていた。その葛藤は、父なる「江戸」（＝死んだ父）との間において葛藤する「明治」としての息子の関係に比されるものであったのかもしれない。

このように考えてみると、「死者（＝死んだ父）との同一化」という共通項を介して、芳年個人と社会全体の葛藤が共鳴し合っていた可能性が浮かび上がる。このとき、新たな時代の到来の

牧瀬 英幹（まきせ ひでもと）
東京都生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了（人間・環境学博士）。専門は精神分析、病跡学。



『佐久間大学』（明治元年）

*佐久間盛重のこと。戦国時代の織田家家臣。織田信秀、信長に仕える。芳年は、父（信秀）と息子（信長）を媒介する存在として、佐久間盛重をモデルに選んだことは偶然ではないのかもしれない。

ために流された血（死体）を摂取するかのよう描かれた『佐久間大学』は、「血の盟約」として、死んだ父との紐帯を人々と共に再建する場、つまり、芳年と社会の欲望を結ぶ一つの線として機能したことになるだろう。芳年は、時代の「断絶」を巡り葛藤する人々と共に、死んだ父との紐帯を再建し、それをもとに自分の父との関係の「断絶」を位置づけようと試みたのである。しかし、このような試みが、両者における「断絶」を自分一人の責任として受け止めるようにする芳年の苦悩と表裏を成していたことを忘れるわけにはいかない。社会全体が「断絶」を巡る葛藤を、芳年の作品を通して省みると、両者の欲望の均衡は保たれた。だが、社会が「断絶」を巡る葛藤を抑圧するとき、芳年は「告訴する主体」としての躁うつ病となり、一人で「断絶」の意義を問うていかざるを得なかったのである。

ある作品を病跡学的な観点を用いて考察することにより、作品を制作する主体が社会と如何なる接点を有しているかが分かる。さらに、その接点の構成の仕方を分析することは、主体の病理の問題のみならず、主体が属する社会全体が如何にして構成され、そのために何を抑圧しているかを知る手がかりを与えてくれる。

時代と主体をつなぐ病跡学とは、先人たちの「死」を軸にして、時代の流れに翻弄される我々の「生」を新たに問い直していく契機を生み出すものである。

日本文学における都市と自然

西垣安比古

YASUHIKO NISHIGAKI



西垣安比古（にしがき やすひこ）
一九四九年京都府生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。工学博士。
京都大学大学院人間・環境学研究科教授。建築論、建築史専攻。主
な著書に『風水論集』（凱風社・共著）『建築的場所論の研究』（中
央公論美術出版・共著）『世界美術大全集 東洋編』一〇巻、一一
巻（小学館、建築の項目を分担）『朝鮮の「すまい」——その場所
論的究明の試み』（中央公論美術出版）など。

二〇一一年三月一日大津波が東北地方東海岸を襲った。TVに映し出される光景は現実と認めることも困難なほどで、いいようもない虚脱感を覚えた。神戸大震災の時はさまざまに考えるべきことがあった。老朽化した木造建築密集地区への対策、耐震基準の再考、地震時の火災発生延焼防止方法などなどである。しかし、今回は違う。地震、津波の圧倒的な破壊力にただ呆然とするばかりである。土木、建築の技術による解決策に限界があることをあらためて認識させられた。特に津波については最終的には早期に逃げる以外の方法はないようである。そのような災害の圧倒的な破壊力を目の当たりにして『方丈記』を思い起こした。それは映像に見る都市災害の生々しい姿が『方丈記』に描かれた通りであったからである。『方丈記』では都市における生活がもたらす悲劇について、それが人間の有限性のために必然的に引き起こされるべきものであることが主張される。そして、鴨長明は都市において物質的に豊かに暮らすことの限界を諦観した結果として、山中の方丈における独居隠棲を選択する。『方丈記』の典拠となったことで知られる『池亭記』の著者慶滋保胤は二十五三昧会の結社にかかわったと考えられており、組織・

施設（インスティテューション）を形成し、それによって阿弥陀浄土への往生を目指したことが知られている。つまり、独居隠棲を目指しているとしても、そこには社会性があつたことになる。世の中の無常であることにインスティテューションを形成して対処しようとしている。また、『池亭記』は社会批判的内容を含んでおり、それが中国文学からの影響であるとしても、「た、かたはらに舌根をやとひて不請の念佛、兩三返を申してやみぬ」と結ばれる『方丈記』との違いは明らかであろう。島内裕子『日本文学における住まい』（日本放送大学）によれば、この『方丈記』こそが日本文学における住居観や環境観を決定づけ、それは芭蕉はもちろん近代文学にまで引き継がれているという。

日本文学のこのような潮流に対して加藤周一は「池亭記」は、逃避を前提に、貴族社会の批判を書き、『方丈記』は、崩れゆく貴族社会の叙述にとどまり、『芭蕉庵記』および徳川時代の俳句は、当該社会の現実には触れるところがない。日本文学史上の逆説の一つがここにある。中国文学の影響のもとに、視野を拡大した日本文学は、その拡大された視野の上に創り出された形式を継承しながら、次第に視野の縮小へ向かっていたのである。「池亭記」から『芭蕉庵記』への道は、社会的関心が狭くなり、閑居の「風流」が強調されていく過程にほかならない（『日本文学史序説』筑摩書房）と批判している。『方丈記』では現実の社会に対する関心は希薄であり、日本文学史を通じてこの傾向はむしろ増大し、関心の欠如に至るといえる。そして、それは近代文学にまで連続することが示唆されている。加藤周一の批判は『方丈記』以来の日本文学に社会的現実への関心が欠如していることに向けられているが、ここでは現実への関心のうち特に社会に対しての関心が希薄であるという点が強調されているのであろう。慣習は構成員（組織）の同意のもとに制度となり、それが物的構成にもたらされると施設に



蕪村夜色楼台図（部分）

なるが、この習慣、組織、制度、施設は英語でインスティテュションと翻訳しうる。ここには、人間が社会を構成する上で、これらが一連の事柄であるという自覚が働いている。日本文学にはこのような社会に対する関心が薄く、社会への参与意識も希薄であったということは否めない事実であろう。日本の都市の現状もそこに生活する人々の参与意識の希薄さを反映するものであることがしばしば指摘されてきた。今回の震災への対応についてもこの点において弱点が見られることは明らかであろう。特に原子力発電という施設も、それを維持する組織も、大きな問題を抱えているにもかかわらず、そのことに対しての自覚が希薄であることなど、宿痾のごとく変わらぬ日本文化の欠点として認めるほかないように思われる。

しかし、このように社会に対して関心の希薄な日本文学は、そのことと表裏して自然への深い関心を維持してきたことを見逃してはならないだろう。『方丈記』では都市（といってもここでの都市は、前述したように名誉をもとめ、富貴を目指す場（場所）に過ぎないが）を否定的に捉える視線によって、都市に住まうものにとつての自然が見いだされており、その自然を合わせ鏡として、都市を含む人間にかかわる事象が無常であることが照らし出される。ただ、ここで自然を不変の事象とし、それに対して人事を無常と位置づけているのではないことに注目しておくべきであろう。人間はもちろん都市も自然も無常なのである。すべては流転するが、それをまるごと受け入

れる場（場所）としての自然が見いだされているといえる。それ故、『方丈記』において、都市災害の現状を写すことも可能となったのであろう。そして、このような自然を場として住まう（あるいは生きる）ことこそが骨となり身となつて文学の核となる風景が発見されたことは、都市生活者蕪村の辞世の句「白梅に明くる夜ばかりとなりけり」にも示されている。ここで白梅が蕪村に死を受け入れる根拠となる場を提供していることは明らかであろう。

この自然の捉え方は正岡子規の写生写真に連なり、近代俳句の世界を開くことになる。子規はカリエスに冒されて身動き一つに激痛をとまなうような状況で晩年を過ごしたが、病床から見える唯一の世界として自邸の庭園に深い思い入れを懐いており、「小園の記」を著し、そこに植えた草花を写生することにこの上ない喜びを見いだしていた。そして、辞世の句において「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」「おと、ひのへちまの水も取らざりき」と小園の糸瓜を詠み込んでいる。

蕪村と比べて諧謔味を帯びてはいるが、小園の糸瓜や草花に支えられて生きる子規の姿を髣髴するに十分であろう。

東北大震災において、また神戸においても同様であったが、人間の想像力を超える未曾有の被害状況

にもかかわらず、多くの人々が整然とした避難行動をとり、海外メディアからも賞賛されたことは記憶に新しい。このような行動をとりえた背景に、我々の自然との関わりの方が大きい役割を果たしていることは疑い得ない。海岸に残った一本の松に心の支えを見いだすことも同様の心性に基づくものであろう。日本文学に継続してみられる自然への関心は、社会への関心のなさや表裏しており、また都市的視線による現実性の希薄な自然観であるとされ、むしろ批判の対象となってきた。しかし、この自然への関心はすべての事象が無常であることを受け入れる基盤として働いており、大災害などに際して、日本人の冷静な態度を導く重要な契機となつていとすれば、ただ批判し去るのではなく、歴史を通じての自然への関心の在り方を再検討する必要があるように思われる。大災害は人間の想定をはるかに超えていた。自然は本来、人間の知の地平を超え出るものである。我々是我々の生きる現場においてこのことに思いをいたすべきではなからうか。



蕪村紅白梅図（部分）

スーダン——遠くて遠い国

インティサル・アブナグマ・
モハメッド・サード



INTISAR ABUNAGMA MOHAMED SAAD

インティサル・アブナグマ・モハメッド・サード (Intisar Abunagma Mohamed Saad)
ハルツーム大学文学部准教授。専攻は教育・社会心理学。学術博士。1998年、
ハルツーム大学文学研究科博士課程修了。

スーダン

まず、私の祖国、スーダン共和国について簡単に紹介します。スーダンは、エジプトの真南に位置し、エジプトを含め九つの国と国境を接し、東部は紅海に面しています。国土面積はアフリカ最大で、日本の約七倍、しかし、人口は日本の約四分の一です。気候は、北部は乾燥した砂漠地帯、南部は高温多湿な熱帯気候と、大きく異なります。

最大の産業は農業。GDPの約四割は農業によるものです。スーダンを流れるナイル川の周辺には、肥沃な農地が広がり、綿花、セサミ、アラブガムなどが生産されています。また、石油以外に、種々の鉱物資源にも恵まれています。

公用語はアラビア語ですが、かつて英国の植民地であったため、英語も使用されています。また、二〇〇を超える部族語も使用されています。宗教は七〇％がイスラム教、二五％が各部族の宗教、五％がキリスト教です。

イスラム教の誕生以前から、現在のスーダンの地に、遊牧民のアラブ人が入ってきました。ちなみに、「スーダン」は、アラビア語で「黒い人」という意味です。北部から入ってきたアラブ人にとって、黒い人たちの住む地だったのです。それ以降、千年以上の時間をかけて、混血が進むとともに、北部を中心にアラブ化が進行しました。ただ、アラブ人と言っても、その中身は多様です。多くの部族に分かれていますし、遊牧民と定住農耕民では生活様式や考え方が大きく異なります。

おそらく、皆さんは、スーダンと言えば内戦を連想されることでしょう。実は、今スーダンは、長らく続いた内戦に大きな結論を出す前夜にいます。ただ、これについては、本日の最後に話すことにします。

私の研究——教育・社会心理学

さて、私自身の研究について紹介します。私の専門は教育心理学、社会心理学です。

私は、来日に備えて、『日本の生徒の学業レベル』⁽¹⁾、『心の教育』⁽²⁾等の本を読んできました。これらは、一九八〇年代までの日本の学校教育を高く評価した著作です。これらの本を読んで、私は、正直なところ、あまりのレベルの高さと教育内容の充実に、ただただ驚かされるばかりでした。しかし、今回の来日で、一九八〇年代以降、日本の学校教育にも、不登校、いじめ、学級崩壊などの深刻な問題が発生していることを知りました。

私も、スーダンにおける家庭内暴力を調べてきました。スーダンでは、親の子どもに対する暴力が増加傾向にあり、その内容もかなり多様化しています。スーダンでは、女兒よ



スーダンは9つの国と国境を接する。

(1) Richard Lynn (1988), *Educational Achievement in Japan*.
(2) Catherine C. Lewis (1995), *Educating Hearts and Minds: Reflections on Japanese Preschool and Elementary Education*.

りも男児の方が親の暴力の犠牲になる傾向があります。伝統的に、スーダンでは、親が子どもをしつけるに際して、暴力的ともいえる「おしおき」をすることは容認されてきました。しかし、最近では、性的暴力の増加が深刻な問題となつています。このような問題に、日本ではどのように対処しているのか、来日中に調べてみたいと思っています。

教育心理学の分野では、家庭内暴力の問題以外に、私が所属するハルツーム大学の教育も研究対象にしています。たとえば、学生による授業評価を教員がどのように活用しているか、入学方針の受け取り方が、スーダン在住者と外国（とくにUAE）在住者でいかに異なるかなど、実践的な研究を行っています。

社会心理学的なテーマとしては、イスラム教徒に対して欧米人が有しているステレオタイプについて研究してきました。二〇〇八年、ヨルダンのラニア・アル・アブドゥラ女王が動画サイトに自らのチャンネルを立ち上げ、イスラム教徒に対する偏見をなくす活動を開始しました。私は、そのチャンネルに寄せられたビデオ発言の内容を分析してみました。そこからは、イスラムとアラブを混同し、アラブ人はテロリスト、イスラム教は世界の脅威とする偏見イスラム女性は男女差別の犠牲者であると決めつけるあまりにも単純な意見、イスラム圏の学校では、欧米人への敵意を教育しているという誤った見方が存在することがわかりました。

スーダンの行方

最後に、現時点のスーダンにとって最大の政治的問題について触れておきましょう。不幸なことに、スーダンでは、英国からの独立（一九五六年）以来ずっと内戦が続いてきました。現在も西部のダルフルでは紛争が継続しています。とくに、南北内戦は、独立直前に始まる第一次内戦（一九五五—一九七二年）、一〇年間の休戦期間を挟んで勃発した第二次内戦（一九八三—二〇〇五年）と、半世紀にわたる泥沼のような内戦でした。内戦の端緒は、北部にあるスーダン政府による南部のイスラム化政策と、それに対する南部の反発でしたが、なにしろ半世紀にわたる内戦ですから、もはやそのような単純な図式だけでは、とても全貌を語りつくすことはできません。その間には、二〇〇万もの人命が失われ、四〇〇万とも言われる難民・国内避難民が

発生しました。

しかし、ようやく二〇〇五年に南北和平が成立。ちょうど今日から三ヶ月後の二〇一一年一月、南部の分離独立を問う南部在住者と南部出身者による住民投票が行われることになりました。はたして、住民投票の結果はどうなるのか。それ以前に、合意どおりに住民投票は行われるのか。かに南部が分離独立するとして、南北の境界地帯にある油田の帰属をどうするのか。事態は非常に不安定かつ流動的です。私の理想は、南北が協力し合って一つの国家を維持することですが、現実には、そのような理想を許してくれそうにありません。今日の講演の前半では、スーダンの豊かな自然と多様な文化を紹介しました。しかし、もし私が一年後に本日と同じテーマで講演をするとしても、もう今日と同じ話はできないのではないかと——そんな寂しさが脳裏をかすめます⁽³⁾。

(3) 二〇一一年一月に住民投票が実施され、分離独立が一〇〇%近くの支持を得た。



ナイル川の向こうに首都ハルツームを望む。



小ぶりのピラミッドが並ぶスーダンの砂漠。



スーダンの農産物。

伝統宗教の「説得力」

— 東チベット、ボン教復興の現場から

小西賢吾

KENGO KONISHI



中国、四川省の省都成都市からバスで八時間。成都名物の濃い霧が晴れ、突き抜けるような真つ青な空が姿を現すと、そこはもうチベット高原の東端部。長江の源流の一つ、岷江が刻んだ緩やかな谷は、チベット語でシャルコク（東の地）と呼ばれ、チベットの中心地ラサから見れば文字通り東の果てだが、伝統宗教ボン教^①の信仰を保持する数少ない地域のひとつとして知られている。

私が住み込んでいたボン教寺院は、人口約六〇〇人の村に隣接しており、バスが行き交う幹線道路からもその威容を望むことができる。一見チベット仏教の寺院と見分けがつかないが、堂内に入ってみると仏教とはどこか異なる姿をした像が並び、人びとは仏教とは逆の左回りに寺の周囲を巡拝している。

寺院には約九〇人の僧侶が在籍している。約半数を占める比較的若い僧侶は、ロボン^②の下で集団生活を行い、修行に励んでいるが、残りの僧侶は各自で暮らし、大規模な行事がある日のみ寺院に集まってくる。彼らは人びとの求めに応じて、婚礼や葬儀などの人生儀礼、病気の治療、お祓いや占いに至るまで、様々な役割を果たしている。

現代に生きるボン教

シャルコクの寺院の創建は少なくとも

一三世紀までさかのぼり、天災や騒乱などによる破壊を受けながらも存続してきた。

二〇世紀中盤、文化大革命期を中心に活動を停止したが、一九七八年の改革開放政策の導入以降、段階的に復興をとげた。まず一九九〇年代後半までに堂宇の再建や儀礼の再開など、活動の根幹を成す部分が再構築された。その後僧侶教育の充実がはかられ、現在では様々な地域から多くの若い学僧を集めている。さらに、行事の大規模化や、堂の増築などもみられるようになった。復興は単なる過去の再現にとどまらず、さらなる活性化の段階に入っているのである。

近年、シャルコクをとりまく社会経済的な状況は大きく変容した。近隣の景勝地、九寨溝・黄龙が世界自然遺産に指定されたことで観光客が押し寄せ、人びとに新たな雇用機会と多額の現金収入をもたらした。それは、資本主義的な価値観の流入やインフラの急速な発達を伴っていた。一方経済力を得た人びとはその富を惜しげもなく寺院に寄附し、宗教の活性化を強力に支えている。なぜ、伝統宗教が人びとをまきこみ続けるだけの「説得力」をもっているのか。そのメカニズムに迫るのが、私の大きな課題となった。以下では近年展開している大規模な宗教活動の場面から、その手がかりを探ってみよう。

チオルテンに「生活」を投入する

二〇〇九年夏。村の入り口にあたる、幹線道路に面した耕地に巨大な建造物が姿を現しつつあった。高さ二〇メートルに達するチオルテン（仏塔、舍利塔）である。チオルテンには高僧の遺骨や衣服、経典などの供物が納められ、村に害を及ぼすものを遮り、人びとを教化するとされる。この建設はロボンの発案によるもので、寺院が所蔵する古い記録を参考にしながらも、再建ではなく全く新しいものとして構想された。村の幹部は、資金を集め、政府に認可を申請するなど、準備を二年近くにわたって進めてきた。現場には工事用エレベーターが設置され、鉄筋コンクリートの骨組みはビルを建てているかのようだ。対照的に、数々の供物もエレベーターで運ばれ、僧侶たちが定められた手順に従って納めていく。

作業も半ばにさしかかったある日。それまでの厳肅な雰囲気とは異なり、どこか祝祭のような興奮が現場をおおっていた。朝、人びとが供物を満載したトラクターを運転してやってくる。覗いてみると、オオムギやコメなどの穀物、茶葉、香木、そして数々の日用品が目立つ。箸や椀から、衣服や装飾品、馬具まで、衣食住に必要なものが一通り。「伝統的」なものを選ぶというが、

小西 賢吾（こにし けんご）

一九八〇年兵庫県尼崎市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程指導教官退任。現在日本学術振興会特別研究員（京都大学地域研究統合情報センター）。専門は文化人類学。主な論文に「再生／越境する寺院ネットワークが支えるボン教の復興——中国四川省、シャルコク地方の事例を中心に」（『地域研究』一〇（一）、七三―八九頁、二〇一〇年）、「興奮を生み出し制御する——秋田県角館、曳山行事の存続のメカニズム」（『文化人類学』七二（三）、三〇三―三二五頁、二〇〇七年）。

(1) チベットへの仏教伝来以前からの流れをくむ宗教。多くのボン教寺院で傳承されているのはシェンラプ・ミボがジャンシユン(現在の西チベット)方面から伝えたといわれる「ユンドゥン・ボン」(永遠なるボン)と呼ばれる体系である。

(2) 寺院における僧侶教育の最高指導者。

(3) 加行は本格的な修行に入るために済ませる準備の意味であるが、高度な技術をそれほど必要としないため、これだけ参加できる形で行うことも多い。ここで取り上げるのはボン教の代表的な修行体系のひとつである「アティ」の加行である。

(4) *Sacharun shonkharun* イネ科サトウキビ属。この他にも多くの儀礼に使われる。この地域に広く自生するが、専用のものも販売されている。



写真1 集められた大量の供物は、工所用エレベーターで次々と運び上げられ、チオルテン内部に投入される。

明確な規定はなく、炊飯器などの電化製品を持参する者もいる。私のお世話になっていた家の場合、総量は一トン近く、金額的にも年収の約三分の一に達する。これらが、チオルテンの内部、約六メートル四方、深さ五メートルの空洞に文字通り投入されるのだ(写真1)。

この日は僧侶ではなく世俗の人びとが中心になって作業が進む。札束をばらまく者もいれば、これは入れるのにふさわしいかという議論が発生し、ロボンの裁定をおおぐこともある。ある男性は、「入れれば入れるほど、村にとっても家族にとってもよいのだ」と語る。特別に作ったものではなく、最も身近なもの、生活の一部を捧げるという感覚は、人びとを建設に感情移入させ、協働の場を支える大きな要素となる。夕刻、巨大な空洞が満たされると、皆が満足した表情を浮かべていた。

身体に刻み込まれる修行

一月、完成したチオルテンが雪をかぶる頃、寺院に人びとが集まってくる。毎年

この時期、ロボンを師としてゴンジョ(加行)³⁾が行われる。「チベット人なら来世のため、誰でも一生に一度はやるべきだ」といわれるゴンジョは、近年参加者が増大している。一二月にかけて約二ヶ月修行するのは約一二〇人の男女である。私がお世話になっていた家族も毎年順番に全員が参加しており、この年は五〇代になるお母さんの番で、もう三度目になる。

彼女がまず挑むのは、ゴンジョ・ブムグとよばれる九種の項目を各一〇万回、計九〇万回反復することである。そのうち最も苛酷なのは、五体投地の礼拝であり、慣れない私なら一〇回ほど息があがってしまうのを、彼女は一日二〇〇〇回のペースで行っている。そして家事をしている時にも種々のマントラをもごもご唱えている。人びとは、誰が何万回終わったとか、まだ何回しかできてない、ということを噂し合う。期間中に行われるロボンの講話には、修行者以外にも近隣から一〇〇人以上が集まり、みなでマントラを唱える。

修行が終盤にさしかかると、ポワが行われる。これは死の瞬間に備え、自分の意識を頭頂部の穴から出し入れするという観想を行うものである。ポワを続けていると実際に穴が広がってくると信じられ、その成果は、ガシヤラという細い草を頭頂部にさすことで判定される(写真2)。ロボン自身が参加者たちにガシヤラをさす日は、緊張感にあふれていた。「草が途中で曲がってしまったら、心が曲がっているということだ」といわれる。恐怖で涙を流す者も多い中、淡々とロボンの下に進んだお母さんの

頭にはまっすぐ草が立ち上がった。身体との強い結びつきは、人びとに修行の効果を最もダイレクトに訴えかけるものである。

肌で感じる宗教

ここで見てきた活動を大きく規定しているのは、ボン教が長きにわたって伝えてきた典籍である。ロボンのような高僧は、豊富な学識と求心力を持って、人びとを巻き込みながら典籍に説かれる世界を具現化しようとする。しかし、個々の実践の「正しい」意味だけが人びとを突き動かすわけではない。生活の一部を投入することや、身体に修行の成果が現われるという、最も身近な感覚との接点を、急速に変化する社会経済状況と共存しながら保持していることが、伝統宗教が人びとをつなぎとめる力の源になっているのである。このような肌で感じる感覚を、これからも追い求めていきたいと考えている。



写真2 ロボンがガシヤラを参加者の頭頂部にさす。ガシヤラは先端部が尖らせてあり、頭頂部に開くとされるわずかな隙間を押し当てる。

子どもの生体リズムと運動

柴田真志

MASASHI SHIBATA



夜一〇時過ぎ、駅近くのコンビニエンスストアでは塾帰りの小中学生の姿をよく目にする。私の子ども時代を振り返ると、夜一〇時ともなれば眠気が強くなり、起きていること自体が困難だったような記憶がある。現代社会は確実に夜型化してきているが、子どもの学校生活を考えると、遅寝遅起きの夜型タイプに比べれば、早寝早起きの朝型タイプの方がより適応しやすいのは明らかである。近年、様々な時計遺伝子が発見されてきているが、夜型タイプであっても授業の始業時刻は決まっているため、私たちは自らの時計を社会的スケジュールに合わせていかななくてはならない。

光の明と暗

私たちの社会は、一八七九年のエジソンによる電球の発明以降、光があふれ、夜型化、二四時間化への道をたどっている。光は、私たちに様々な恩恵を与える一方で、生体リズムを二四時間周期に同調させることを困難にさせる一面も持ち合わせている。生体リズム (biological rhythm) は、生物時計によって駆動されるリズムである。例えば、体温は夕方前後に最高値を示し、夜間就寝中に最低値をとる概日リズムが認められるが、恒常的環境下で臥床安静・断眠すると、夜間の低下度および日中の上昇度

がそれぞれ小さくなるものの、最高値および最低値の時間帯に大きな影響はなく、そのリズムは強固に維持されることが示されている。したがって、一日の中の体温の高低は、活動・休息に影響を受けながら、本来生物に備わっている時計機構によって駆動されていると考えることができる。

ヒトの体温リズムや睡眠・覚醒リズムは、二四時間よりやや長い周期であり、光や社会的スケジュール (食事、身体活動など) 等によって修飾され、地球の自転周期二四時間に同調していると考えられている。仮に、時間の手がかりのない恒常環境で過ごす、体温や睡眠・覚醒リズムは地球自転周期に対してやや遅れ始め、リズム位相の後退が観察される。この位相後退初期においては、体温リズムと睡眠・覚醒リズムはほぼ同期しているが、時として両者のリズムが同期しなくなり (脱同調)、四〜五時間以上時差のある地域への海外旅行時の時差ぼけのような状態を呈する。時差症状は疲労感や不快感など心身の不調を伴うため、健やかな生活を送る上では生体リズムを整えることが非常に重要であるといえる。

ヒトは就床後、手足など末梢の部位から熱を放散することによって深部温度を徐々に低下させ、深い睡眠へと移行するが、この末梢からの熱放散を促す役割を担っているのが視床下部松果体由来のメラトニンである。一般的には夜間に分泌が増し、日中ではほとんど観察されない概日リズムを有している。しかし、高照度の光刺激に対してその分泌量が著しく抑制されることが知られており、したがって、夜間就寝前や就寝中の高照度光刺激がメラトニンの分泌量を抑制して覚醒度を高めるため、睡眠の質を損なう可能性は否定できない。最近では、高照度でなくとも数百ルクス程度の室内光でもメラトニン抑制が確認されており、その抑制度には相当な個人差がありはするものの、夜間の光曝露によってその分泌が著しく抑制されてしまったため、いつでも光を浴びることができる現代社会は生体リズムの維持を難しくしているといえるのである。

我が国の睡眠実態の推移

朝 (六時〜六時一五分) と夜 (二二時〜二二時一五分) のある時点における国民全体の睡眠率の年次変化 (図1) を見ると、二二時〜二二時一五分 (■) 時点での睡眠率の低下が著しく、社会全体が夜型化していることは明らかである。また、一〇歳以上の小学生の平日睡眠時間は、一九七〇年九時間二三分、一九九〇年九時間八分、二〇〇五年八時間四〇分と徐々に短縮してきているが、学校始業時刻に大きな変化が

柴田 真志 (しばた まさし)
一九六四年、大阪府生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士 (人間・環境学)。現在、兵庫県立大学看護学部教授。専門分野は、運動科学、体力科学。

ないことから就床時刻の遅延が著しいと言える。ヒトの体温リズムと睡眠・覚醒リズムは、先述のように時としてリズムが同期しないため、それぞれ別々の振動体と考えられている。この二振動体モデルでは、体温リズムに比較して睡眠・覚醒リズムは弱い振動体であるとされているため、例えば子どもの生活時間は個人の欲する時刻に就床または起床しているというよりはむしろ親の生活時間や教育観などが色濃く反映されている可能性が強い。子どもにとって、睡眠時間がどの程度必要かという議論は難しいが、ただ、世界的に見て、日本の大人も子どもも睡眠時間はヨーロッパ諸国に比べて一時間程度短いのが現状である。

日中の運動実践とリズム位相の前進

日中の運動実践や早朝の受光は、体温など生体リズムの位相を前進させると考えられている。本来、体温リズムなどを指標にして研究を行う場合、直腸温など深部体温が指標となる。しかし、子どもを対象とする場合には、生体負担など倫理的配慮は欠かせないので、口腔舌下温や皮膚温を代替指標として用いている。図2は、小学四・五年生男子児童を平日の歩数の多少によって群分けし、歩数高値群(■)と歩数低値群(○)の起床時(朝)、一四時(昼)および就床時(夜)の口腔舌下温の変動を示したものである。図から分かるように、群間比較では、歩数低値群の起床時体温は高値群より有意に低い。また、群内の比較では、歩数高値群では起床時と就床時に差はないが、歩数低値群では就寝時が起床時に比べ

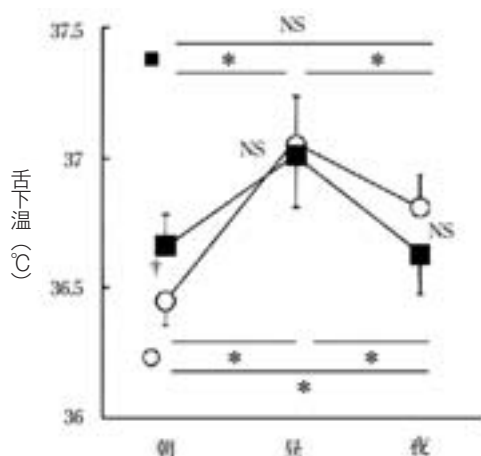


図2 歩数高値群と低値群の舌下温日内変動
高値群 (n=8, ■): 平均 22.951 ± 2.147 歩
低値群 (n=8, ○): 平均 10.940 ± 1.615 歩
*: 群内比較 $p < 0.05$ †: 群間比較 $P < 0.05$

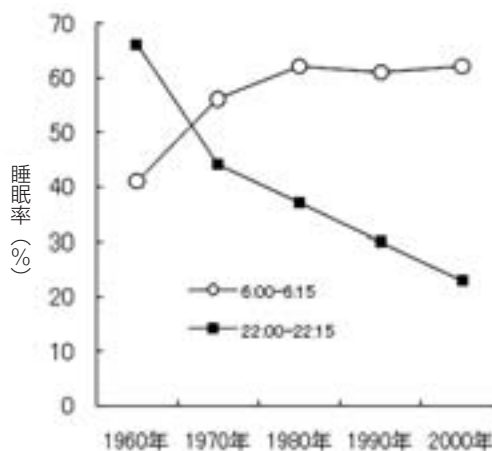


図1 睡眠率の年次変化
国民生活時間調査 (NHK 出版) より作図

有意に高い値を示し、就寝前に体温が十分に低下していない様子が伺える。両群の起床・就床・夕食・入浴など生活時間に差がなかったことから、身体活動量の多少が体温リズムに影響を及ぼしていると言える。別の機会に同様な調査を行って、合わせて

就床時の唾液を採取し、含まれるメラトニンの量を測定した。すると、一日の歩数が低い値の児童 (12015 ± 2251 歩, $n=8$) の就床時メラトニン量 (3.9 ± 2.7 pg/dl) は、歩数が高い値の児童 ($22,929 \pm 1,445$ 歩, $n=8$) のメラトニン分泌量 (13.0 ± 6.8 pg/dl) より有意に低く、また、全対象者 ($n=53$) の日歩数と就寝時唾液メラトニン量の間にも有意な正の関連が認められた。これらの研究結果は、身体活動量がある程度確保しないと体温リズムやメラトニン分泌リズム位相が後退し、朝目覚めた時の体温が低く、午前中の活動に影響を及ぼす可能性があることを示唆していると考えられる。

経年的に睡眠時間が減少し、起きている時間が増加しているにもかかわらず、子どもの一日の歩数は三〇年間で六〇〇〇歩ほど低下している。適切な生体リズム維持に身体活動はどの程度必要なのか、子どもの健やかな成長に寄与する研究を行っていきたいと考えている。

文献

- [1] 柴田真志ほか (2004) 「起床時体温低値男子児童の身体活動、心臓自律神経活動動態および体温概日リズム特性」『体育学研究』49-4:295-303
- [2] Shibata M et al. (2010) Effects of daily physical activity level on circadian rhythm of oral body temperature and melatonin in children. NSCA Conferences, s.735

濱田啓介Ⅱ著

評者・中野三敏（九州大学名誉教授）

『近世文学・伝達と様式に関する私見』

京都大学学術出版会

二〇一〇年二月 四三三頁

定価 六三〇〇円



本書は、前著『近世小説・営為と様式に関する私見』（一九九三年二月京都大学学術出版会）に続く、著者第二の論文集である。

何れにも「様式」という語が用いられている通り、著者にとって「様式」の語は極めて重い。近世文学の研究は結局様式の研究であるという所に落ち着くものの如くである。果して本書の後記には「私は若年の頃、内容とか形式という場合、内容とは奥深いもので、形式とはうわべの浅いものという程の理解しか持っていなかった」しかし次第に「形式とは内容

に對置される概念である事」に思い至り「それを研究主題とする事」になったと記す。まさしくこの点に、本書が凡百の近世文学研究書と明瞭に一線を画す由來が述べられているものと確信する。即ち従來の大概は、言う処の内容の研究に終始して足れりとし、屢々様式（形式）の研究を疎かにする嫌いがあつた。その時、その内容の腑分けに用いられるのは、往々にして凡そ見当違いの近代主義的理論の浅薄な適用に過ぎなくなる場合が多い。本書の周到な論述には、その点に於て一点の翳りも躊躇もない。例えば本書

の章題には「讀本における恋愛譚（ロマンス）の構造」とか「幕末の写生歌」などの、一見近代主義的と見誤られそうな措辞も散見するが、それは入念すぎるほど入念な近世的様式への配慮と、徹底的な読み込みによつて選ばれた措辞であり、その然るべき所以が圧倒的な説得力を以て示される。ここでも著者の言葉借りれば「複数の作品を横に並べて考案すること」と、極めてそつけないが、その徹底的な実践なのである。しかもそれは屢々近世の枠を越えて、室町物語から中世小説へ、また王朝物語へ、更に中国明清朝小説世界へと、通時的かつ広範囲に展開する。その挙例は徹底し、その結果その論には屢々語例や脚色例の殆んど洪水とも言うべき比較や、或いは比率計数の指示が頻出し、それは当然のこと圧倒的な説得力を齎す。特に文字や詞章や文体を論じた章にそれが多いのは必然である。近世の文字論・文体論としても、本書が他の追隨を許さぬ所以でもある。

文字に関わつて、私はこの所、戦後知識人の和本リテラシーの衰退ぶりに大きな危惧を懷いている。それは時間軸を遡つて積み上げられた文化遺産に通じる唯一の回路を、自から絶ち切ることに他ならないからである。但しその回復は意外に簡単で、近世版本をテキストにした自習が、その第一歩として極めて効果的であることを勧めている。理由は、版本に用いられている変体仮名の種類が、手書きの写本類に比べて遙かに簡略化・記号化されて慣れ易い所にあるのだが、それは私の場合、単に直感に依る言表でしかなかった。それが本書には「出版と文字の歴史」「板行の仮名字体」の二章に於いて、見事に実証されている。無論、著者の目的は、文字利用の方向として収

斂・合理化の道筋を証明する所にあるのだろうが、今の私にとつて、これは何よりの味方でもある。

このような著者論述の方法は、ある意味、局部的に過ぎるといふ諷刺を招き兼ねないのかもしれない。例えば出来の悪い論文を評して「重箱の隅をつ、くような」という、負の意味を持つ成句がある。しかし「重箱の隅をつ、」かないような論文などは、論文の名に値しないのではないか。問題は何時迄も重箱の隅に踟躕して終に一步もそこから出るを得ない所にある。つ、き続けて重箱の底に一穴を穿ち得れば、その向うには広大無辺の天地が在る。穴を穿つには隅をつ、くのが力学的にも理に適う。つまりは物事の局部を具体的に採りあげてその時代の一般に及ぶという、この著者に対しては今更らしい言い方かもしれないが、いわば論文の王道を示し得た本書であることは、どれほど力説してもし過ぎることはあるまい。

収める所の論は全十七章。殆んど近世小説の一局部を具体的に採りあげて、それぞれ持つ近世小説としての様式を剔抉する。著者が馬琴研究の泰斗であることは世間周知の事実。従つて撰ばれた局部は近世小説に関わる所が多いのは当然だが、一方、上方書肆の動向、芝居絵の功能、浄瑠璃正本の詞章等々に関しても有無を言わせぬ論証が展開され、更には幕末歌壇の写生歌という、近代につながる様式についての考察には、その鑑賞眼の鋭さと適確さとが溢れている。しかも著者の瑞々しい感性を十二分に納得させられることも是非言い添えて置くべきであらう。

勝盛典子Ⅱ著

評者・松原史（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

『近世異国趣味美術の史的研究』

臨川書店

二〇一二年三月 五五〇頁

定価 一七八五〇円



ヨーロッパといえばオランダ、洋書といえば蘭書という時代があった。江戸中期から後期、鎖国下の日本のことである。福沢諭吉が若い頃蘭学を学び、後にあっさり英学に切り替えたのは有名な話であるが、オランダが出版・貿易大国としての地位を返上して久しく、日米関係がとりわけ重要視される現在において、そうした事実は残念ながらほとんど忘れ去られている。しかし日本人にとって蘭学が、求めてやまない新知識の源泉であった時代が確かにあったと、鮮やかな実感を伴って思い出させてくれる書物である。

本書は、兵庫の素封家、池長孟（いけなが ちやう、一八九一―一九五五）が「日本で制作された異国趣味美術」という珍しいテーマに基づき昭和初期に蒐集した池長コレクションの考察を中心に据え、船載蘭書の影響や輸入顔料使用の実態、それらの作品を取り巻く人間関係など、作品の背後に広がる広汎な世界を明らかにしている。著者は、池長コレクションを有する神戸市立美術館に長年にわたって勤務し数々の展覧会を手がけてきた現役の学芸員であり、本書に収録されている膨大な数の図版は、さながら美術展を眺めているような満足感を与えてくれる。

近世の「異国趣味美術」、特にオランダと関係深い美術作品の分析を通じて示されるのは、それらの美術作品が、いみじくもコレクションを蒐集した池長自身が述べている通り「美術だけの問題では無く、日本の近世文化史の重要な位置を占めるもの」であるという事実である。

洋風画は、言うなれば近世における新知識受容の様子を今に伝える貴重な史料である。例えば、洋風画家たちによる博物図譜やイソップ物語の挿絵から、人体図、動物、昆虫、雪の結晶、果ては太陽図、月面図や地図装飾に至るまで精密に写し取られたスケッチや絵画作品の数々からは、当時日本にもたらされた船載蘭書とその流通の様子が特定される。そして、そうした蘭書の流通からは、後に述べるような画家や知識人の交流の様子が推測されるのである。また著者は、画中に挿入された細密な地球儀や人体組織の断面図など、絵画的主題としては必ずしも必要の無い要素の数々から、当時の外来博物学知識の受容の様子を見て取る。

更には旗本の石川大浪（いしかわ なる、一七六二―一八一七）が、自身の作品の多くにアフリカ最南端の喜望峯にそびえる大浪山（漢訳）のオランダ語名「Tafel Berg」をサインとして用いている事例等から、鎖国下にも関わらず行われていたオランダ人との交流の様子と新知識を理解し表現せずにはいられない画家の姿を読み取っている。

またオランダ船によりもたらされた新知識の一つである洋画法の受容に関して考察が試みられる。江戸の浮世絵師歌川国芳（一七九七―一八六二）の作品における、西洋銅版画の遠近法や陰影のつけ方の直接的な影響が指摘され、彼の代表作ともいえる「忠臣蔵十一段目夜討之図」が、ニューホフ著『東西海陸紀行』（一

六八二）中の銅版画の構図をそのまま忠臣蔵の有名な一場面に転用していたことが示される。更に、江戸の万能人として名高く、洋画の理論的指導者ともいわれる平賀源内（一七二八―一七九二）と、一七五二年に初めて輸入された「ブルシアンブルー（ペルリンブルー）」という新しい合成顔料との関わりを、科学的分析を通じて解明し、長崎から江戸、そして秋田への顔料伝播における源内の果たした役割を明らかにしている。これは、洋風画法という新知識の伝播の実態に迫る発見であったといえる。

上述のような新知識や洋画法の受容を支えていたのは、長崎のオランダ人経由でもたらされる船載蘭書であった。平賀源内が家財道具すべてを売り払って船載蘭書を購入していた話は有名であるが、本書は新たに、前出の石川大浪の蔵書内容を解明し、大坂の知識人木村兼段堂（一七三六―一八〇二）の蔵書を求めて、全国の知識人たちの往来があったことを明らかにしている。現在より遙かに交通が不便だった時代に、蘭書という新知識を求め、これほど広範囲にわたる知識人のネットワークが存在していたことに驚かされるばかりである。また、こうした洋風画、銅版画、輸出漆器の分析を通じて、異国趣味の江戸、大坂、長崎各地における地域的特性の存在が確認される。

本書は、「近世異国趣味美術」という新たな研究領域を切り開いたという意味で画期的な書であると言えるだろう。「近世異国趣味美術」の背後に広がる広汎な世界を指摘し、作品を歴史的に位置付けた上で、それらが近世日欧文化交流史の実態解明に重要な位置を占めるものであることを明らかにしている。

田中雅一 著

評者・橋健一（立命館大学・非常勤講師）

「癒しとイヤラシ——エロスの文化人類学——」

筑摩書房

二〇一〇年一月 二四〇頁

定価 一六八〇円



性創出への可能性を追求していることを考えると、本書もイデオロギーに対する批判的検討の一つであるように、評者には思える。

私たちは普段、イデオロギー的な意味の世界に生きている。だが、エロスの世界ではイデオロギーの主体とは違った、自らの欲情に突き動かされた別の主体が現れ、怪しく猥らな行為を繰り広げる。その世界は、イデオロギーが分け隔てる「わたし」と「あなた」が重なり溶け合う「浸透可能空間」である。

だが、エロスの世界にもイデオロギーは侵入してくる。「性や愛はこうあるべきだ、これが常識だ」という教条的な語りとなつて。著者は、本書で「身体が当人にとって監獄と感ずるような状況」他者を排除する一方面的な権力関係を前提とする状況」を「反エロス」として批判的に捉えるが、評者はその「反エロス」を「性愛へのイデオロギー的語りかけとその拘束」と言い換えられるように思う。

イデオロギーは、特定の社会情勢と結びつくために時代的な様相を持つが、反エロスも時代性を帯びる。著者は自らの欲情の記憶から、医学書から売春婦をめぐる言説、A V女優へのインタビュー記事、性の現場のルポルタージュなどの資料を取り上げる。そして「男の生理的な欲求に基づく排泄行為」とみなされていた性行為が「男が女性に快楽を与え支配する行為」とみなされるようになったこと、そうした男性中心の「反エロス」の狭間に女性から「二人でイッチやいました！」というような越境的なエロスが表出することなどを示し、反エロスとエロスとの時代的な攻防を描き出す。

そんな本書の中心に位置するのが代々木忠監督によるA V作品や著書である。

マニユアル化した性の型をはずし、「制度の世界」の自我から自分自身を解放してこそ「本音の世界」の「真の解放的オーガズム」が得られるという主張。そうした深いオーガズムをもたらす性行為のあり方。男女の境界さえ消し去るようなオーガズムがもたらす癒しの効果。そこに見出される偶発性に身を任せる受動性。彼が明るみに出したエロスの世界の重要性が論じられる。

「YOYOCU」こと代々木忠は、評者も学生だった九〇年前後に慣れ親しんでいた名前で、当時彼の主張から様々な影響を受けたことを覚えている。その後二〇年ほど、彼の主張を追うことはなかったが、本書を読み、今年公開されたドキュメンタリー映画「YOYOCU SEXと代々木忠の世界」を観ると、再び、彼の描くエロス世界が時代から求められているように思える。

以前に比べ、私たちの生活のより多くの部分が消費の対象となり、エロスの世界もより広範囲にまで商品として切り売りされている。「あなた」の「わたし」を見つめる眼差し、その笑顔、魅力的な肢体、そして身体的結合。それらは、それぞれ商品として多様なメディアを通して成型されて流通し、私たちはそれに「萌え」、興奮する。こうして私たちの欲望は断片化され、エロスは手軽なものとなるが、全人的な交渉は阻害される。

代々木作品が、そうしたエロスの消費や商品化に大きく貢献してきたのは間違いない。だが、その濃密なエロス世界は、断片化された私たちの欲情に対し、再び生々しい他者と向き合うよう執拗に働きかけるのである。

何かを求める体の奥の熱い「疼き」。満たされない「渴き」。私たちは、そうした身体感覚に突き動かされ、しばしばすべきではないこと、常軌を逸した領域にまで足を踏み入れてしまう。

「あの人、普段はあんな立派なこと言っているけど、夜になったらね……」。

立派なことを言うのは、イデオロギーの主体である。「〇は△すべきである。〇が△なのは常識である」。私たちはそういういった声をどこかで耳にし、いつしかそれをもっともなこととして自らも語り出す。そんな呼びかけに応じた語りの主体をイデオロギーの主体という。

評者が著者と初めて出会ったのは、イデオロギーに関する人類学者と哲学者の共同研究の成果『人類学的認識の冒険——イデオロギーとブラクティス——』に収められた論文においてであった。イデオロギーがいかにか私たちを拘束するのか、既存のイデオロギーにどう抗することができのを探るその本の議論の数々は、研究の方向性を見失っていた評者には、とても刺激的だった。

著者は、本書のなかでイデオロギーの問題には触れていない。だが、著者がその後、言語的なイデオロギーの主体とは違う、「行為主体性」が持つ改革や共同

森毅Ⅱ著 福井直秀Ⅱ編 評者・伊藤公雄（京都大学文学研究科・教授）

「一刀斎、最後の戯言」

平凡社

二〇一〇年二月 二三四頁

定価 一四七〇円



森毅さんが亡くなってから一年になる。森さんといえば「一刀斎」の通称で有名だ。「面長、野武士風の風貌が、作家・五味康祐に似ていて、その小説に登場する『一刀斎』という剣豪に由来するらしい」と、本書の編者、福井直秀さんは、「まえがき」で書いている。でも、ぼくの印象をいうと、五味康祐というより、かつて時代劇の名脇役だった伊藤雄之助にそっくりだったという記憶がある。そこで、剣豪・伊藤一刀斎とダブらせて、このあだ名がついたのではないかと想像している。

本書は、二〇世紀後半における京大第一の名物教授・森一刀斎が書き残した膨大な文章（ほとんどが、いつものようにベッドに寝ころんで書いたものだろう）から、名言や迷言を抜き出してまとめなおしたものだ。

ここで、この本のなかからいくつか森さんらしい（とぼくが感じた）言葉のいくつかを抜き出してみよう。

「生来ヤジウマのぼくは、他人が自分と違った価値観をもち、違った判断をするということに、ひどく興味をもつようになった。その意味では、無関心という

より、人間について、さまざまな考えの人間がいるということに関心を持ち出したともいえる。」いうまでもなく、ヤジウマであることは森さんの生涯の生き方だったと思う。ただし、森さんは、お調子ノリの単なるヤジウマというわけでもない。実際、この文章の直前で、森さんは、こうも書いている。「中三ぐらいからのぼくは、自分と直接の関係でしか、あまり腹をたてないようになってしまった。これはまあ今でいう無関心派になったのかもしれない。そのせいか、今でもぼくは、無関心とかシラケとかいうのに、ひどく同情がある」と。

シラケたひねたヤジウマ。適正距離をたもちつつ、進んでいろいろなことや人に巻き込まれていくというのが、たぶん、森流だったのだろう。

「首尾一貫、一意専心なんてのはぼくがもつとも排除したいモラルである。しかし、二つの部屋を仕切るのも、やはり単純でつまらない。二つ以上のことが干渉しあい、葛藤するのではなくつつや、人生は面白くない」という人だった。

けっこう人生訓めいたものも書いている。

「人間は、迷うことを避けていると、どんどん迷う能力をうしなっていくものだ。とくに人生の道では、迷うことが多いのに、迷いをおそれるから不幸になる。」

若い世代にむけたメッセージも「なるほど森さんだ」と思わせる。

「他人のことを考えないから、いじめが生まれる、というのは嘘だ。考えなくてもよい他人のことまで考えすぎるから、仲間と錯覚していじめたりする。仲間意識の解体の方がぼくの処方箋。仲間としての結束ではなく、行きずりの連帯が未来のモラルになる。」別のところでは、「仲間にならないのが、いじめられ

ないコソ」なんて書いてもいる。

森さんが、六十歳になったとき、「人生四回説」を唱えたことがある。ぼくも、この話は何度か聞かされた。本書でも、この言葉は引用されている。

「人生二十年説」を考えた。べつにきっかり二十年でなくていいのだが、当面二十年ぐらいを一つの人生としてみて、その人生を輝かせることを考える。八十歳までなら、四回の人生を生きたことになる。」五回目の人生を期待していたばかりには残念だったが、予言通りのほぼ八十年の人生だった。

最後に、一言、注文も書いておきたい。変な言い方だが、全体を通じて、編集の内容があまりにもバランスがいいというのが気になったからだ。時代の目配り、分野の多様性への配慮、さまざまにわたる本や雑誌からの引用など、確かに森さんの仕事の全体像がよくつたわる編集になっている。でも、頭から順に読んでいくと、何だか森さんの顔が浮かんでこないのだ。森さんで、こんな風なバランスのよさは持っていなかったと思う。むしろ、配慮に満ちたバランスといったものからほど遠いところにいた人だったという印象がぼくにはある。もちろん、森さんがバランスの悪い人であったという意味ではまったくない。むしろ、とてもなくバランスのいい人だったと思っている。ただ、そのバランスは、「乱調のなかのバランス」といつてもいいようなものだった。

それでも、言葉のひとつひとつはいかにも森さんのものだ。だから、読者は、頭から読まずに、どこでもいいから、ぱっと開いたところから読んだらいいと思う。ばらばらに書かれた森流の文章をあちこちつまみ食いしていると、いつの間にか読者は、森ワールドのなかにいる自分を発見することだろう。

人環図書

― 本研究科教員・出身者の新著より ―

小野蘭山

小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編
八坂書房 二〇一〇年六月

五月、李時珍の『本草綱目』初版（金陵、一五九六年、中国中医科学院图书馆所蔵）がユネスコの世界記録遺産に登録された。東アジア科学史の古典が脚光をあびたわけで、中国では国威発揚に裨さずものと歓迎を受けたようだが、このニュースは日本のマスコミではほとんど無視された。『本草綱目』は江戸初期から幕末に至るまで数多くの調点本が流布し、日本の自然研究に多大の影響をおよぼした。しかし、『本草綱目』の分類枠にとどまりながら、日本自然誌の集大成とも呼ぶべき『本草綱目啓蒙』を著した小野蘭山（一七二九―一八一〇）の生涯と多方面に亘る業績は、現代ではほとんど忘れ去られてしまっている。

本書は昨年、小野蘭山没後二百年を記念して出版された研究論文・資料集である。老練から新進まで二五人の研究者がそれぞれ得意のテーマで論文を寄せ、書簡集、門人録、年譜などの資料も充実している。小野家第八代のご当主小野強氏は資料保存の思い出を寄せられ、中国本草学研究で知られるフランスのジョルジュ・メテリエ氏による植物学用語の論考もある。本研究科からは、松田清教授が蘭書ワインマンと小野蘭山、院生太田由佳氏が松岡恕庵と小野蘭山、院生竹中梨紗氏が植物学者C・J・マクシモーヴィイチについて寄稿している。

本書は京都の生んだ江戸時代最高のナチュラリスト、小野蘭山に対する一般の関心を喚起すると共に、今後、江戸時代博物学研究上、必須の参考文献となるだろう。

〔A5判 口絵二二頁、本文五七八＋五八頁〕
一二〇〇〇円＋税

ハイブリッド化する日韓

小倉紀蔵著

N T T出版、二〇一〇年一〇月

日本のアカデミズムでは、朝鮮半島をイデオロギーや歴史観抜きの視線で対象化し分析することを経長い間忌避してきた。四方田犬彦の言葉を借りれば、「われらが他者なる韓国」を表象することは倫理的な禁忌であったのだ。朝鮮半島は日本がかつて植民地支配した土地であるから、朝鮮半島問題というのは「道徳的で良心的であるべき日本人の問題」なのであった。

このような姿勢からは、等身大の韓国を対等な立場で認識するという行為は期待できない。そしてそのようなバイアスを払拭できない間に、韓国は産業化を達成し、民主化を成功させ、情報化を進展させ、みるみるうちに巨大化していった。今や日本のほぼ全分野の産業は韓国の激烈な追い上げを受けて苦しんでいるか、あるいは後塵を拝している。文化や教育などの面でも韓国の勢いはすごいし、市民運動や「緑色（エコ）」運動、反開発や民主主義の闘争など、リベラルな実験・実践においても日本より過激だ。

本書は、今、日本と韓国がどのようなハイブリッド（異種混成）化しているのか、そして歴史や領土をめぐる軋轢をどのような関係性の中に組み込めばいいのか、ということ論した。

〔四六判 一一五頁〕
一七〇〇円＋税

世界について（岩波ジュニア新書）

戸田剛文著

岩波書店 二〇一一年二月

この本は、世界にあるさまざまな具体的な問題を考える前に、その準備としてまず世界というものがどういうものであるのを考えてみようという哲学の本である。しかし、いろいろと考察を重ねたうえで、世界がどういふものであるのについて結論を出すのではなく、あらかじめ、世界を信念のネットワークであるという主張を提示したうえで、なぜそう考えるべきなのか、そしてそう考えると価値や真理などの問題をどのように扱うべきかということになるのかの説明を重ねていく。

筆者の立場は、筆者自身が述べているように、プラグマティズムの影響を受けたものである。唯一の絶対的な事実や真理を求める立場に対して、多様な価値観を擁護するものであり、それらがときとしてどのようなことかという主張を拡大しようとするのかということとを論じている。筆者の主張は論証といたったものではなく、一つのものの考え方の説明とも言えるものである。

この本では、筆者は、他の哲学者の名前や専門用語などをほとんど使わずに話を進めていく。そのため、哲学的な知識を読者が持っていることを前提とはされていないが、もちろん哲学の知識を持っている人には、各所の議論が、どのような哲学者や理論が背景にあるのか容易に理解できるだろう。

〔新書 一二四頁〕
八二〇円＋税

マグマという名の煩悩

鎌田浩毅著

春秋社 二〇一一年五月

日本は世界屈指の火山国であり、たびたび噴火に見舞われてきた。東日本大震災の直後から、一〇座を超える活火山の地下では、不気味な地震が起きている。火山学者たちは、この地震がマグマの胎動へ進むかどうか、固唾を呑んで見守っている。実は「3・11」以後、日本列島は地震のみならず火山の活動期に入ってしまったのだ。

自然を潤し人間に数多の恵みを与え続ける活火山は、また突如として日常生活を損なう脅威となる。日本列島の活火山は全部で一〇八、古来言われた「煩悩」の数と同じ。この偶然をヒントに、本書はうごく活火山を背景に、文豪や著名人らの（心のマグマ）を探ってみた。

取り上げた人物は、古田織部、野口英世、夏目漱石、大村益次郎、桂枝雀、宮沢賢治、菊池寛、北杜夫の八人。ときに自分も他人も滅ぼしてしまう灼熱のマグマに焦点を当て、いかにして彼らは（心の爆発）に対処してきたかを考察してみた。

人生ではこうした「マグマ」と上手に付き合うコツが存在する。恵みと災害の二面性を持つ火山は、人間となんら違いがなかったのだ。心の奥底に潜む「マグマ」を制御するヒントも、本書では披露してみたい。私にとって大自然の「火山」から学ぶものは、いつまでも尽きないのである。

〔四六判 一二二頁〕
一五〇〇円＋税

瓦 「かわらばん」版

◆^{じんかん}人環とは？

本雑誌の表題「人環フォーラム」の“人環”とは、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究所」の略称です。

◆受賞

伊藤 哲明（相関環境学専攻助教）
第五回物理学会若手奨励賞 二〇一〇年一月
田村うらら（共生文明学専攻卒・研究支援員）
第六回日本文化人類学会奨励賞 二〇一二年六月
中谷和人（共生文明学専攻卒・JSPS特別研究員）
第六回日本文化人類学会奨励賞 二〇一二年六月
長村祥知（共生文明学専攻卒・日本学術振興会特別研究員PD）
第一二回日本歴史学会賞 二〇一一年七月
片山裕美子（相関環境学専攻博士後期課程）
平成二二年度京都大学VBL若手助成奨励賞 二〇一一年七月

◆催し物のご報告

◇日本中東学会第二七回年次大会一般公開イベント（日本中東学会主催 人間・環境学研究所 岡真理研究室共催）

●日時 二〇一一年五月二日（土）一三時三〇分～一七時

●場所 人間・環境学研究所棟地下大会議室

第一部 朗読劇

THE MESSAGE FROM GAZA 〈ガザ、希望のメッセージ〉

上演時間九〇分、脚本 岡真理、出演 国境なき朗読者たち（京都大学学生、市民有志）

第二部 シンポジウム

抵抗の文学 世界文学の中のパレスチナ

パネリスト 鶴飼 哲（一橋大学、フランス文学）／太田昌国（編集者、民族問題）／

岡 真理（京都大学、現代アラブ文学）／細見和之（大阪府立大学、詩人・ドイツ思想）

司会 山本 薫（東京外国語大学）

◇三月十一日から四ヶ月あと少しだけ、つながりがほしい。（企画 京都大学総合人間学部／人間・環境学研究所学生有志）

●日時 二〇一一年七月一日（月）一八時二〇分～二〇時

●場所 人間・環境学研究所棟地下大会議室

企画 安達千里、杉本友里、大久保杏奈

講演者 小倉 紀蔵（人間・環境学研究所准教授）／渡辺真知子（総合人間学部一回生）／星 和人（宮城県山元町）

◇環on映画会

●平成二年

第一回 一月一九日(月)

テーマ ロリータ・ロココ・ニホン

案内人 篠原資明

上映作品『下妻物語』(二〇〇四年、中島哲也監督)

第二回 二月二〇日(金)

テーマ 南極観測 今、昔

案内人 石川尚人

上映作品『南極物語』(一九八三年、藏原惟繕監督)

第三回 三月一九日(木)

テーマ 男の子女の子、どちらが欲しいですか

案内人 山本行男

上映作品『變臉—この權に手をそえて—』(一九九六年、呉天明監督)

第四回 四月二三日(木)

テーマ 人生は祭りだ、あるいは喪失と肯定

案内人 菅原和孝

上映作品『8½』(一九六三年、フェデリコ・フェリーニ監督)

第五回 五月二二日(金)

テーマ Eternal Triangle —文学、映画、音楽

案内人 安部浩

上映作品『砂の女』(一九六四年、勅使河原宏監督)

第六回 六月二五日(木)

テーマ 人生の苦悩をロックのリズムに乗せて

案内人 藤田糸子、勝又悦子

上映作品『Jesus Christ Superstar』

(一九七三年、ノーマ・ジュイソン監督)

第七回 七月二四日(金)

テーマ 子どもとは何なのか—代理母が問いかけるもの

案内人 小山静子

上映作品『シバジ』(一九八六年、イム・グオンテク監督)

第八回 八月二七日(木)

テーマ 夜の学校—教えるとは、希望を語ること、学ぶとは、誠実を胸に刻むこと

案内人 田中真介

上映作品『こんばんは』(二〇〇三年、森康行監督)

第九回 一〇月二〇日(火)

案内人 岡真理

上映作品『The Bicyclist / サイクリスト』

(一九八九年、モフセン・マフマルバフ監督)

第一〇回 十一月六日(金)

案内人 内田賢徳

上映作品『Un Dimanche à La Campagne (田舎の日曜日)』

(一九八四年、ベルトラン・ダヴェルニエ監督)

第一一回 十二月一八日(金)

案内人 江田憲治

上映作品『戦場のレキイエム』(二〇〇七年、馮小剛監督)

●平成二二年

第一二回 一月一五日(金)

テーマ 異国への帰郷—西洋史の幻と精神分析の夢

案内人 新宮一成

上映作品『新ドイッツ零年』(一九九一年、ジャン・リュック・ゴダール監督)

第一三回 二月二三日(火)

テーマ 「歴史」にとって人間の「生」とは何なのか?

案内人 池田浩士

上映作品『灰とダイヤモンド』(一九五七年、アンジェイ・ワイダ監督)

第一四回 三月一六日(火)

テーマ ジブシーに恋した日、現代バルカンが突き刺さった日

案内人 嶋本流(京都精華大学学長)

上映作品『ジブシーのとき』(一九八九年、エミール・クストリツァ監督)

第一五回 四月二八日（水）

テーマ 未来じゃない、ブラジルじゃない、それじゃ、いつのどこなんだ？

案内人 水野真理

上映作品『未来世紀ブラジル』（一九八五年、テリー・ギリアム監督）

第一六回 五月二〇日（木）

テーマ エロティシズムと歴史認識

案内人 小倉紀蔵

上映作品『風の丘を越えて』（一九九四年、イム・グオンテク監督）

第一七回 六月二八日（月）

テーマ 二〇世紀イタリアのマグダラのマリヤ

案内人 岡田温司

上映作品『マレーナ』（二〇〇〇年、ジュゼッペ・トルナーレ監督）

第一八回 七月九日（金）

テーマ 祇園祭に『祇園囃子』と溝口健二の女性像

案内人 神谷雅子（京都シネマ代表）、溝縁ひろし（写真家）

上映作品『祇園囃子』（一九五三年、溝口健二監督）

第一九回 一〇月二〇日（水）

テーマ 「家族」の中にただよう「愛」と「悲しみ」

案内人 佐伯啓思

上映作品『東京物語』（一九五三年、小津安二郎監督）

第二〇回 十一月五日（金）

案内人 川島昭夫

上映作品『ビッグマリオン』（一九三八年、アンソニー・アスクイス、レスリー・ハワード監督）

案内人 川島昭夫

第二一回 十二月三日（金）

テーマ 創造的であるには？ 独創的であるには？

案内人 小木曾哲

上映作品『扉の向こう』（二〇〇四年、是枝祐和プロデュース）

●平成二十三年

第二二回 一月二七日（木）

テーマ パリが貴方を待っている

案内人 大塚典子（女性研究者支援センター）

上映作品『パリ・ジュテーム』（二〇〇六年、アレクサンダー・ペイン他監督）

第二三回 二月二一日（月）

テーマ なつかしいパリを獅子座の男と放浪してみよう

案内人 伊從勉

上映作品『獅子座』（一九五九年、エリック・ロメール監督）

第二四回 三月一六日（水）

テーマ 終わりの始まり

案内人 阪上雅昭

上映作品『イエローサブマリン』（一九六八年、ジョージ・ダニング監督）

第二五回 五月二七日（金）

テーマ 大地にとって人間とは何か

案内人 岡真理

上映作品『アレクセイと泉』（二〇〇二年、本橋成一監督）

第二六回 七月七日（木）

テーマ カトリシズムと性と日常の中の狂気あるいは超現実

案内人 多賀茂

上映作品『砂漠のシモン』（一九六五年、ルイス・ブニエル監督）

『人環フォーラム』編集委員会からのお願い

『人環フォーラム』誌は「書評」「人環図書」「瓦版」の記事を掲載する欄を設けています。「書評」と「人環図書」では、本研究科の出身者の方々の新著もご紹介しております。「瓦版」は、研究科の活動を内外の方々に伝達するものです。紹介したい記事がありましたら、原稿を平成二十三年十二月末日までに編集委員会宛にお寄せください。委員会で検討のうえ、三〇号（平成二十四年三月刊行予定）または、三一号（平成二十四年九月刊行予定）に掲載させていただきます。

1. 「書評」については、ご著書を一冊、ご寄贈ください。
なお評者についてはご自身でお考えのうえ、お願いしてください。
2. 「人環図書」は、ご著書の内容を五〇〇字程度でおまとめいただき、表紙と奥付のコピーを添えてお届けください。なお、これは〈紹介〉であって〈宣伝〉ではありません。
3. 教官・院生の表彰、顕賞、受賞についてお知らせ下さい。

なお、掲載の採否は編集委員会にご一任くださいますよう、お願いいたします。

資料の送付先 〒六〇六八五〇一 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院人間・環境学研究科

『人環フォーラム』編集委員会

問い合わせ先―編集委員会事務局 〇七五―七五三二―九八四（T／F）

人環フォーラム

第 30 号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.30

巻頭言 吉田 忠

対談 〈詩〉は3・11をいかに語るか

若松丈太郎／岡 真理

特集 リスクと向きあう

吉田 純／小松賢志／鎌田浩毅／大滝雅之ほか

表紙写真
（撮影 間宮陽介 二〇一一年）
ネッカー川に架かるアルテ橋（ハイデルベルク）
裏表紙写真
ネッカー川の岸辺
（同右）
中国・漢時代の石刻画（張鴻修編著『陝西漢畫』 三秦出版社、一九九四より）
裏表紙背景
宮崎興二名誉教授提供

編集委員会

委員長
副委員長
委員

小問安石岡勝瀬多中立道宮林
宮倉部川飼 又上賀木嶋野坂下
陽紀 尚真直雅浩 秀節眞昭達
介浩 理人昭彰茂樹子理廣明

人環フォーラム

第29号

平成二十三年九月二〇日発行

編集『人環フォーラム』編集委員会

発行 京都大学大学院人間・環境学研究科

〒606-8501 京都市左京区吉田 本松町
FAX 〇七五・七五二・六六九四

印刷製本 朝北社プリント社

編集後記

昔、映画論の博論審査に関わったことがある。論文末尾の参考文献には映画のビデオがずらりと並んでいて、審査が一段落すると、委員会は俄然、映画の話で盛り上がった。「ところでMさん、最近どんな映画観た？」と委員長に振られた私。「最近ほとんど観たのはキン・肉マンだったかなあ、いやセーラーMoonだったかも」。

子供たちの熱気であふれた映画館はなつかしい。昭和三十〇年代は時代劇の全盛期で、毎週新作が封切られていたと記憶する。しかも二本立てで三本立てで。私の家から五分と行かないところに東映の封切館があり、ほとんど毎週、映画館に通った。四〇円の料金は子供にとっては大金だったが、背に腹は代えられない。時には母親の財布からこっそり拝借することもあった。もうやめようと思っても、予告編の「近日公開、乞う御期待！」の文字が躍るのを見ると、また決意を新たにするのであった。「きんにくまりん、ごーふあい」と館内総立ちで主題歌に合わせて歌う子供たちもいれば、チャンバラ映画にうつつを抜かす子供たちもあった。しかしそれも、遠い昔の話しになってしまった。

(M・Y)



HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM